
現実サーガ

光太郎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

現実サーガ

【Nコード】

N7272C

【作者名】

光太郎

【あらすじ】

吉川美琴、中学三年生。登校時の彼女の持ち物は、鞆と携帯電話と家の鍵と　ダガーとタリスマンとアミュレット。彼女は、ある日突然、ゲームと融合した世界の勇者になってしまったのだ！果たして、勇者美琴は、魔王を倒すことができるのか！？　現実主義でやる気ナシの勇者と、それを導くホスト、金髪金持ちゲーマー、喧嘩無敵のヤンキーが織りなすリアルなサーガ。【2007年9月執筆】

1 「君が、主人公だ」

今日もまた、いつもどおり、非日常的な日常が始まる。

吉川美琴は、きつく、靴ひもを締め直した。

あの日から、革靴は履いていない。何が起こるかわからないから、ごく普通の私立中学に通う彼女の、午前八時十分の標準装備は、イマドキの子にしては長いスカートのセーラー服と、教科書やらが入った紺色の鞆、忘れてはいけななのが携帯電話、家の鍵、それと、小さなダガーとタリスマン、アミュレット。あと煙玉。

「……よし」

寝癖なのかファッションなのか判断の難しい、四方に跳ねたショートボブを揺らし、自分に確認するように、小さく呟いた。
「行くぞ」

握りしめた両の拳を、うしっ、と手前に引く。美琴なりの、気合いの入れ方だ。

目の前に、ドアノブ。

あとは、これをくいつとひねって家を飛び出して、学校まで走るだけ。

そのまま、三分が経過した。

「ミコトくん、いいたかないけどさ」

玄関に突っ立っていた白髪の男が、淡々と口を開いた。

見た目には二十代半ば。黒スーツに黒ネクタイを見事に着こなしている姿は、まるでホストのようだ。そうでなければ化粧品か矯正下着のセールスマン。要するに、胡散臭さを醸し出している。

彼の名は田中。

美琴は、彼の下の名を知らないし、聞いてみようと思ったこともない。ただ、「田中です」と名乗られたので、田中と認識している。

それだけの関係だ。

「わかってます」

長身を見上げることはせず、そう言葉を返す。

田中は、ああそうとあっさり引き下がったあと、美琴がぴくりとも動かないので、やはり告げることにした。

「遅刻するよ」

「わかってますってば！」

ひとの気も知らないで とは、いわなかった。いつても無駄だと知っているからだ。

美琴は息を吸い込んで、ドアノブに手をかける。ビデオを早回ししたみたいに、勢いをつけてドアを押し開け、急いで閉めて鍵をかけた。するりと、田中も続く。

季節は夏ど真ん中。雨の気配はなく、日差しが暑い。

しかし美琴には、空を見上げる余裕も、年頃の少女らしく日焼けを気にする余裕も、皆無だった。

くるりとドアに背を向け、ぐっと右足で踏みきり、走り出した。

学校まで、猛ダッシュで十分。今朝見たテレビによると、本日の矢那呉市のモンスター確率は五十パーセント。

もし出てきたら、ザコならダガーで応戦。基本的には煙玉で逃走だ。値の張るタリスマンを身につけているから、エンカウント率は下がっているはずだが、油断はできない。

開かずの踏切が開く奇跡を待つつもりは毛頭なく、歩道橋を駆け上がる。さらにスピードを上げて階段を下り、コンビニの横も走り抜け、中間地点まで来たあたりで、美琴は足を止めた。

泣きそうになった。

道の真ん中に、白くて小さな、猫のような生物が三匹。

「あー、出て来ちゃったねえ。残念」

ぜえぜえと肩で息をする美琴とは対照的に、寝起きのようなテンションで田中がつぶやく。

「さあ、どつする、ニコトくん」

「決まっています」

美琴は迷わず、鞆の外ポケットから小さなボール状のものを取り出した。煙玉、定価千円。

「逃走ーっ！」

叫ぶと同時に、アスファルトに向かって投げつけた。ピンク色の煙が吹き出すのを確認する間もなく、そのまま白猫の横を走り抜ける。

猫のようなそれは、ホワイトキヤトビ。生命值一二の、ザコ中のザコ。

世間一般で、モンスターと呼ばれる類の生物だ。

ザコならダガーで応戦する、と前述したが、あくまでそれは美琴の心意気であって、現実がそのとおりになるとは限らない。

装備からもわかるとおり、美琴は元々、本当は、モンスターと戦う気などほとんどなかった。というより、逃げる気満々だった。

彼女の、唯一の武器装備は、ないよりましと田中にもらった初心者向けダガー。刃渡り二十センチにも満たない、小さな小さな短剣だ。装飾品装備は、敵との遭遇率を下げるタリスマン（定価九万の高級品）と、万が一モンスターに遭遇した際に回避率を上げるアミレット（定価四万のまあまあ高級品）、あとは道具として、逃走率を九十パーセントまで引き上げる煙玉十こ。

吉川美琴、十五歳。

彼女は、ご近所さんや同級生たち……のみならず、ここに暮らすすべての人間たちとは違い、モンスターと戦う知識も、度胸も、もちろん経験もなかった。

少し前までは、本当にどこにでもある中学の、どこにでもいる中学生だったのだから。

いや、正確には、『どこにでもある中学の、どこにでもいる中学生』だという事実は変わらない。

彼女が、おかしな世界に紛れ込んでしまったわけではない。

彼女だけを取り残して、世界が、変わってしまったのだ。

「なんで、なんでこんなことに……。私の日常を返して　！」
何度目かわからない、魂の叫びを入道雲にぶつける。すぐ隣から、
答えは返ってきた。

「なんでって……。だから、ミコトくんは勇者だからでしょ。しっか
りしてよ、そんなんで世界が救えるのかね」

「その、勇者っていうの、やめてください……」
悲痛な声で、美琴は切願した。

そもそもの始まりは、七月二日。

まだ梅雨明けもしておらず、降水確率二十パーセントなのに朝か
ら雨が降っていたあの日。

両親ともに出張中のため、ひとりで二階建ての一軒家を任されて
いた美琴は、いつものように七時に起きて、着替えて、買い置き
のパンを食べるために一階へ下りた。

冷蔵庫から微糖のパックコーヒーを出して、牛乳と一対一で混ぜ
る。食パンは焼かずにそのまま皿に出し、テーブルに置く。

さあ食べようとしたときに、チャイムが鳴った。

まだ午前七時半。変だな、とは思った。

とはいえ、無視するという発想はなく、ドアを開けてしまった。

開けなければよかったと、後に美琴は激しく悔やむことになるが、
このときはやはり寝起きということも手伝ったのか、モニターで確
認するとか、覗き穴から見てみるとか、そういうことは一切しな
かった。

「どうも、おはようございます」

立っていたのは、世の胡散臭さを体現したような、黒スーツに白
髪
の男。

雨だというのに傘も持たずに、しかし濡れた様子もなく、ひよろ
りとそこにいた。

戸惑う美琴をよそに、おじやましますとかいいながらずかずかと
上がりこみ、リビングのソファに勝手に座って、そこでやっと「あ、

忘れてた。田中です。どうも」と名乗った。

美琴は、何か非難めいたことをいおうと口を開けたものの、うまく言葉が出てこずに、田中を見やった。

これは誰だろう？

当たり前のように上がり込み、平然と名乗ったところからすると、親の知り合いなのだろうか？

「両親に、用ですか？」

結局出て来たのは、そんな間の抜けた問いがひとつだった。

それでも、両親はいないというのは伏せておく。子どもひとりだと知られるのも危険かと思ったのだ。しかし田中は、問いには答えず、マイペースに名刺を差し出した。

『世界管理委員会 田中』と書かれた、白く味気ない名刺。

「……なんなんですか？」

根本的な問いしか出てこない。

田中は、テレビ下の収納に流行りのゲーム機を確認すると、

「『ティピカルサーガ』って知ってる？」

いきなり世間話的なことを始めた。

「……き、聞いたことはあります、けど……。わたし、ゲームはほとんどやらないので」

「ああ、そうなんだ？ じゃ、『ティピカルサーガ』ってどういうゲーム？」

何がどうなって「じゃ」とつながるのかわからない。人間というのは、混乱するととりあえず投げられた質問に答えてしまうものなのか、それとも単に美琴の気が動転していたのか、美琴は馬鹿正直に『ティピカルサーガ』について知っている知識を引き出していた。「ニュースで取り上げられるぐらい人気の、ゲームソフト……ですよね？ 発売日の前日から、ゲーム屋の前にすごい行列ができたって。確か、この前出たのが三作目で……、えと、見たことはないけど、アニメも人気で、グッズもすごい売れてるとか」

美琴が生まれるより十数年も前に売れ始めた、ディーダ社の『

ファイン』というゲーム機。当初は、サイズも大きく場所を取る割には、現代の携帯電話にも劣るほどのゲームしかできなかったが、それでも家庭でテレビを使ってゲームができるというのが話題を呼び、日本のみならず、世界中の子どもたちが欲しがったといわれている。その後、数多くのゲーム会社が設立され、たくさんハードが売り出されたものの、依然としてトップをひた走っているのは、やはりデーダ社だ。

現在売れているのは、『ファイン』が何度もモデルチェンジを繰り返し、初期型とは比べものにならない性能を誇る『ファイン・ファイン』というゲーム機だ。本体価格が五万円もするのに、いまや一家に一台といわれている。幼児向け、学生向け、大人向け、老人向け、と各世代に対して考え尽くされたソフトを出しているのが、勝因だろう。

『ティピカルサーガ』というのは、その『ファイン・ファイン』対応のゲームソフトだ。プレイヤーが勇者になって、悪の魔王を倒すという使い古されたシナリオながら、そのシンプルさが全世代に受けている。もともとゲームをやり込んでいるゲーマーの間でも、奥の深いシステム、自由度の高さが話題となり、発売日前日には徹夜組が出るほどの人気シリーズとなっているのだ。

美琴は、懸命に『ティピカルサーガ』について思い出していた。そういえば、クラスでもよく話題になっている。隠れボスを倒したのだの、レベルがいくつまで上がったのだの。

「困るんだよねえ、そういうの」
質問を投げておきながら、田中はそれ以上の答えを待たず、大げさな仕草で肩をすくめ、ため息を吐き出した。

自分の答えが悪かったのだろうか、美琴は思考を中止して、田中を見る。思いがけず目が合って、目を逸らすタイミングも逃してしまっただ。

軽い声とは裏腹な、深い、漆黒の瞳。思わずどきりとする。それは、特別な感情というわけではなく、恋もしたことのない十

五歳の少女にとつては、当たり前のとキメキだった。しかし田中は、ニヤリを笑みを見せ、

「なに、ニコトくん。僕に惚れた？ いけないな、ヤケドしちゃうよ」

実に萎えるセリフを吐いた。

「なにが困るんですか？」

「あれ、流しちゃうの？ つまんないな」

トキメキは増すどころか一気に冷めた。そのことに感謝すらしつつ、美琴はあきらめてダイニングの椅子に座る。話を聞くにしろなんにしろ、動きながらでないと遅刻してしまう。

「世界ってというのはさ、ひとつしかないと思う？」

質問を重ねながら、田中もまた美琴の向かい側に移動した。

「……さあ。なんでもいいです」

「僕も食べていいかな」

「どうぞ」

長い指が、美琴の皿から半分にか切られた食パンをさらった。その目が牛乳パックを見つめたので、美琴は無言で立ち上がり、自分のカフェオレも用意する。

「結局、あなたはなんなんですか？」

「だから、その話をしてるところでしょ、いま」

「……？」

美琴は眉をひそめながらも、朝食の続きにとりかかる。食パンをもぐもぐしながら考えた。

彼の話題といえば、『ティピカルサーガ』と、哲学的なおかしな質問ぐらいだ。

「……世界、管理委員会」

名刺に記されていた言葉をつぶやいた。

世界管理委員会という、謎の組織からやってきた、ホストのような男。ゲームの話と世界の話

美琴ははっとした。

「宗教！」

「違う違う、そういうんじゃないよ。お金も取らないし。ってか、お金ないでしょ？ お家のひともいないでしょ？ この家に君しかないからって、やましいことをしようっていうのでもない。ちゃんと仕事で来てんだよ」

美琴はもう一度、彼を見た。

両親が不在であることなど、とつくに知っていたらしい。それどころか、今更だが、どうして名を知っているのだろう。

見るからに胡散臭いの、なぜか追い出そうという気にならない。加えていうなら、この男が自分に何かよからぬことをするという場面が思い浮かべられないほど、奇妙な安心感のようなものさえあった。

他では見たことのない、真っ白な髪。深く黒い瞳。

そこまで考えて、美琴は気づいた。

どこか、人間らしくないのだ。

「世界っていうのはね、君には想像もつかないくらい、無数にあるんだ。世界認定基準っていうのは、まあ細かくいえばたくさんあるけど、基本的には、君の知っている世界は全部実際にあると思っ
ていい」

美琴は、ゆっくりと瞬いた。

「……わたしの知ってる世界？」

「ゲームはしなくても、本は読むでしょ？ マンガとか小説とか。

小さいころはテレビアニメだって見てただろうし、いまでも映画と
か見るでしょ」

美琴は眉根を寄せた。

「怪獣が街を破壊する世界とか、魔法を使う女の子がいる世界とか
？」

「そう。ひとつのタイトルにつき、ひとつの世界。君の暮らすこの
世界の人間はね、僕らにとっではいい迷惑なんだけど、世界をどん
どん量産してるんだ。もうずっと昔からね。空想だと思って、フィ

クシヨンのつもりで世界を作って、本や映像にして世に出すんだらうけど、基準以上の人間がそれを認識すれば、世界は実際に生まれる。それを管理するのが、僕の所属する、世界管理員会の仕事だ」
美琴は、ゆっくり、できるだけゆっくり、カフェオレを口に流し込んだ。

「ごくり、と飲み込む。」

「はあ、そうですか」

何かを期待していたらしい田中は、不満げな顔を隠そうともしない。

「信じてないでしょ」

「そういうわけでもないですけど……なんていうか、自分には関係ない話なので」

突拍子もなさすぎて、リアリティがないのは確かだが、関係ないというのも本当だった。

たとえば美琴は、サンタクロースの存在そのものは否定しない。世界のどこかにいて、世界のどこかの子どもにプレゼントをあげているのだろうと思っている。というより、別にそれでかまわないと思っている。ただ、自分にプレゼントをくれたのは、サンタクロースの名を語った両親であったし、多くの場合がそうであると知っている。テレビに登場するサンタクロースも、サンタクロースに扮した外国のそれっぽいおじいさんだと、知っている。

真実を知っているが、夢物語を否定するつもりもない。

つまりは、そういうことだ。目の前の田中が語ったファンタジーな話が真実だろうと、虚実だろうと、かまわない。

「……ちよつとクールすぎない？ いまどきの子はみんなそんなんなの？」

「そうですか？ で、そのたくさんある世界がなにか？」

「……うーん。まあいいか」

なにか予定と違ったようだったが、田中はそのまま話を続けた。
「基準以上の人間が認識すれば、世界は生まれるっていったけどね、

これが結構細かいルールで決まってるんだよ。単純に人数の問題じゃない。いくら一千万人が認識していても、ひとりひとりの認識が小さすぎたら、世界は形成されない。逆に、たった百人でも、ひとりひとりが朝も夜もそればっかり考えるぐらいに支配されていれば、その世界は空想したとおり構成される。というより、空想ではなくなるわけだ」

「その話、歩きながらもいいですか？」

もう、美琴は、とりあえずは彼の話の聞こえという気になっていた。とはいえ、このままゆっくり聞いていては遅刻してしまう。

一度二階に上がり、紺色の味気ないスクールバックを手に戻ってきた美琴は、田中には注意も払わずに、部屋の明かりを消していった。留守番電話をセットして、最後に濃い茶色の革靴に足を入れる。「学校行くの？ なんかの準備もなくて平気？」

「準備ならしてます、ちゃんと」

それどころか予習もばっちりだ。田中は、意味ありげな笑みを見せたが、気にせず美琴はドアを開ける。

雨は止んでいたが、いつまた降り出すかわからない天気だ。空気に針を刺したら、破裂して水があふれ出しそうぐらいにじっとりとしている。

美琴はオレンジ色の傘を持ち、田中にも予備のビニル傘を手渡した。

「えーと、どこまで話したっけ？」

「世界が生まれるってことです」

だいぶ省略したが、思い出したようだった。傘を振り振り歩きながら、田中は続けた。

「そうそう、それで、『ティピカルサーガ』の話になるわけなんだけど」

ちらりと、美琴は隣の田中を見上げる。

本当についてきた。そうまでして、聞かせたい話なのだろうか。

「いまの話だと、『ティピカルサーガ』の世界があるってことです

ね。立派なのが」

「そう、そういうこと。知ってる？ いまや十億人以上が『ティピカルサーガ』を認識してるんだ。十億だよ、十億。ことの重大さがわかるでしょ」

といわれても、いまいわからなかった。

そもそも、十億という数字が大きすぎてぴんとこない。世界人口は確か六十億を超えているはずだから、六分の一程度ということだろうか。世界中で六人に一人、といわれれば、すごいような気がする。

美琴は、ちよつと考えた。

「それで、そのゲームの世界ができていることが、なにかまずいんですか？」

当然、そういう疑問につながる。

「ん、いい質問だね、ミコトくん。別にね、それ自体はまずくなくったんだけど、なにせこれだけ多くのひとから認識されて、熱狂的なファンまで世界中にいるってのは初めてだからね、イレギュラーな事態が起こっちゃったんだよ」

「……なにかまずいっていう展開になるわけですね。あ、信号赤ですよ」

車の姿のない小さな交差点だったが、律儀に美琴は足を止めた。

おっと、と田中もブレーキをかける。

「そもそもね、ミコトくんの住むこの世界のひとたちのどれだけが自分たちの世界について考えてると思う？」

「また質問ですか」

言外に答えを拒否。田中は、特に答えは期待していなかったよう
で、ため息を吐き出して首を振った。

「特にこの国はひどいね。ゲームに心酔する人数はものすごく多いのに、基盤となる自分の世界のことを考えている人数なんてスズメのナミダ」

青になったので、美琴はすたすたと歩き出した。なぜ自分は、朝

っばらから説教を聞いている気分になっているのだろう。

「こっからが本題だよ」

「やっつですか」

横断歩道を越えたところで、田中は美琴の前に回り込むと、人差し指を突き出した。その指を、地面に向ける。

「つまりね、バランスが崩れてしまったんだ。まさに、この国から行く手を阻まれ、美琴は立ち止まった。

彼の声音が少しだけ真剣みを帯びていた。漆黒の瞳を見上げる。

「この世界と、『ティピカルサーガ』の世界は、混ざり合ってしまった。二つの世界は、もう完全に、融合してしまっている。いまそのことを知らないのは、君だけだ」

意味がわからず、美琴は田中の言葉を反芻した。

知らないのは、わたしだけ

「なにか質問は？」

といわれても、言葉が出てこなかった。
ばかばかしい。

質問するにしろ、なにを聞けばいいのかわからない。

「わけがわかりませんし、信じられません。事実、わたしはいつもどおりに起きて、いつもどおりに学校に行くところですよ」

「でも今日は僕が来た」

その論法は卑怯だった。美琴は大きく息を吐き出した。

「結局、あなたは、なんなんですか？」

その質問に戻ってくる。ふむ、と少し考えて、田中はなにやら閃いたのか、悪童のように笑った。

「君にとっての、ゲームマスターってどこかな」

「……ゲームマスター？」

「プレイヤーを導く役回りだよ。僕は君を導くために、世界管理委員会から派遣されたんだ」

「プレイヤー？ なんの？ そのゲームの？ 導くってどこに、と続くはずの言葉を飲み込んでいた。」

田中の向こう側の、道脇にある小さな公園から、得体の知れないものがのそりと姿を現していた。

ひどく太った猿のようにも見えたが、美琴の知るそれよりもずつと毛むくじゃらで、大きく、うす汚れていた。なにより、大きな猿だとしても、それが公園から出てくるなど言語道断であった。

美琴は完全に言葉を失っていた。逃げることも思いつかなかった。ただ、自分よりも大きな毛むくじゃらのそれがゆつくりとこちらを向き、目が合ったとき、初めて危険だと感じた。

「そ、……う、あ……」

それはなに、うしろを見て、危ない　なにひとつ言葉にならない。

「ほら、出て来た」

頭にくるほどあたりまえのテンションで、田中がそれを見た。

「だいじょぶ、最初だから僕がやるよ。じゃーん！」

気の抜けるかけ声とともに、スーツのポケットからタバコの箱を取り出す。タバコを一本取り出すような仕草をしたかと思うと、右手を思い切り上に引き上げた。

美琴は、本気で、ものすごく長いタバコが出て来たのかと思った。箱のサイズを完全に無視して出て来たのは、ファンタジー映画で見るとような古びた長い剣だった。といっても、ずいぶんと細い。大きな針のようだ。

「マイ武器、レイピア」

わざわざうしろを振り向いて、美琴に紹介する。

驚けばいいのか褒めればいいのか悲鳴をあげればいいのか、もう美琴にはまったくわからない。ただ、頭の端っこで、奇妙に冷静な自分が、うっすら理解し始めていた。田中のいったことは、たぶん、本当のことなのだ。

反応がないことにつまらなそうな顔をしたものの、田中はけむくじやらの生き物に向き直り、手にした武器を軽々と構え、躊躇なく刺した。

切ったのではない。生き物の額の中央を、まっすぐに突き刺したのだ。

けむくじゃらのそれは、悲鳴も上げなかった。血が飛び散ることもなかった。突き刺した部分から穴が広がっていくように、瞬く間に暗闇に支配され、それは消えた。まるで、画用紙の上で黒く塗りつぶしたように。

コトリと、小さな青い石がアスファルトに転がって、暗闇も溶けてなくなった。

「……はっ」

息を吐き出したことで、自分が呼吸もできずにいたことに気づいた。力が抜け、美琴はその場に崩れるようにへたり込む。

「だいじょーぶ？」

しゃがんで美琴の顔をのぞき込む田中の手には、もうあの剣のようなものはなかった。美琴は、ゆっくりと酸素を吸い込む。

「……世界が……」

手の甲で汗を拭い、もう一度息を吸った。

「混ざって、いるから……？」

「そう」

ものわがりのいい生徒を見るように満足げに、田中は美琴の頭に手を乗せた。思わず、びくりとしてしまう。あの生き物に、剣を突き刺した手だ。

「さっきのは、『ティピカルサーガ』のモンスター。名前はドーアント、生命値は一〇〇〇。魔力はないけど、腕力があるから危険だね」

「殺したんですか」

非難するつもりもなく、ただそう聞いた。

「ゲームだよ、ミコトくん。あれが、『死んだ』ように見えた？ ゲームでは、ふつう、『倒す』っていいかたをするね。亡骸も残らないし」

腰を上げ、青い石を拾い上げた。

「 お金になる。これを店に持っていけば、換金できるよ。この世界の人間が考えるRPGってのは、大抵そういうシステムだ」
つまり、本当に、ゲームなのだ。

自分が、ゲームの世界に紛れ込んだのではないというのは、わかっていた。自分の家も、ここから見る景色も、なにひとつ変わらな

い。
ゲームの世界そのものが、やってきてしまったのだ。

「ミコトくんにとって、この状況がアタリマエじゃないのはね、君がゲームでいうところのプレイヤーだからなんだ。さっきいったでしょ、知らないのは君だけだって」

「……プレイヤー」
ぼつりと繰り返した。

テレビの前にすわって、ゲーム機の電源を入れて、コントローラを握る人物のことだ。

それが、わたし？

「世界が混じり合っているから、君が主人公を操るわけじゃない。ミコトくん、まさに君が、主人公だ」

耳を疑った。

もうなにを聞いても驚くまいと思っていたのに、驚きの次元すら超えていて、眉一つ動かさなかった。

しばらくたって、ゆっくりと顔を上げた。美琴は、なぜか機嫌の良さそうな田中を見た。

このひと、絶対DSだ そんな妙な確信を持った。

「さあ、立ち上がれ、勇者ミコト！ 魔王をやっつけよう！」

高いテンションに目眩を覚え、美琴は二度と立ち上がれそうになかった。

2 「パーティーに加えてよ」

「イヤです、わたし、勇者なんて無理。魔王なんて倒せません。他当たってください」

ひとしきりシヨックを受けた後、とりあえず立ち直った美琴の出した結論はそれだった。

田中は、それでもいいけど、とあっさりといい、それからこう付け加えた。

「それでもさ、悪いけど、君がプレイヤーだという事実は変わらな
いんだ。勇者が魔王を倒さなかつたら、世界はどうなると思う？」

ゲームをやらない美琴でも、その答えはなんとなく想像できた。

世界が滅ぼされるとか、魔王に支配されるとか……とりあえず、
人間たちにとって良い結果にはならないのだろう。

それでも、美琴は、「やります」とは決まっていえなかった。

田中は田中で、美琴にくつつくことをやめようとはしなかった。

そうして、いまに至る。

「今日のモンスター確率は夕方から上昇するらしいから、学校に残
ってないでできるだけ急いで帰れよー」

富北沢中学校三年二組担任の木下鉄二は、あたりまえのようにそ
う告げて教室から出て行った。

「ねえねえ、駅前に新しいシヨップができたの知ってる？」

「マジで？ じゃあまたアミュレット買っちゃおうかなー。武器も
かわいいの欲しいんだ」

色恋とファッションにうるさいクラスメイト二人が、あたりまえ
のようにきやいきやいと話しながら帰って行った。

「なあ、おまえいまレベルいくつよ」

「なんだよ、おまえこそどーなんだよ」

「おまえが教えたらいう」

「ぜってーやだ」

好きな子がだれなのか探り合うようなテンションで、あたりまえのように男子たちが騒いでいた。

以前と変わらないように見えながら、確実に変わってしまったクラス風景。美琴は、スクールバッグに教科書やらノートやらを入れながら、ぼんやりと物思いにふけていた。

今日は七月十六日。あの日からもう、二週間も経った、けれども……慣れない……」

絶望的な気持ちでつぶやく。

田中のいっていた、『知らないのは君だけ』というのは、まったくそのとおりだった。あの日、学校にたどり着くと、クラスメイトたちはモンスターや武器防具の話題に花を咲かせていたし、教師はモンスターに注意するようにと呼びかけていた。

まるで、もうずっと昔から、世界がこうであったかのように。

「はあ……」

「まーたため息ついて、ミコっちゃんったら。そんなんじゃ、ダークポイズンにとりつかれるゾ」

クラスメイトの中原理恵が、モンスターの名を流暢に日常会話に織り交ぜつつ、声をかけてきた。友人の少ない美琴だが、彼女とは仲が良いほうだ。おさげのまぶしい、まん丸眼鏡の社交派。

「……慣れない……」

もう一度つぶやく。

そのいいまわしの意味がわからない。美琴には、ダークポイズンというのがどういうモンスターなのかもわからないのだ。

「最近暗いねえ、ミコっちゃん。例のホストな彼氏とうまくいってないの？」

二週間前から美琴につきまとっている田中は、クラスのなかではすっかりそういうことになってしまっていた。登校時も学校までついてくるし、帰りも迎えに来るのだ。もう、否定するのも面倒くさい。彼氏どころか、いまだに下の名も知らない薄っぺらい関係だと

いうのに。

「うん、まあ、そんなとこ」

なにもかも億劫で、適当に答える。

「元気出しなよー。ほら、ゲームでもやってさ。ミコっちゃん、この前さ、なんか変なゲームのことだったでしょ？ あれ、やっぱり実在するらしいよ。そんなマニアックなの、ミコっちゃんが知ってるなんて意外だったけど」

急に、けだるさが吹き飛んだ。

「『ティピカルサーガ』？」

「あ、そうそう、それ。……なに、どしたの」

目を見開き、ただならぬ様子で食いついてきた美琴に、中原理恵は思わず身構える。しかし美琴にしてみれば、まったくただごとではなかった。『ティピカルサーガ』が実在すると、彼女はそう思ったのだ。

世界がおかしくなったあの日、登校した美琴は、友人である彼女に『ティピカルサーガ』について尋ねたのだ。しかし、プレイしたことがあるどころか、名前さえ知らなかった。不審に思い、すぐに携帯電話のインターネットで検索したところ、一件のヒットもなし。どういふことかと問いただと、世界が融合したから、『ティピカルサーガ』の存在そのものがなかったことになっているのだと、田中はそういつていたのに。

「どこで聞いたの？」

はやる気持ちを抑えて、慎重に聞いた。

「お兄ちゃんゲームやるからさ、聞いてみたの。お兄ちゃんは知らなかったけど、クラスのひとがそのゲームについてなんかいったんだって。そのひとはすごいゲームーらしいよ」

「……どういふことだろう」

思わず口に出してしまう。中原理恵がきょとんとしていたが、お礼だけ告げると、残りの荷物は一気に鞆のなかにつつこんで、美琴は急いで教室を出た。

田中に聞いてみなくては、という気持ちと、とにかくそのゲームというのに会ってみたいという気持ちとが、同じぐらいにふくらんで、美琴を急かしていた。絶望と諦めと、得体の知れない妙な焦りに支配されていたこの二週間で、初めて見えた光のような気がした。

この富北沢中学のすぐ隣に、エスカレーター式の富北沢高校がある。中原理恵の兄は、確かその二年生だ。

階段を駆け下りて、下駄箱から運動靴を乱暴に取りだし、スリッパを放り込む。靴ひもを締めるときときだけ慎重になったが、どうしようもなく、気が焦っていた。

「ミコトくん、迎えに来たよ」

校舎から出てすぐのところ、黒スーツの田中が立っていた。軽いテンションに、多少ムツとする。

「なんで学校の敷地内にまで入ってきてるんですか」

怒りのオーラを感じ取って、田中は少したじろいだようだった。

「だって、別にだれも止めなかったし。なに怒ってるの？」

美琴はちよつと考えたが、結局、さつき中原理恵から聞いた話をそのまま田中に伝えた。田中はおもしろそうに目を細め、なるほどねえ、とつぶやく。

「世界の融合ってのは、現象事態がイレギュラーだから、そういうこともあるんですよ。そのひとつと、話しを試してみたらいいかもね。

どのみち勇者はひとりじゃ魔王を倒せないし」

最後の言葉に、美琴は眉を寄せた。つまり、仲間になってくれるひとを探さなくてはいけないということだろうか。

「そのひとに手伝ってもらえるよう、頼めってことですか」

「そういう展開もありんじゃないかってね」

といわれても、そもそも美琴には勇者業をまっとうする気がないのだから、関係のない話のように思えた。

「高校に行ってみます。もしかしたら、まだ学校に残ってるかも」とにかく、この異常な世界が異常であると認識できる人物と、会

つてみたかった。この二週間、もしかしたらおかしいのは自分のほうなのではないかと思うことが、たびたびあった。そういう意味では、客観的にものをいってくれる田中の存在は大きかったが、彼だけでは、なんとというかいまいち信用に欠けるのだ。

「ぼくも行っていいかな」

「ダメっていったら来ないんですか」

「行くけどね」

じゃあ聞くなよと思ったが、いわないでおく。二週間の付き合いで、田中という人物はだいたいわかった。見た目どおり、軽くてうさくさくて、変に頑固で、ゴーイングマイウェイ。あと、ドS。

どういう仕組みなのか美琴にはわからないが、学校や店、家のなかなどには、モンスターは出現しないものらしい。出現するとしたらイベント的なことだね、と田中はいつていたが、それもよくわからなかったので、要するに建物内は安全なのだろうと認識している。富北沢中学と高校は、正門こそ別々に存在しているが、中庭が共有スペースとなっていて、わざわざ出なくてもお互い行き来できるようになっていた。なので、モンスターに遭遇する心配はない。

「今日のミコトくんはアグレッシブだねー」

ずんずんと進む美琴の後ろを歩きながら、田中がそんな感想をもちます。アクティブの間違いじゃないのかと思ったが、やはりわざわざざつっこむようなことはしないでおく。

中庭を通り抜けると、周りはブレザー姿の高校生だらけになった。美琴のセーラー服は明らかに浮いていたが、めげずに校舎へ入っていく。確かにアグレッシブかもしれない。

「どこのクラスか知ってるの？」

「知るわけないじゃないですか。名前も知りません。片っ端から聞きます」

「おー、やるな、ミコトくん」

中学生が紛れ込んでいるだけならまだしも、スーツ姿の白髪の男も一緒とあって、二人は注目を浴びまくっていたが、その目立ち具

合に、かえって美琴は肝が据わった。とりあえず二年一組のドアから顔を出し、いままさに帰ろうとしていたお姉さん集団を捕まえる。「あの、ちょっといいですか」「ちよっと声がうわずった。

「なに？ わ、初々しいー。だれか呼ぶ？」

くるくるパーマの美人さんは、ずいぶんと友好的だった。それとも、もしかしたら、こうやって中学生が訪ねてくることはそんなに珍しくもないのかも知れない。富北沢は、中学生と高校生の合同イベントもさかんに行われるような校風なのだ。

「『ティピカルサーガ』っていうゲームについて、知っているひとを探してるんですが」

お姉さんたちは、知ってる？ とそれぞれ顔を見合わせる。なかのひとりが、わざわざお兄さんたちにも声をかけてくれたようで、背の高い男子生徒がひとり、心当たりがあるふうにやってきた。

「桜井じゃね？ 二組の。ゲーマーっていうえば、あいつだろ」

「有里沙かあ、いつてたかも、なんかそんなこと」

「あー、それあたしも聞いたよ、だれも知らないゲームでしょ」

なにやら、盛り上がり始めた。どうやら、桜井有里沙という人物が、『ティピカルサーガ』について知っているらしい。中原理恵の兄の知り合いで、ゲーマーということから、てつきり男だと思っていたので、美琴にとっては嬉しい誤算だ。女性のほうが話しやすい話しがまとまったようで、くるくるパーマさんが美琴に向き直った。

「たぶんね、二組の桜井有里沙のことだよ。あの子、なんでだれも知らないのー、って怒ってたから、喜ぶんじゃないかな。パソコン屋にいますと思うよ。一階の、職員室があるよこの突き当たり」

最初のクラスでヒットするとは思っていなかった。美琴は傍目にもそうとわかるぐらいに歓喜し、顔を輝かせて、丁寧にお礼を告げる。廊下で、ばっちり化粧をしたお姉さん衆からなにやら質問攻めにあっている田中は放っておいて、パソコン部屋なる場所へ向かった。

パソコン部屋と呼ばれていたが、いわれた場所にかかっていたのは『コンピューター室』という札だった。職員室の隣を通り抜けるとき、教師になにかいわれるのではないかとどきどきしたが、ありがたくも杞憂に終わる。中学生が高校内に入ってはいけないという決まりはないのだが、やはりどうやっても緊張はするものだ。

「入らないの？」

いつの間にかついてきていた田中が、美琴のやる気をそぐようなことをいう。眉根を寄せて彼を一瞥し、深呼吸をして、ゆっくり、ドアをノックした。

思ったよりも、大きな音が響く。数呼吸分の時間をおいて、ガラリとドアが開かれた。

ひやりとした空気が流れ出てきて、美琴は一瞬ひるむ。しかしそれよりも、顔を出した人物の様相に息を飲んだ。

金髪。異様に短いスカート。大きな、しかし鋭い目。

ヤンキー、という言葉が、瞬時に美琴の頭を支配した。

「……中学生？ と、ホスト？」

しかし、向こうは向こうで驚いているようだった。胡乱げに、じろじろとこちらを見てくる。

「なに？」

もっともな質問に、美琴ははっと気を取り直す。そうだ、ヤンキーだって人間だ。

「あの……桜井有里沙 先輩、ですか？」

「そうだけど。あたしに用？」

「わたし、中学三年の吉川美琴です」

一呼吸置いて、思い切って、美琴は口を開いた。

「『ティピカルサーガ』って、ご存じですか？」

桜井有里沙は、ぱちくりと、目を瞬かせた。まるで、いまなにをいわれたのかまったくわからないというように。

美琴は、じりじりと反応を待つ。もしかしたら、『ティピカルサ

「ガ』について知っているというのはなにかの間違いで、自分は勢いだけでとんでもないことをしているのではないだろうか、嫌な予感がよぎった。桜井有里沙という人物の前に立っていると、なんというか、取って食われそうな気分になってくるのだ。正直なところ、怖い。

「……TS、知ってるの？」

TSという言葉には聞き覚えはなかったが、『ティピカルサーガ』のことを指しているのだろうかという予測はついた。急いでうなずく。「ちよつと来て」

有里沙は、いきなり右手を伸ばして、美琴の腕をつかんだ。女性とは思えない腕力でパソコン屋のなかに引き込み、むりやり奥の椅子に座らせる。後ろから、黙って田中も続いた。ご丁寧にドアを閉めたりしている。

パソコン屋のなかには、肌寒いほどに冷房が効いていた。中学にあるコンピューター室と変わらない、無機質にデスクトップが並べられているだけの、味気ない部屋だ。

その奥の、まさにいま美琴が座らされたところには、見慣れない小型のノートパソコンが一台。有里沙の私物らしく、彼女は美琴の隣に座ると、慣れた様子でそれをいじり始めた。

「えーと……美琴ちゃん、だったっけ？ TSやったことがあるの？ TSがどういうのか、知ってる？」

ディスプレイを見つめたままで、ぽんぽんと質問を投げってくる。どう答えようか逡巡したが、美琴はおとなしく知っている知識をそのまま言葉にした。

「世界中で大ヒットしている、ゲームです。すみません、わたしはやったことはないですが……社会現象みたいになった人気ゲームですから、名前ぐらい、知ってます」

「ステキ！ あたし、自分がおかしくなったのかと思った！」

有里沙は甲高い声をあげ、美琴に抱きついた。ふわりと甘い香りが漂ってきて、美琴は思わず緊張する。おとなの女のひとのにおい

だ。

有里沙はすぐにパソコンに向き直った。見て、と促されたが、その画面には美琴にも覚えがあった。

インターネットの、検索ページだ。有里沙は、キーボードはちらりとも見ずに『ティピカルサーガ』と入力し、検索ボタンを押した。「一件のヒットもなし。自分のほうがおかしくなったと思ってあたりまえよね」

画面には、一致するページは見つかりませんでした、の味気ない一文。

「わたしも、それ、やりました」

「でも、あなただっついていま、世界中で大ヒットしてるゲームっていつたでしょ」

「えと……」

美琴は、ちらりとうしろを振り返った。田中が、実におもしろそうに笑んで、こちらを見ている。

こういう場合、ありのまま伝えてもいいのだろうか

「桜井先輩は、どうして、『ティピカルサーガ』をご存じなんですか？」

とりあえず、いちばん気になっていたことを、聞いた。有里沙は、少し眉をひそめる。

「……その質問は、どういう意味？ まあいいわ。毎晩ね、夢を見るの。あたしがゲームを　もちろんTSをね、やってる夢。でも、どうしても夢だと思えなくて、目が覚めてからTSのソフトを探すけど、ない。友だちに聞いても、ネットで調べても、収穫なし。まるで最初から、TSなんてなかったみたい。でも、とにかくその夢がリアルなの」

「夢、ですか」

ということとは、やはり彼女も忘れてしまっていたのだ。夢を見て、思い出したということだろうか。

「おかしいのはね、二十四時間ゲームをつけっぱなししてるのがあた

りまえのこのあたしが、夢を見始めたころから、なんのゲームをやつてたんだかわかんなくなっちゃったの。それまでは、ゲーム機のなかになんのソフトも入ってないことなんて、十秒だってなかったのに。あたしいま、なんのゲームやってたんだっけって、思い出そうとしても、なんか記憶があやふやで　これは夢じゃない、絶対TSはあつたんだって。そう思ったら、なんだか、いま生きてるこの世界のほうが、夢みたいなのができてさ……本当に、こんなんだったかなって。だって、まるで、TSのなかにいるみたい。ねえ、あなた、なにか知ってるんでしょ？　これ、どういうこと？」

たまっていたものを一気に吐き出すように、有里沙は早口でまくしたてた。勢いに押されたのと、なんと答えていいのかわからないのとで、美琴は黙ってしまふ。なにかをいおうとするのだが、言葉にならない。このひと本当にゲームマーなんだ、という呑気な感想が頭をよぎる。見た目はまるつきりヤンキーなのに。

「そつちのひとも、TSのこと知ってるの？」

初めて、有里沙が田中に注意を払ったようだった。田中は肩をすくめるだけで、なにもいわない。

美琴は意を決した。

「あの……信じられないかもしれませんが」

一応、前置きをするが、信じてもらえなくても別にいいと思った。頭のおかしい変なやつ、と思われるぐらいだ。どうってことはない。美琴は、二週間前に田中からいわれたことを、できるだけそのまま、彼女に伝えた。田中も特に否定はせず、世界管理委員会の名刺まで渡して、美琴があえていわなかった、彼女が魔王を倒す勇者である旨についての説明も、丁寧に加えた。

有里沙は、黙ってしまった。

美琴はもう一度、彼女の反応を待つことになった。エアコンのモニター音が、やけに大きく聞こえる。そうだ、早く帰らないとモニター確率が上がるのに、と頭の片隅で思ったが、いまはこちらのほうが重要だった。

おもむろに、有里沙は立ち上がった。パソ部屋の奥のドアを開けて、その向こう側になぜかある冷蔵庫から、パックジュースを三つ持って戻ってくる。ん、と、美琴と田中に渡した。濃縮還元、百パーセントグレープフルーツジュース。

「いいね、おもしろい」

やっと彼女の口から出て来た言葉は、美琴の予想をはるかに超えたものだった。

「あたしもそれ、参加するわ。ぜったい役に立てる自信がある。魔王を倒すんでしょ？ パーティーに加えてよ」

椅子に座り、短いスカートからすらりとした足を出し、悠然と組む。

この展開は予想していなかった。これでは、田中の思惑どおりだ。でも、わたし、魔王を倒す気はないんです。というか、無理です。運動神経良くないし、そんな度胸もないし……」

謙遜でもなんでもなかった。成績はすべて中の中。中学三年生の平均値をそのまま体現しているようだ、常々自分で思っている。桜井先輩が代わりにやってくれるならそれがいちばんいいですが、と聞いたかったが、あまりにも無責任な気がして、さすがにそれはいえなかった。

そもそも、魔王ってなに、という根本的なところもなにもわからない。倒せといわれても、実感が湧かないのだ。

「え、そうなんだ？ でも、美琴ちゃんが勇者ってのは、決まっちゃってるんでしょ？」

「決まっちゃってるね。それは変えようがない」

田中がジュースを飲みながら、あっさりと肯定する。

「まあ、ゲームやマンガの主人公って、現実になつたらそんなもんかもね。なんで自分が、つてなるのはあたりまえかあ。ましてや、急にこの胡散臭いのが出て来て、勇者なんでヨロシクとかいわれても、モチベーション上がらないよねえ」

「そう、そうなんです……！ わかってもらえますか！」

ホロリと泣きそうになる。ひとの優しさというものに、久しぶりに触れた気がした。

「いま、さらっとひどいこといったよね」

田中がこっさり落ち込んでいるようだったが、そんなことはどうでもいい。まさか、自分が胡散臭いという自覚がないのだろうか。

「とにかく、こうやって話しも聞いちゃったわけだし、あたしは全面的に美琴ちゃんに協力するわ。なにかあったらいつでも会いに来て。たいていはここでパソゲーやってるから」

このひと本当にゲーマーなんだ、ともう一度美琴は思った。つくづくひとは見かけによらない。

ちゃんとわかってくれるひと、しかも味方になってくれるひとがいるというだけで、美琴の心はずいぶんと軽くなった。鬱々としていたものが、少しだが晴れたような気がした。相談できるひとがいるのといないのでは、その差は大きい。もちろん、そういう意味では、田中は戦力外だ。

外は、だんだんと赤らんできていた。美琴は、有里沙に礼を告げ、帰ろうと鞆を持つ。部屋から出ようとする二人を、有里沙が呼び止めた。

「ねえ、田中さん。もしかして」

なにかをいいかける。しかし、言葉につまり、やっぱりいいや、とやめてしまった。

結局二人はそのまま帰路につき、残された有里沙は、いやに真剣な面持ちで、じつとなにかを考え込んでいた。

彼女は、ある可能性に思い当たっていた。

「ミコトくん、今日の夕食なに？」

家に着くなり、田中は率先して食卓についた。数ヶ月間出張があたりまえの美琴の両親は、依然として帰ってくる気配はなく、田中と二人で朝夕の食事をとるのが当たり前になってしまっていた。

「まだですよ。たまには作ってください。ほんとなら、家賃と食費

ももらいたいくらいです」

すぐにエアコンの電源を入れて、暑苦しい靴下だけ脱ぎ捨てた美琴は、着替えるのも億劫で、制服のままソファに座り込んだ。意外なことに、それもそうかと田中は納得したようだった。

「冷蔵庫のなかのもの、なんでも使っていいなら、なんか作るよ」
「……ほんとですか？」

どうしてこの男は、見かけだけでなく、発言の真偽もいちいち胡散臭いのだろう。若干の不安はあったが、断る理由もなかった。帰りも全力疾走してきたので、へとへとだ。

「こう見えて、僕は万能タイプだからね。ゲームでもやって、ゆっくり待ってて」

「それ皮肉ですか」

目くじらを立てるのも面倒くさい。ゲームなら、日々体感中だ。どうしていまさらゲーム機の電源を入れる必要があるのか。

待っている時間、なにもしないのも暇なので、美琴はテレビを見ることにした。『ティピカルサーガ』と融合したことで、いまの世界がどうなっているのかを知るために、ニュースを見る機会は格段に増えた。毎日、モンスターに襲われてだれそれが亡くなった、というニュースがさかんに流れている。

わたしが魔王を倒したら、こうやって死んでいくひともいなくなるんだらうか

そう考えないではなかったが、テレビの向こうで淡々とキャスターが告げる事実も、残された家族が無念にむせび泣く姿も、美琴にたいした感慨を与えなかった。

どこか違うところで起こっているできごとのように、現実味を持たないのだ。

だれかが、魔王を倒してくれたらいいのに　ぼんやりと、考える。

昔アニメで見た勇者は、正義感に溢れ、己の信念に燃える青年だった。自分の命をなげうってでも、世界を救おうとしていた。

美琴には、それだけのものがない。

今日、有里沙にいわれたとおりだ。いきなり勇者だといわれても、よしわかった魔王を倒すぞ、などという展開になるはずもない。そもそも勇者というのは、勇気あるものことであるはずなのだから、自分などほど遠い。

とりとめもなくそんなことを考えていると、やがていいにおいが漂ってきた。

「もうすぐできるよー」

のほほんとした声。この男の飄々とした様子も、美琴のモチベーションに少なからず関わっているのは間違いない。

「いいにおい。パスタですか？」

「ベーコン、牛乳、卵、スライスチーズと塩こしょう、隠し味にコンソメで、たちまちカルボナーラ！」

皿に盛られたカルボナーラは、まるでイタリア料理店で見えるようなものだった。上に散らす粉チーズやパセリが常備されていないのが、非常に惜しい。

「カルボナーラって、家庭で簡単に作れるんだ……」

そのこと自体も、田中があっさりと作ってしまったということも、意外だった。美琴に作れるパスタといえば、ナポリタンぐらいだ。

麦茶をコップに注ぎ、田中と顔をつきあわせて椅子に座る。

いただきますと手を合わせ、フォークでくるくると巻いた。ぱくりと、一口。

「おいしい……」

「でしょ？ 料理はセンスだね。ミコトくんの料理も悪くないけど、僕の勝ちだな」

「じゃあ、毎日でも作ってください」

「別にいいよ」

いいんだ、と拍子抜けする。確かに、自分の作るつたない料理よりもおいしいし、完成までが速い。慣れているのだろう。

フォークを口に運びながら、目の前でパスタに食らいついている

田中を、ちらりと見た。彼が来て、もう……まだ、二週間。

ほかのひとたち　たとえば、クラスメイトたち　ほどではないが、この状況が、だんだんあたりまえになってしまっている自分に気づいていた。

モンスターから逃げるのもうまくなった。田中との会話も、よそよそしさがなくなった。なにより、こうやって二人で食事をする日常を、楽しいと、思い始めていた。

美琴の両親は、一年のほとんどを外で過ごしている。ずっとひとりでいた彼女にとって、家族のように一緒にいる存在というのは、新鮮だった。

そんなこと、口が裂けても、いえないけれど。

「どうかした？」

「……なんでもないです」

少しでも、ほんの少しでも、田中もそう思っているといいと、かすかに思う。思いが伝わったわけではないだろうが、見ると、田中はいつになく優しい笑みを浮かべて、こちらを見ていた。

急いで目を逸らす。

「どうかしましたか」

意図してそっけなく、今度は美琴が問う。

「なんかさ……こういうのも、ちょっと楽しいかも、って思ってたね」
思いがけない言葉が返ってきた。余計に顔を見られなくなって、美琴は黙ってパスタを口に運んだ。

3 「わたしが、勇者だからですか」

あいかわらず、太陽はけんか腰で照りつけてきていたが、美琴は今日も今日とて全力ダッシュで学校にたどり着いた。吹き出す汗をスポーツタオルで拭い、三日ほど前から持ち始めた扇子を広げてはたばたと扇ぐ。いつの間にかオープンしていた、商店街内のマジックショップなるところで買った、扇ぐだけで冷気が生まれるという品だ。世界が融合したことで、プラスに作用したことなどにひとつないと思っていたが、こういう便利グッズの存在だけはありがたいかもしれない。

今日はモンスターに遭遇することもなく、美琴はいつになく上機嫌だった。昨日、桜井有里沙という人物に会えたことも、気分の高揚に繋がっていることは間違いない。

魔王を倒せる気はしなかったが、この世界でもやっつけていけそうな気がし始めていた。人間、どんな状況にでも順応はするものらしい。まだ慣れないが、日々を過ごすうち、これがあたりまえだと感じるようになるのだろう。

「ミコっちゃん、おはよう！ 昨日、高校に中学生とホストが来たって、ミコっちゃんたちのことですよ。行動力あるねー」

教室に入るなり、中原理恵が、眼鏡の奥の目を光らせた。

兄に聞いたのだろうか。目立っていたという自覚はあるので、美琴は照れ笑いでごまかす。確かに、昨日の自分の行動力は、十五年分のやる気をつぎ込んだぐらいのものだった。いま同じことをやれといわれても、自信がない。

「昨日教えてくれた、ゲーマーさんに会えたよ。ありがとう」

すべては彼女のおかげだった。中原理恵は、驚いたようだった。「そうなんだ！ よく会えたね。いるらしいよ、ぐらいの情報だったのに。そのゲーム、そんなにおもしろいの？ ミコっちゃんがそんなに必死になるなんてさ」

「おもしろいつていうか……」

言葉につまる。むしろ、美琴にとっておもしろいことなど皆無だ。曖昧に言葉を続けようと、口を開いたとき、ただならぬ様子で、美琴のすぐうしろのドアが勢いよく開かれた。

まだ、八時二十分。ホームルームが始まる時間ではないが、姿を現したのは、肩で息をする担任の木下鉄二だった。

生徒もまだ、全員そろっていない状況だ。なんだなんだとざわつきながら、生徒たちは担任の言葉を待った。

「全員、すぐに、体育館へ移動だ。整列はいいから、各自、落ち着いて行動するように。点呼は体育館でするから、入ったらクラスごとに整列。堀田、みんなを先導しろ。頼むぞ」

血相を変えて入ってきた割には、むりやりトーンを抑えるようにゆっくりと指示を出す。クラス委員の堀田充が、はいと緊張感のない返事をした。

「……なにかあったのかな」

中原理恵が、不安そうな声を出す。ということは、融合してしまつたいまの世界があたりまえの彼らにとつても、異常事態だということだ。美琴は、嫌な予感に胸を押さえた。担任のあの様子では、なにかがあつたのは、間違いない。

きゃあ、と窓際で鋭い悲鳴が上がった。

「だれか倒れてる……!!」

甲高い、泣きそうな悲鳴だった。一気に窓際に集まったクラスメイトたちが、口々に悲鳴を上げる。

「うわ!」

「ひでえ……」

美琴は、見たくなかった。なんとなく、予想ができた。

「デリペリだ」

だれかが呟いた。聞いたこともないそれが、モンスターの名であることだけは、美琴にもわかった。

「デリペリ……きつと、一匹や二匹じゃないね……」

すっかり血の気の引いた様子で、中原理恵がうめく。美琴にはその姿を想像できなかったが、群を成して行動するモンスターがいると、田中に聞いたことがあった。きつと、そういう類なのだ。

教室の窓から見えるのは、中学の正門あたりだ。そこにひとが倒れていて、モンスターの姿がある。それだけで、担任の指示の意味は理解できた。体育館は、正門とは反対の方向にある。

避難しろ、ということだ。

「おい、とにかく体育館に行こうぜ。先生たちが結界を張ってくれるんだろ、きつと」

堀田充が、急に慌てた様子でクラスメイトたちをまとめようとし始める。しかし、すでに中学の敷地内にモンスターが数匹入っている状況で、そろそろと体育館に移動することが果たして本当に得策なのか、甚だ疑問だった。

「飛んだ！」

だけれが、声をあげた。

ドア付近にいた美琴も、中原理恵も、まったく動けずに、その声を聞いた。窓際にいたクラスメイトたちは、なにかを叫びながら、まさに蜘蛛の子を散らすように、窓から離れた。

窓が割れ、赤い塊が教室に飛び込んでくるのを、美琴は映画館のスクリーンに映った出来事のように、奇妙に現実感のない思いで見ている。足がすくんで、見ていることしかできなかった。

もしかしたら、目の前の中原理恵が、悲鳴をあげたのかもしれない。きーんと耳鳴りがした。恐竜図鑑で見るとような姿をした深紅の生き物が、長く鋭い爪で、少女の首のあたりにかかるく触れたように、見えた。

無数のガラスの破片が床に突き刺さったのと、少女の首が飛んだのと、どちらが先だっただろうか。

ひどくゆつくりと、それは、踊るように弧を描いた。美琴は、確かにそれと目が合ったと思った。

人形の首が落ちこちるみたいに、美琴の足下に、おさげ頭が転が

った。遅れて、眼鏡がカシャンと落ちる。

中原理恵だったものが、目を見開いて、美琴を見上げていた。

「……！」

悲鳴にさえならなかった。しかし、美琴の混乱をよそに、黒板の半分ぐらいあるその生き物は、真つ赤な羽をすつと広げ、もう一度鋭利な爪を振り下ろそうとしていた。その赤が、もともとの色なのか、血の色なのか、判別がつかない。ただ、その金色の目が確かに自分を見ていると気づいたとき、瞬時に、美琴にはわかってしまった。決して認めたくはなかったが、しかし事実には違いなかった。

わたしも、殺されるんだ

「ばか、逃げろ！」

だれかが叫ぶ。複数の悲鳴が耳を貫く。

目を閉じることも、腰を抜かすこともできずに、美琴は時が止まったように突っ立っていた。頭の隅っこで、死ぬ、と思った。

瞬間、暗闇が、視界のすべてを支配した。

あらゆる音が、止んだ。

赤い生き物だけが、闇のなかでひとつだけ浮かび上がっていた。

その表情が恐怖に歪んだかと思うと、瞬きをするぐらいの間に、みるみる闇に飲まれて、消えた。

「……？」

おかしいな空間に迷い込んでしまったかのようにだった。前も後ろもない暗闇のなかで、美琴だけが息をしているように思えた。割れた窓も、イスも机も教卓も黒板も、クラスメイトの姿も、なにもかもがなくなっていた。

静寂のなか、囁きが聞こえた気がして、美琴は耳を澄ました。しかし実際には、その必要はなく、声ははっきりと彼女の耳に届いた。「貴様は、守るのか」

低く、しかしどこか透き通った、抑揚のない声。

漆黒の、長い髪の男が、いつの間にか目の前に立っていた。その姿から、すぐに、この世界の人間ではないとわかった。

つややかな髪の間から、鋭い角のようなものが二つ、上にそびえている。長い前髪の下から、感情のない　しかし、どこか寂しそうな目が、美琴を見ていた。

触れてはならない、なにかのような気がした。美琴は身じろぎで、その目に射すくめられた。

「貴様は、この世界を、守るのか」

ひどく凪いだ声だが、もう一度問いを繰り返すが、美琴には答えることができなかった。

その代わり、思うよりも先に、口をついて出た。

「あ……ありがとうございます、助けてくれて」

いつてしまつてから、後悔した。明らかに、そんなことを口走るような状況ではなかった。

あなたはだれ、ここはどこ、なにをいつているの……いえることは、いくらでもあつたのに。

男の双眸に、かすかに驚きの色が浮かんだたようだった。しかしすぐに瞳を伏せる。もしかしたら、瞬いただけなのかもしれないかった。

暗闇のなかにあるのに、男の姿だけがはっきり見えているのが不思議だった。もつと目を凝らそうとして、かえって、どんどん見えなくなることに気づき、美琴は一度目を閉じた。

見開いたときには、悲鳴と怒号と　あらゆる負の音が、耳に飛び込んできていた。正面に、錯乱してなにごとかを叫ぶクラスメイトの姿が見えて、我に返る。

現実だったのだと思ひ知った。

露出した手足に、ねっとりとした感触があつた。それがなんなのが見なくてもわかつたし、見たくもなかった。

あのモンスターは消えていた。

しかし、中原理恵の首と胴体は、やはりそこに、あつた。

美琴は、ぼんやりと、自分の家のソファに座っていた。

あの後、なにがどうなったのかまったく覚えていない。よくわからない間に、ばたばたと帰路につく流れになったような気がしたが、そのほとんどを無意識にやっていた。

彼女は、ハーフパンツにポロシャツという、体育着を着込んでいた。赤く染まってしまった制服から着替えたのだ。しかしそれすら本当に自分で着替えたのかどうか怪しい。それぐらいに彼女は混乱しており、担任にいわれるまま、操り人形のように動くだけだった。そうして、いまはどうか帰宅して、鞆も肩から提げたままでソファにいた。

美琴は目を開けていたが、なにも見てはいなかった。

ただ、少し前にドアが開く音がして、田中が右斜め前の一人がけのソファに座ったことは、なんとなく認識していた。なにか、いいたいことがたくさんあるはずだった。

田中はいつもどおり、出会ったその日となにひとつ変わらない様子で、なんの感慨もなくそこにいた。そのことに憤慨すればいいのか、嘆けばいいのか、それとも思いつく限りの暴言をぶつけなければいいのか、美琴にはわからない。

「これは、あたりまえのことですか」
ぼそり、と聞いた。

目の前で友人が死んだのだ。それも、交通事故とか病気とかではなく、異形の生物に首を刈られての死。

クラスメイトたちも、担任も、取り乱し嘆いてはいたが、到底美琴のそれには及ばないものだった。どこか、仕方がないという、諦めの空気が漂っていた。

そのことが、信じられない。

「ゲームでは、たくさんひとが死ぬですよ。だから、いまの世界では、これは、あたりまえのことですか」

言葉にするうちに、声に憤りが込められていった。それでも、まだそれを抑えつけようとする、自制心じみたものが働いていた。

あろうことが、田中は小さく笑ったようだった。

「毎日、ニュースでやってるでしょ。知らなかったわけじゃあるまいし」

「っ！」

なにかがはじけた。美琴は、田中を睨めつけた。

「なら……、なら、どうしてわたしだけ、あたりまえじゃないんですか？ どうして……どうして、わたしだけ　！　主人公とか、勇者とか、なんなんですか！　わたしには、できることなんてなにもないのに！」

「あるよ。君だから、その思いをする必要があるんだよ、ミコトくん」

「……？」

いつている意味がわからずに、眉をひそめる。田中の言葉を、頭のなかでくり返した。

わたしだから、その思いをする必要がある

まさか、と、ある可能性に思い当たったとき、一気に血の気が引いた。

あのモンスターを目の前にしたときに、感じたはずだ。自分も、殺されるのだと。しかし、そもそもあのモンスターが、自分を狙って現れたのだとすれば

「失礼するわ」

唐突に、声が割り込んだ。このとき初めて、美琴は窓の外がまだ明るいことを知った。声の人物は、窓からリビングに入ってくるどころだった。

「ピンポンも聞こえないみたいだから庭におじゃましてみれば、その胡散臭い阿呆がデリカシーのないことを平然と……」

金髪を振り乱し、脱いだ革靴を片手に上がり込んできたのは、桜井有里沙だった。彼女は怒りを隠そうともせず、まっすぐに田中のもとへと向かい、革靴で思い切り彼の頭をはたいた。

「っ！」

かなりの音がして、田中も思わず声をあげる。ぽかんと口をあけ

る美琴の目の前で、有里沙はまだ足りないといわなければかりに右足を振り上げ、そのまま田中をソファから蹴落とした。

「ちょ、なんで僕がこんな扱い　！　ってというか、パンツ見えたけど」

「見物料を払いなさい。こんな扱い、は美琴ちゃんのほうでしょ。なんなのアンタ、ほんとムカツク。なんかもう生理的にダメ。イヤ。ダイキライ」

いいたい放題にいつて、有里沙は金髪をさらりとかき上げると、田中が座っていたソファに我が物顔で腰を下ろした。もう見たくないとばかりに田中には目もくれず、ため息をひとつ吐き出して、静かに美琴を見る。悔いるような色が浮かんでいた。

「聞いたわ」

一言。美琴は、びくりとした。

「でも、忘れなさい」

有無をいわさぬ命令口調だ。昨日も怖いと思ったが、今日は一段と迫力を増していた。怒っているからだろうか。

「……忘れる？」

それでも、尋ねる。そう、と優しい声音で、彼女は答えた。

「昨日ね、こうなるんじゃないかって、思わないでもなかったのよ。そのときに、いえば良かった。すっごく後悔して……中学で事件があったって聞いて、中学行ってセンサーから住所聞き出して、来ちゃった」

ふっと、困ったように、有里沙は笑った。大きく印象的な瞳が、ほんの少し細められただけで、驚くほど優しい印象を与えた。

「美琴ちゃんがつらい思いをしたことも、今日あったことも本当のことだけど、忘れなさい」

そしてもう一度、くり返す。今度は聞き返すことはせずに、美琴は言葉を待った。田中は懨然として、床に座ってこちらを見ている。「だって、これはゲームなんでしょ　あなたが、昨日、そうだったのよ。この世界は、TSの世界と融合してしまった世界だって。」

ここで起こっていることは、ゲーム上の出来事なの。だから忘れるのが最良よ」

足と腕を組み、淡々と、彼女は言葉を紡いだ。美琴は、ゆっくり、その意味をかみしめた。

ゲームであっても、目の前でひとが　それも友人が　死んでしまったのは、紛れもない事実だ。それを忘れるなどと。

美琴の顔色でいわんとするところがわかったのか、有里沙はいらと田中を見下ろした。田中は、その表情に、少しだけ笑みを含み始めている。

「ちよつとそのホスト。説明不足なんじゃないの。あんた、美琴ちゃんが勇者だっていったんでしょ？　つまり、TSにおける魔王を倒させたいのよね？　で、魔王を倒したらどうなるの。世界が平和になる？　じゃあ、どの世界が平和になるの？　どう考えたってこんな異常事態、『もとに戻る』って選択肢がなきゃ、サギよね」「だって、ミコトくん、聞かないんだもん」

さらりと、田中はいった。美琴は目を見開く。それはつまり、肯定の意に他ならなかった。

「要するに、あんたはゲームマスターなのよね」

大きく息を吐き出して、有里沙はそんなことをいった。その言葉には聞き覚えがあったので、美琴がかすかに反応する。以前、田中が自ら、自分のことをゲームマスターを称していたはずだ。

「ゲームマスターって、なんなんですか？」

「ほら、説明不足。もうほんとウザイ」

田中に向かって吐き捨てて、有里沙は美琴にいくらか優しい目を向けた。それでも苛立ちを含んだ彼女の目に、美琴は思わず怖じ気づいてしまう。

「ゲームマスターっていうのは、プレイヤーがゴールするように導く役のことよ。TRPGって聞いたことないかな。コンピューターゲームがない時代は、テーブルでトークしながら、それぞれ役を演じて、サイコロを転がしてゲームをやるのが主流だったの。でもそ

れじゃあ、プレイヤーがゴールにたどり着けないでしょ？ だって、どんなシナリオでなにが起こって、なにをすればいいのか、コンピュータゲームみたいにルールを敷いてくれているわけじゃないから。要するに、ある程度ルールを敷く役回りだと思ってくれればいいわ」

それは、ゲームをしない美琴にとっては、すんなり頭に入る話ではなかったが、どうにか理解しようと努めた。あれをしるこれをしると、教えてくれる人物 　ただし、全部を教えたのではゲームにはならないから、導くといういいかたになるのだろうか。

「想像してみてください。プレイヤーが、まったくやる気なかったら、ゲームマスターはどうすればいい？ 　まあ、現実のゲームなら有り得ない話だけど 　その場合、やる気を出させるしかないでしょう。勇者が、魔王を倒すぞ、って流れになるように、持っていくしかない。そうしないと、いつまでたっても、シナリオが進まない」

美琴は、数秒の間ののち、やっと瞬きをした。

有里沙のいったことを、できるだけ正しく、聞き取るうとした。そうすると、どうやっても、ひとつの結論に行き着くのだった。

「わたしが、勇者だからですか」

有里沙が来る前に、浮かんでいた可能性は、いまや疑いのようなものになるうとしていた。

そもそも、学校の敷地内には、モンスターは入り込んで来ないはずだったのだ。入り込むとすれば、イベントぐらいだと、田中はいつていた。

要するに、この場合のプレイヤーである美琴のまわりで、美琴にやる気を出させるための、ゲーム上のイベントが発生したのだ。

自分のクラスにモンスターがやってきて、自分の友人が目の前で死んだのは、つまるところ

「わたしの、せいってことですか……」

呻くように、声を絞り出した。

自分の存在が、危険を呼んだ。

そういうことだ。

「厳しいけど、そう。でも、もう一度いうけど、これはゲームよ」
有里沙は斜めに座り直し、身を乗り出して、美琴の手をとった。
「なかったことに、しましよう。クリアしちゃえばいいのよ。そうすれば、なかったことになるはずよ。そうじゃなきゃ、そのホストの存在理由がなくなるもの」
「まあ、そういうことだね」

田中は立ち上がり、冷蔵庫から勝手に茶を出すと、自分だけコップについて喉を潤した。ダイニングテーブルの上に放ってあったリモコンを手に取り、慣れた手つきでエアコンのスイッチを入れる。ピツという電子音で、美琴は、初めて暑かったことに気がつき、体温を自覚することで、奇妙に冷静になっていく自分を感じた。

「なかったことに、なるんですか」
「なるよ」

ずいぶんあっさりとして、肯定の言葉が返ってきた。

「誓っていうけど、黙ってるつもりはなかったよ。だってミコトくん、なんにも聞かないからさ。世界管理委員会ってのは、その名のとおり、世界を管理するのが仕事だからね。このまま世界が融合してるってのは、当然、まずい。主人公なのに、融合してきた世界つまりゲーム部分をクリアしてもらって、めでたくエンディングが流れる間に、僕が世界を切り離す。クリアっていうこと自体、本当は、世界の終わりを意味するんだ。ゲーム世界ってのは、クリアしちゃえば最初に戻って、もう一度クリアに向かって進む。その繰り返しが起こっているだけだからね」

ほっとする気持ちと同時に、違和感のようなものが、美琴の胸に広がった。

彼のいいかただと、『ティピカルサーガ』の世界は、スタートとゴールをくり返すだけの世界ということになる。その世界に、いたいどれだけの意味があるというのだろうか。

それとも、そこに生きる自分たちにはわからないだけで、どの世

界もスタートとゴールをくり返しているだけなのだろうか。時間を超越したなにか　たとえば、世界管理員会　の目から見たら、始まってだれかがクリアして、そうして終わってまた始まって……ひたすらに、そのリピートなのかもしれない。それどころか、もしかしたら、自分たちが暮らしている世界も、どこかの世界のゲームや小説の世界だったりするのだろうか

考え始めてしまったら、どんどんわけがわからなくなりそうで、美琴は思考を中断した。

そんなことはどうでもいいのだ。自分がいま生きてる、その実感が本物であるなら、それでかまわない。美琴にとってはそのこと自体、サンタクロースの話と同じだ。そうであっても、そうでなくても、自分にとつての本質は変わらないのだ。

そこまで考えて、まったく別の問題が、浮上してきたことに気づいた。

「クリアするってことは　わたしが、魔王を、倒す?」

「そーね」

「もちろん」

まったく正反対の二人は、同じ答えを返してきた。

「ちよ、ちよつと、待ってください。そんなこといわれても、わたし、ほんとに……」

「もー、ハラくりくりなさいよ。あたしが味方するわ。これがゲームなら、クリアできないはずがないんだから。そうでしょう?」

最後のそうでしょう、は田中に向けられたものだった。田中は黙って笑む。イエスの笑みだ。

「ゲームってのは、ある意味でものつすごくご都合主義なの。だってクリアできなきゃ、だれもやらないでしょ。どんな主人公でも、クリアできるようになってるのよ。ついでに、たぶん　あたしが、TSのことを完全に忘れてなくて、美琴ちゃんの手助けをするのも、そのご都合主義の一端ね。だっておかしいでしょ、同じ学校内で、こんな偶然。美琴ちゃんが認めようが認めまいが、もう、主人公は

間違いない美琴ちゃんなんだわ。あなたの友だちが死んだのも……
そういうことですよ」

不意に、手を叩く音が聞こえた。田中が座っている有里沙を見下ろすように、満面の笑みで拍手していた。

「頼りない主人公には、頼れる仲間。こうでなくっちゃね。頭いいねえ、アリサくん」

「なれなれしく呼ばないで。あんたのこと信用しないわよ。美琴ちゃんに魔王を倒させるためなら、あたしだって殺しかねない」

「それは誤解だ！」

初めて慌てたように、田中は両手を振った。

しかし、田中が言葉を続けるより早く、有里沙の言葉の意味に気づいた美琴が、目を見開いて彼を見た。そこには、驚愕と、憎悪に似た色。うっ、と言葉を失う田中に、美琴は奇妙に冷めていく自分を自覚した。

「……ゲームマスターって、そういうことですか」

感情のない声でつぶやく。家族みたいなどと、なにを勝手に思っていたのだろう。見るからに胡散臭い、得体の知れない男を相手に「ご、誤解だよ。アリサくんのいいかただと、ミコトくんのクラスメイトを殺したのが僕だって話になるじゃないか」

「違うの？」

冷ややかに、有里沙が尋ねる。田中は大げさなぐらいに、首を左右に振った。

「それは違う。僕の仕事は、プレイヤーを導く……というか、見守るというか、それだけだよ。逆にいうと、それしかできない。そういう意味じゃ、自分のことをゲームマスターっていうのも、本当はおこがましいんだ。……この世界そのものが、ミコトくんに勇者としての仕事とまっとうさせようと、動いてるんだ。そういうふうなゲームを作ったのは、そもそも君たちの世界の人間でしょ。アリサくんのいうとおり、ご都合主義にね」

「どーだか」

有里沙が鼻を鳴らす。美琴も、信じたいとも信じられないとも思わなかった。ひとつの情報として、彼のいったことを受け入れた。「そこを信じてもらわないと、話が進まないよ……世界管理委員会が嘘っぱちってことになったら、君らだってお手上げでしょ」

「嘘だったら、どうします？」

なにをしてもらいたいとも思わなかったが、美琴はそんなことを口に出していた。有里沙は面白そうに目を細め、田中は予想以上にたじろいだようだった。

沈黙。じつと、だれひとり動かない。

「……嘘、だったら……」

いいかけて、さらに沈黙を挟む。田中は、ゆっくりと、息を吸い込んだ。

「丸坊主に、なるっ」

意を決したように顔を上げ、出た言葉はそれだった。少女ふたりは思わず顔を見合わせ、もう一度田中を見る。いつになく真剣な表情で、審判が下るのをじつと待っているような、そんな様子だった。くるりと、有里沙は田中にまるごと背を向けた。その肩が震えている。

美琴は、なんだかばからしくなってしまった。

「……わかりました、それで手を打ちます」

疲れたように吐き捨てた。ものすごく大きな問題について話していたような気がするのに、急に個人の髪型レベルに落とされたのは、もうつつこむ元気もない。

「信じますから、夕食作ってください」

そう口に出してから、なにかを食べようとしている自分に驚いた。あんなことがあって、食欲など、もう一生わかないと思っていたのに。

今日の出来事だ。忘れたわけがない。しかし、思ったよりも、ダメージは和らいでいた。心のどこかで、これは虚構なのだと、割り切ることができたのかもしれない。あるいは、そういう感情すら、

世界そのものにコントロールされているのだろうか。

「よし、じゃあ、まだちょっと早いけど、パスタでも作ろう！」

「……だいじょうぶ？」

無理をしていると思ったのか、有里沙が優しく声をかけてくる。

美琴は、ある意味では大丈夫ではないのかもしれないと思ったが、口には出さなかった。

時計を見ると、そろそろ夕方にさしかかる時刻だった。不意に、味気ない丸い時計が、教室のそれと重なる。そのタイミングが、まるでシヨックを受けている自分を演出しているかのようで、嫌な気持ちになる。

「……お通夜とか、やるんでしょうか」

それでも、やはり口にしたのはその話題だった。有里沙は肩をすくめた。

「行かないほうがいいわ。わかってるでしょ」

「桜井先輩は、気にならないんですか？ その……彼女のお兄さんが、同じクラスだって聞きましたけど」

「有里沙でいいわ。……だれのお兄さん？」

聞き返されてしまって、美琴はいいにくそうに視線を落とす。今日亡くなった中原理恵の兄、とくり返すことができない。

しかし、その沈黙で、有里沙は察したようだった。充分に美琴のことを気遣うような間をとって、それでも尋ねる。

「……今日、亡くなった子のお兄さん？ ごめんね、名前は、だれもなにもいわなかったから」

そういうものなのかもしれない。ためらったが、それでも美琴は、中原理恵、と名を告げる。

「ナカハラ？ いないけど。少なくとも、あたしの知り合いではないかな」

静かに、美琴の頭のなかで、警鐘が鳴ったような気がした。あえて話題を変えようとして、有里沙が質問を続ける。

「ね、あたしも食べてっていいでしょ？ いまさらだけど、おうち

のひとは、留守？ 一応、ご挨拶をと思っただけど」

「両親は、出張で」

反射的に、言葉が出た。ふうん、と納得しただけで、それ以上聞かれなかったことを、ありがたく思った。

美琴は、そつと、上機嫌で厨房に立つ田中を見た。

彼が現れてからいった言葉を、できるだけ、正確に思い出そうと思っただ。

「……わたしが、主人公で……勇者で、魔王を、倒す……」

だれにも聞こえないように、つぶやく。

警鐘は、さつきよりもずっと大きく鳴り響き、そしてだんだんと聞こえなくなった。

美琴の胸のなかに、ある予感が生まれていた。

4 「まずは金、次にアイテム、あとは効率の良いレベル上げ」

その日、桜井有里沙は吉川邸に泊まっていった。どういうわけだが一緒に風呂に入って、一緒のベッドに寝る流れになってしまい、美琴は緊張しっぱなしだったが、有里沙にいわせると、「パーティー組むんだから、信頼関係を築いておかなくちゃね」ということらしい。

有里沙の背中に入れ墨でも入っていたらどうしようと、なかば本気で思っていた美琴だったが、思い過ごしであったことについては心底ほつとしていた。偉大な先輩に、そんなことは決していえないが。

翌日、午前七時。

いつものように鳴り響いた電子音を止めたのは、いつもの低血圧な手ではなく、実に目覚めの良い鋭い手套だった。

「なんで鳴るの!」

ただし、快適に目覚めたというよりは、怒りによって一気に覚醒した、といったほうが正しい。

桜井有里沙は、寝起きでもまったく乱れない長い金髪を踊らせながら、床にたたきつけられた時計を憤然と拾い上げ、それこそ親の仇のように思い切り、スイッチをオフにする。ここでやっと目を開けた美琴は、その後ろ姿に、なぜ外国のひとが家にいるんだろう、とぼんやり思ってしまった。それほどに見事な金髪だった。

「……その髪、地毛ですか?」

なので、寝起きの呆けたテンションも手伝って、ふつうなら恐れ多くて聞けないような質問が口から出た。有里沙は、不機嫌丸出しの顔で、ぎろりと振り返る。

「そんなわけないでしょ、抜いてんの。ちょっと気を抜けばプリンだから、こまめに美容院に通ってるの。そんなことより、なんで時計鳴るの、まさか起きる気なの?」

「ああ、そんなんですか……綺麗な髪ですよ……」
ベッドの上で、ほんわかと微笑む。それから、後半部分について考えた。

「……起きないんですか？」

「起きないわよ！　っというか起きなさい！」

低血圧なローペースにいらいらして、完全に矛盾したことを叫ぶ。それから、有里沙は盛大にため息をついた。美琴の目蓋が、ゆっくりと閉じていくのを確認したからだ。

美琴も有里沙も、タイプは違えど、立派に寝起きが悪い。それを自覚して、有里沙は平静になるうと努める。そうだ、大変な目に遭ったのだから、この子が眠れているだけで安堵するべきだ

「……ああ、起きなきゃ」

有里沙が落ち着いたところには、美琴も覚醒しようとしていた。そのそと起きあがる。タオルケットがずり落ちたが、頓着せずにそのままベッドから降りて、大きく伸びをした。呆れたような有里沙と目が合う。

「おはようございます、有里沙先輩」

「……おはよう。ねえ、まさか学校に行く気なの？」

ゆっくり首を傾けて、美琴は有里沙のうしろの、勉強机の斜め上に貼ってある、味気ないカレンダーを見上げた。勘違いはしていない。今日は平日だ。

「行かないんですか？」

きよとん、と尋ねる。

「なにしに行くの？」

「なにしに、っというわね……。勉強しに、というか、なんといつか」

「……勉強しに？」

それが不思議というよりは、確認するように、静かにくり返す。美琴はやっと、昨日なにがあったのかを思い出した。思い出してしまっただけは、寝起きだからといって、なぜ忘れていられたのか不

思議だった。色彩も、匂いも、これほど鮮明に思い出せるのに。

「いまの美琴ちゃんにとって、学校は無意味でしょ。もちろんあらしにとつてもね。むしろ、行かないほうがいい」

そうかもしれない。美琴は、神妙な面持ちで、黙ってしまった。気づいた有里沙が、美琴の顔面に枕を投げつける。もちろん、ごく軽く。

「もう、だからほんとなら、ゆっくり寝られるはずだったのに！仕方ないから、ホストも起こして、豪華朝食作らせて、食べたら出かけようか。このあたしのノウハウがあれば、魔王を倒すなんて簡単よ」

単純に嬉しくて、余計なことは考えないように、美琴は笑った。

実際には、田中を起こす必要はなく。田中は普段、リビングのソファベッドで勝手に寝起きしている。階下に降りると朝食の香りが漂っていた。いつもの黒スーツに、どこから持ち出したのか、白レースのエプロンをはためかせ、上機嫌にミックスジュースすら作っている。この家にミキサなんてものがあったことを、美琴は初めて知った。もしかしたら、それすらどこかで調達してきたのかもしれない。

「おはよう、ミコトくん、アリサくん。あれ、今日は制服じゃないんだね」

ひらひらエプロンについて言及しようとしていた二人は、逆に問われ、タイミングを逃してしまふ。美琴はカーキ色のシャツに膝丈のジーンズ、有里沙はというと、好みの服がないとぶつくさ不平をたれていたが、ぎりぎり及第点だったらしいデニムのワンピースを着込んでいた。美琴が着ればごくふつうのワンピースだが、有里沙のほうが背が高く、出るところが出ているため、ずいぶん身体のラインが強調されている。しかも、超がつくミニスカートだ。有里沙には、むしろそこがお気に召したようだったが。

「あんだ、美琴ちゃんにやっかいごと持ち込んだ張本人なんだから、

もうちょっとレシピ考えたら？　なんで朝からパスタ？」

有里沙は、食卓の上の皿を見て、げんなりと首を振った。朝ということが配慮されているのか、サラダ風のパスタのようだ。トマトやキュウリやシーチキンが乗っかっている。

昨日の朝食がマカロニサラダだったことを思い出し、美琴ははつとした。まさか、この男、パスタ料理しか作れないのでは。

「パスタいいじゃん、おしゃれで。ニンジンとオレンジとバナナのミックスジュースもどうぞ」

出されたゲル状のものも、どことなく胡散臭い。

いろいろと、いいたいことがなくはなかったが、朝からしつかりとしたものが食べられるのはありがたいことなので、二人はおとなしく食卓についた。田中も座り、いただきますと唱和。

「学校、行かないことにするんだね。懸命だね。いつまで行くのかなと思つてたから。やっと、魔王を倒す気になってくれた？」

くるくると、慣れた様子でパスタをフォークにまきつける田中を、美琴はじつとりと見た。そういうことは、早くいつてもらいたい。

「田中さんがそういうふうだから、現実味がなかったんです。少し後悔しています。どうせ逃げられないのなら、ちゃんと向き合つてくんだった」

本当は、何度もモンスターを目の当たりにしておいて、現実味がないものにもないのだが、やはり言葉にすると、そういうことになるような気がした。

「美琴ちゃんが悪くないわ。悪いのはぜんぶこのホストでしょ。だいたいなんで美琴ちゃんなの。こないたいけな女の子つかまえて無理難題押しつけて、それどころか家に住み着いて。なんなのあんた、変態なの？」

「容赦ないなあ……。それと、気になつてたんだけど、僕はホストじゃないよ」

「知ってるわ。親しみを込めたニックネームよ」

田中と有里沙は、決定的に相容れないものがあるようだ。有里沙

のほうが一方向的に嫌っている感はある。

「昨日も思ったけど、料理の腕もイマイチ」

ここまでくるともはやイチャモンだったが、美琴にしても助け船を出すいわれはないので、黙って傍観者を決め込んだ。田中は思いのほかシヨックだったようで、どんよりと肩を落としている。

二人のバトルが一段落したようだったので、美琴は昨夜から考えていた疑問を口にした。

「田中さん、わたしが魔王っていうのを倒さなくてはいけないのはわかりました。わかったんですが……これには、明確な期限はあるんですか？」

田中が顔を上げ、有里沙もこちらを見た。

「なるほど、そうね。TSは時間の概念は基本的に無視してるシステムだけど、現実と混ぜてるならそうもいかないか」

「明確な、期限、ねえ」

田中は、なにがおもしろいのか、うつすらと目を細める。

「その質問なら、答えはノーだね。ただ、わかってると思うけど、人間がみんなモンスターにやられちゃってから魔王を倒したって、しょうがないとは思うけどね」

「でも、魔王さえ倒せば、なかったことになるんですよね？」

田中は片眉を上げた。なるほど、とつぶやいて、パスタを一口放り込む。飲み下すまでの、少しの間。

「そういう切り口はちよつと予想してなかったな。実際のゲームでは、主人公がやられたらゲームオーバーだけど、これを現実に当てはめると、どういう状況がゲームオーバーになると思う？」

「主人公がやられてゲームオーバーなのは 敵に対抗しうるものがないくなって、敵サイドのやりたい放題になるから？ 目的にもよるけど、世界が滅ぼされたり、敵の手中に落ちたり」

代わりに、有里沙が答える。そうだね、と田中はうなずいた。

「だからこれは、今回の魔王の目的にも関わってくることだから、一概にはいえないんだ。ただ、世界そのもののダメージが一定値を

超えた段階で、ゲームオーバーと判断される場合があることは、覚えといたほうがいいね。ちなみに、ゲームオーバーっていうのは、こっちの世界が向こうの世界に負けたっていう意味合いになるから……最悪の場合、こっちの世界は取り込まれて、消える。そこに暮らす人間ごと、まるっとね」

「……早いにこしたことはないってことですね」

小難しいことはよくわからないが、そういうことなのだろう。たとえば、オセロなら最終的に数の多いほうが勝ち、将棋なら王をとったほうが勝ち。ゲームによって勝利条件が違うということは、なんとなく、美琴にもわかる気がする。

「あたしも、聞きたいことがあるわ。このリアルゲームには、セーブとロードはあるの?」

田中は笑った。

「あつてどうするの。あつたとしても、さっきはああだったから今度はこうしよう、ってことはできないよ。ロード前の記憶が反映されずに、なかったことになる。要するに、ロードしたところで同じことをくり返すだけだね」

「そんなことはないわ。ロードすることにサイコロを転がしたら、目は違うはずでしょ」

試すような有里沙の言葉に、田中は表情を変えずに黙ってしまった。自分たちの意志によって進む物事は変わらなくても、単純に確率によるものは変わるのではないかと、そういつているのだ。

有里沙にとつて、これは重要な事項だった。その緊張が伝わり、美琴も息を飲んで返事を待つ。

「……できない」

固い声で、田中は答える。有里沙は片眉を上げた。

「あるのか、ないのか。を、聞いたんだけど」

「できないよ。君らの意志じゃね」

一步も譲らないという姿勢だったが、有里沙も引き下がる様子はなかった。美琴も、田中の曖昧な表現に疑問を覚える。できないと

いいたいなら、「ない」といつてしまえばすむ問題なのに、なぜあえてそういう答えになるのだろう。

「……つまり、田中さんの意志ならできるということですか？」

そう思った、というよりは、思いつきに近い問いを口にする。田中は頭を押さえ、困ったように目を伏せた。

「いいかたを変えよう。サイコロの目は変わるといったけどね、アリサくん。世界中の、すべての事象がなにひとつ変わらない状態でサイコロを振ったとして、サイコロの目だけが、本当に変わると思ukai。他からなんらかの作用がない限り、いくらやり直してもくり返すだけだ。確かに、サイコロだけで考えるなら、それぞれの目が出る確率は六分の一だけど、サイコロを持つ人間の手、転がる地面の状態、そのときの空気の流れ　　ぜんぶが一緒なら、目は同じだよ」

「……わかったわ」

有里沙は、ふいと田中から目をそらした。

「基本的にあなたは役に立たないってことね」

「アリサくん、僕のことキライでしょ」

「好かれてるとでも思ってたの？」

ぴしりと返されて、田中は背中を丸めて落ち込み始める。どこか他人事のようにそのやりとりを眺め、美琴は、いまのやりとりを、もう一度頭のなかでくり返していた。

なにか、変だ。

漠然と、そう思った。すっきりしない。いまの回りくどい説明は、なんだったのだろう。

「そんな顔しないで、大丈夫よ」

有里沙に声をかけられ、初めて自分が眉間に皺を寄せていたことに気づく。有里沙は美琴の頭に手を乗せると、くしゃくしゃと撫で回した。

「あれば楽だと思ったけど　　ないならしないで、やりようがあるわ。あたしのゲーマーとしての知識と経験、フル活用して、ちゃっっちゃ

とクリアしちゃいましょう。ごはん食べたらもうひとり、仲間を増やしに行くわよ」

「仲間？」

突拍子もない申し出に、美琴は甲高い声で聞き返してしまった。そもそも、仲間、という単語に慣れない。

「そう、仲間。TSでは、仲間にできるキャラクターは百人、けど一回のプレイでパーティーに加えられる人数はたった二人なの。ちゃんと百人分、ストーリーにからんだイベントが用意されているところが、このゲーム大ヒットの大きな要因ね。完全にやり尽くすには、どれだけかかるか……」つと、話が逸れたわね、ごめんごめん」

コホン、ともったいぶるように咳払いをして、有里沙は続けた。

「美琴ちゃんが勇者で、主人公。あと二人の仲間は　そのホストは役に立つてくれそうにないから除外として　あたしと、もうひとり。いい人材がいるから、まかせといて」

展開についていけず、ぱちぱちと目を瞬かせる美琴に、有里沙はウィンクしてみた。

*

男の拳が眉間にめり込み、見るからにちんぴらふうの柄シャツの男がふつとんだ。数メートル先の地面に背中を打ちつけ、ぐえ、と呻いて気を失う。

拳を繰り出したほうの男は、背もそれほど高くはなく、格闘技の選手のようにがっちりした体格でもなかった。まだ、少年と違っていい年齢だろう。富北沢高校の制服である灰色のブレザーに身を包み、小脇に学生鞆を抱えている姿は、むしろ暴力とはほど遠い人種に見える。髪も染めているわけではなく、黒々としており、どこにでもいるような短髪だ。ちんぴらを殴り飛ばした現場を目撃している、一度瞬きをしてしまえば、先ほど見た情景のほうを疑いそう。とはいえ、その目は鋭く、いかにも不機嫌ではあった。

舞台は、鉄橋の下の河川敷。

富北沢近辺で、ケンカといえはここだ。

「生意気な……！ よくも舎弟たちをやってくれたな！ てめえら、たたんじまえ！」

アフロに柄シャツの男が叫び、高校生ひとりを囲んでいたちんぴら数人が、おー、と吠えながらそれぞれの得物を手に突っ込んでくる。慌てず騒がず、輪の中心にいた少年は、学生鞆を地面に置いた。両の拳を握り、腰を落として、構える。

あつという間だった。

彼は、自分から殴りにいくようなことはしなかった。がつがついより、待っているほうが効率が良いからだ。振り下ろされる得物を掴み、かるくいなしてカウンターパンチ。いまだと後ろから飛んでくる蹴りをガードして、手に入れた得物で突く。そうして、瞬間に、ひとり、またひとりと、地面に沈めていった。

最後に残った、一番偉そうなアフロが、くそう、といいながらナイフを取り出した。少年は、両手をぶらぶらと振って、つまらなそうに、アフロを見た。

「やめといたら？」

さらりと一言。強さに傲っている様子では決してない。

「覚えてろ！」

アフロは、やめておくことにしたようだった。情けなくも、何度かつまづきながら、草に覆われた坂を登っていく。そうして、そのまま走り去った。

少年は嘆息した。彼はこういったことに慣れてはいたが、好きなわけではなかった。一度ケンカをして、しかも勝ってしまえば、やつかいごとは勝手に舞い込むようになるものだ。首をひねりながら学生鞆を拾いあげ、自分を中心にぐったり倒れている男たちをまたぎ、自分もまた坂を登ろうとする。

よいしょ、と最初の一步を傾斜に乗せたとき、ぞわりと悪寒が走った。背後に、なにかの気配。

彼が振り返ったのと、川から黄土色の蛇のようなものが飛び出てきたのは、まったく同時だった。蛇のような、といっても、車二台を連ねたほどの大きさがある。黄土色のぬめついた皮膚を光らせながら、それは地面を這うようにして一直線に少年に襲いかかった。「気持ち悪いんだよ！」

少年は叫び、右足でたたき落とすように蹴りつけた。力が拮抗したような数秒の競り合いの後、彼の気合いの一声とともに、力負けした蛇まがいのものがのけぞるように倒れる。

彼は、油断しなかった。ポケットから素早くナイフを取り出し、蛇の眉間に突き立てた。

悲鳴もなく、傷口から闇が広がり、あっという間にそれは消えてなくなった。確かにそこにいたことを示すように、ぼと、と緑色の石が落ちる。

「……ついてねえな」

ぼやき、石を拾おうと腰を曲げる。そのとき、胸ポケットに押し込んである生徒手帳から、軽快な音が鳴った。なにが起こったのか、見なくてもわかる。

「良太郎、あんたまたレベル上がったの？　ほんと無敵ね」

鉄橋の上から、よく通る高い声がかけて、少年は、あからさまに顔をしかめた。

「……姉貴」

桜井良太郎、高校一年生。

彼こそが、有里沙の優秀な弟であり、彼女のいう「いい人材」であつた。

「……その話を、信じろつて？」

姉から、どういふ事柄なのか説明を受けている間、ずっと苦虫を噛みつぶしたような顔をしていた桜井良太郎は、聞き終わって開口一番、そう吐き捨てた。一応、疑問の形になつてはいるが、信じられるわけねーだろばーかというニュアンスが存分に含まれている。

美琴と有里沙、連れてこられた良太郎と、それから田中は、地下鉄に乗って矢那呉の中心街まで来ていた。目的地があるらしく、有里沙がずかずかと先頭を進む。

「別に、信じなくてもいいわ。でも協力して」

振り返りもせず、有里沙は弟に命ずる。良太郎は返事をしなかったが、どうやらこの姉弟間で、弟が姉に逆らうという構図は存在しないようだ。良太郎は惘然としているものの、それでも姉の隣を歩いている。

姉弟から二メートルほど遅れて歩きながら、美琴は妙に似ている姉弟の後ろ姿を見ていた。良太郎は、有里沙のように髪を金に染めているわけではないのに、やはりどこか凄味があるのだ。美琴が最初に見たのがケンカしている場面。しかも良太郎の圧勝。だったので、その影響も大きい。正直、ちよつと怖い。

会うなり有里沙が問答無用で良太郎を連行し、状況説明に入ってしまったので、美琴はまだ一言も彼と口を聞いていなかった。一応、巻き込んでしまう側として、なにかをいわなくてはという気持ちはあるのだが、タイミングがつかめない。

「つーかさ、姉貴の話だと、悪いのぜんぶこの田中ってひとだろ。あんた、なんでいいなりになってんだよ」

急に振り返ってきたので、ぱつちりと目が合ってしまった。美琴は、蛇に睨まれた蛙になった気分、びくりと縮こまる。

「……なに、その反応」

彼にしてみれば、わけがわからないようだ。気分を害した様子もなく、単に不思議そうに、眉間に皺を寄せる。

「あんたねえ、美琴ちゃんはおつーのかよわいいタイケな女の子なんだから、もうちよつとソフトに扱いなさいよ。割れ物だと思いなさい、割れ物。割れ物注意よ」

「割れ物……」

美琴は呻いた。なにか、自己主張しなくては、ガラス製品かなにかになつてしまう。

「あの……自己紹介が遅れましたが、吉川美琴といます。富北沢中学の三年です。こ、このたびは、巻き込んでしまふかたちになりまして……」

うまく舌が回らない。良太郎は、まだなにやら続けようとしている美琴を遮った。

「そういうのはいいからさ、吉川はなんでいいなりになってんの。悔しくねーの？ この田中つてのに、ガツンと行ってやれば？ ゲーマーな姉貴みたいに、お祭り気分で乗り気になってるわけでもねーんだろ」

そのいいかたには、決してトゲはなく、彼は単純にそう思っているようだった。美琴は、ぐっとお腹に力を入れ、良太郎の目を見た。「悔しい思いは、もう、しました。これ以上、後悔しないように……できることを、やることにしたんです」

良太郎と有里沙と、田中までもが、意外そうな目で美琴を見た。

「……ふうん。じゃ、協力するわ。ヒマだし」

良太郎は、ついと目を逸らす。その後頭部を、有里沙が思いきりはたいた。

「ていうか、あたしがお祭り気分ってどういうことよ。すごい心外なんだけど」

「つてーな！ 姉貴は確実にお祭り気分だろ！ いま聞いたことがホントだろうがウソだろうが、そういうイベントごとに乗っかるのは大好物だろーがよ」

有里沙は、大きく息を吸い込み、はっ、と気合いの一声を発すると、良太郎のみぞおちに拳をぶちこんだ。素人の拳だが、良太郎は腰を折って呻く。

「いてえ……なんか握ってんな、それ……」

「鉛玉。か弱い乙女の知恵ね。確かにこういう状況は大好物だけど、あたし、本気なの。あんたもそのつもりでかかんない」

ものすごい姉弟愛だ　美琴はひそかに戦慄した。

「仲が良いねえ」

田中の感想には相変わらずやる気がない。

「それで、有里沙先輩　いま、わたしたち、どこに向かっているんですか？　平日ですし、あんまり堂々と歩くのもどうかと」

すでに堂々と大通りを歩いていたが、美琴が控えめにもの申す。私服の二人はともかく、良太郎は制服姿だ。

「そんなの、どうとでもなるわよ。……そうね、でもちよっと、良太郎の制服だけは目立つかもね」

そうつぶやいて、有里沙はいきなり右手にあった百貨店に入ってしまった。あまりに突然の行動だったので、三人は入り口前で立ち止まる。ついて行くべきなのか、待っているべきなのか。

「……有里沙先輩？」

つぶやくが、声が届くはずもない。意識していなかったが、見上げると、右手にずっと続いていたショーウィンドウは、すべて同じ百貨店のものだったようだ。そういえば、リニューアルオープンがどのと、テレビでやっていた気がする。

ガラスの向こうには、化粧品売り場が展開されていたが、そこには有里沙の姿は見えない。どうしたものかと、良太郎に目をやると彼はガラスにもたれかかっていた。待つつもりのように。

「アリサくんは頼りになるねえ。お姉さんはいつもあんな感じ？」

田中の問いに、良太郎は眉を寄せて不機嫌な視線を返した。

「頼りになるっつーか、鉄砲玉だな。思いつきだけで行動するタイプ」

「リョウタロくんは……」

いおうかどうしようか、迷うような間を挟み、田中はちよっと小首をかしげた。

「もしかして、僕になにか、怒ってる？」

「別に。あんたみたいな胡散臭いのと、仲良くやる理由もねーし」

その様子に、美琴はハラハラしたが、とはいえ仲良くしてくださいという場面でもないような気がした。田中が胡散臭いのも、仲良くする理由がないのも本当だ。むしろ、自分がすんなり馴染みすぎ

てしまっていたのだ。良太郎の反応のほうが正しいのだろう。

居心地の悪い沈黙が数分間続き、やっと有里沙が戻ってきた。手には、美琴でも見たことのあるブランドのロゴが入った大きな紙袋がひとつ。

「はい、良太郎。買ってきたからトイレかどっかで着替えてきて」
「どうやら、さくつと衣類一式を揃えてしまったらしい。良太郎も、さほど驚いた様子もなく、紙袋を受け取って百貨店に入っていた。もしかして、と美琴は思った。

「……お金持ちなんですか？」
「ずいぶんとぶしつけな質問だったが、有里沙はあっさりと頷く。
「うん、かなり」

美琴は何だか切なくなつて目を逸らし、田中は「いやあ、頼りになるなあ」と感想をくり返した。

「まずは金、次にアイテム、あとは効率の良いレベル上げ R P
Gを確実にクリアするなら、これしかないわ」

あたしにクリアできないゲームはない、そっくり切った有里沙は、ゲームクリアのポイントを、きつぱりと簡潔に宣言した。

「まずは、お金、ですか……」
美琴は、目の前にそびえる建物を見上げた。

キラキラと電飾が輝く、目新しいその建物の頂上に、『カジノ』と三文字がきらめいている。その三文字がなければ、見た目は大きなパチンコ屋だ。ただし、ガラス部分以外は、赤と黄色という大変目に引くカラーリングなので、パチンコ屋にしては浮いているかもしれない。入り口付近に、所狭しと花飾りが並べられているところを見ると、オープンしたばかりのようだ。

「カジノって……」

思わず呻く。日本でカジノ。美琴にとってはものすごい違和感だ。「RPGのお金儲けは、まあいろいろあるけど、ドカンと稼ぎたいならやつぱりこれね。美琴ちゃんとそのホストの話聞いてから、

あたしもいまのこの現実を、客観的に見られるようになってきたの。ノウハウを丸ごと使えるわ」

それまでは、こんなこと思いつきもしなかったけどね。そう続けて、有里沙は実に悪そうに笑った。ニヤリというより、ニタリに近い。

その様子に、頼もしさと不安とを半々に感じながら、美琴はふと考えた。この大きなカジノができる前は。世界が融合する前は。この場所に、いったいなにがあったのだろう。カジノなわけがない。やはり、パチンコ屋だろうか。

「……思い出せない……」

駅前の、目立つ場所なのに、どうしても思い出せなかった。

「ゲームのカジノはね、行く前にセーブしておいて、稼ぎが出たらまたセーブ、損したらロードの繰り返しで根気よくがんばれば、だれでも儲けが出るわ。でもそれはできないみたいだから。ついてきて」

得意げに説明して、有里沙は再び歩き出した。

「え、入るんじゃないの？」

シャツにジーンズという軽快な服装に着替えた良太郎が、実に残念そうな声を上げたところを見ると、カジノに高校生が入ること自体は、いまの世界にとっては普通のことのようだ。パチンコとかはどうなんだろうと、美琴はぼんやり思う。とはいえ、その手の疑問はいいだしたらきりがない。

カジノの前を通り過ぎて、有里沙はどんどん裏路地に入っていた。良太郎、美琴、田中と、黙って続く。表通りは賑やかだったが、奥に入っていくほど静かになっていく様子は、不気味でもあった。駐車車両が異様に多く、いかがわしい店も増えていく。

「……ちよつと、怖いかも」

思わずつぶやく。昼間なのに、なぜか暗い。閉まっている店が多いからだろうか。

「ミコトくんは恐がりだねえ」

田中がからかうようなことをいいながら、美琴の隣に並ぶ。もしかして優しさだろつかと一瞬考えて、すぐに否定した。そんな男ではない。

「そのへん歩いてるやつらと目え合わせないほうがいいぞ」

「あ、合わせたら、どうなるんですか」

「やってみるか？」

良太郎の口調には、からかいの色は皆無なだけに、余計怖い。いいです、と美琴は遠慮した。裏の世界のことは、知らなくていいなら知りたくない。

「つーいた。さ、こっから、あたしのいうとおりにしてね」

有里沙が立ち止まったのは、ひどく細長い、木造の建物の前だった。ビルとビルの間隙にむりやり建てたような小ささだ。三人横に並んだらもう入れないような幅しかないのに、見上げると高さだけはある。三、四階はありそうだ。

「マジックショップ……」

出入り口の上の、文字を読み上げる。世界が融合してから、あちこちで見るようになった。美琴の持つタリスマンやアミュレット、それに冷気の生まれる扇子も、ここではないが、どれもマジックショップで購入したものだ。美琴の認識では、『ティピカルサーガ』の世界のものが売っている店、ということになる。

「あ、知ってる。レアショップだろ、ここ。噂で聞いた」

良太郎の言葉に、有里沙は満足げに頷いた。

「レアショップってなんですか？」

「ふつうの店では手に入らない高価なものとか、貴重なものが売っている店のことだね。アリサくん、入れるの？」

美琴には、田中の問いの意味はわからなかったが、良太郎にはぴんときたようだった。

「レアショップに入るには、暗号がいるんだろ」

「暗号……お店に入るのに？」

もつなを聞いても驚くまいと思っていたのに、このあたりの微

妙な融合具合にいまだに慣れない。

有里沙は、肩を揺らして笑った。まるっきり悪役笑いだ。もったいぶるようにして、携帯電話を取り出す。

「調べておいたわ」

じゃーん、と効果音でも聞こえてきそうなアクションで、印籠のように掲げた。

「ネット社会、バンザイ！」

「インターネットで調べられるんですか？」

「トーンでしょ。世の中どれだけヒマ人がいると思ってるの」

素早い指の動きで、ボタンを押し始める。美琴は気になって、横からのぞき込んだ。メモ機能に登録してあったようだ。

「世界が融合してるってのは、こういうところ便利だねえ」

ゆるいテンションで感心する田中を、有里沙は鼻で笑う。

「融合してなくてもね、ゲームの攻略なんて、発売したその日からネット上に公開されるのよ。ゲームじゃなくても同じ。暗号があれば解読したいひとがいて、解読したら公開したいひとがいるの。そーいうもんよ」

「姉貴は公開する側だよな。ヒマ人だから」

有里沙は無言で弟の頭をはたき、急に声をひそめた。

「こんばんは、良いお天気ですね、明日の朝食はカキフライ？」

美琴は言葉を失ったが、良太郎と田中は、それがなんなのかすぐに理解したようだった。

「変な暗号」

「ユーモアに満ちてるね」

微妙に食い違った男性陣の感想に、はっとする。美琴は、間違いなく良太郎の感想に一票だ。

「いまから、ひとりずつ、暗号をいって店内に入る。買ってくるのは、『ラックキャンディー』。とりあえず、あたしがお金を立て替えるわ」

そういって、有里沙は無造作に三人に金を渡した。一万円札だ。

ぱつと数えられないほどの枚数に、美琴は恐れおののく。

「そ、そんなに高いんですか？」

「高い。でもちゃんと元は取るから気にしないで。いい？」

「ラックキャンディー」を買ったら出てきて、一度さっきのカジノのあたりまで戻って、またここまで来て、店に入って同じものを買う。これを……そうね、手持ちの問題もあるから、ひとり三回。それで十二個手に入るわね。充分でしょ。」

「それ、僕もやるの？」

「アタリマエでしょ。」

美琴はわけがわからずに、有里沙と札束とを交互に見る。美琴にとっては意外なことに、それは良太郎も同じだったようだ。

「なんでそんなめんどくせーことするんだよ。」

「これがTSだからよ。」

有里沙は肩をすくめた。

「TSの世界では、マジックショップでレアアイテムを買うと、三フィールド画面を動かさないと、同じレアアイテムは入荷されないの。まあ、買うひとが違えば多分それは適応されないわ。カジノまで戻れば充分三フィールドだろうから、アイテムを復活させて買うってことよ。ゲームでは、キャンディー系のレアアイテムは一度に一つしか使えないけど、これは現実なんだから、食べちゃえばいいはずだわ。『使えません』なんて表示、出ようがないもの。」

「……はあ？」

「……………」

美琴にも良太郎にも、なにをいつているのかさっぱりだ。わかっているのかいないのか、田中はいつもの顔で突っ立っている。

「わかんないなら考えてみましょうがないから、とにかく指示どおりにして。金儲けへの近道よ。」

『ラックキャンディー』は一つ五万円もした。一つ買うと、店員らしい女性に「売り切れです」といわれるのに、有里沙のいうとおり

にカジノまで行って戻ってくると、またごくあたりまえに入荷されていた。これが、有里沙のいう「ノウハウ」なのだろう。仕組みはわからなかったが、美琴は素直に有里沙を尊敬した。すごい。

四人で合計六十万円を使い、手に入したのはラックキャンディー十二個。それからそろそろとカジノまで戻り、有里沙はひとりでキャンディー十二個を一気にほおばった。

「ひふわよ」

行くわよ、といったらしかった。かわいそうなぐらい口がもごもごなのに、妙にかっこよく見える。彼女がずかずかとカジノへ入って行くので、美琴たちも続く。

店内は、大型のゲームセンターのような様相だった。とはいえ、ユーフォーキヤッチャーの類があるはずもなく、入り口付近にはまずスロットマシンが並んでいる。中央にカウンターがあり、その奥にはテーブルがいくつも見えた。カードゲームとルーレット、その向こうでは競馬マシンのようなものもある。

有里沙はカウンターへ直行し、無言で金を差し出した。

「四十万円お預かり致します。こちら、メダル四百枚でございます」
赤いシャツに黒い蝶ネクタイの男性店員が、にこやかにバケツの入ったメダルを手渡す。

「……四十万……」

「お金持ちはやること大きいねえ」

美琴と田中はそろって感心するが、良太郎にはたいした感慨はないようだった。美琴と同じ世界の人間のはずなのに、ある意味では確実に違う世界のひとたちなのだ、と、美琴は痛感する。先ほどのキャンディー代と合わせると、百万円だ。

有里沙はバケツを受け取り、カードゲームのテーブルへと向かった。迷わずメダル全部をつぎ込み、ゲームを開始する。

美琴にはよくわからなかったが、自分と相手がランプの束を裏返して持ち、順番に一枚ずつ出して行って、相手よりも数字が大きければ賭けたメダルが倍、少なければ没収、というゲームらしかつ

た。勝ち続ければ倍々に増えていくが、負けた時点ですべて持つていかれてしまうため、やめどきを見極めるのが重要になってくる。

「すごい……」

「すごい」

「壮観だね」

テーブルのまわりには、あつという間に人ばかりができた。

『ラックキャンディー』 その名のとおり、使用者の運を一時的に良くするアイテム。

有里沙は、一度として負けなかったのだ。

もうそろそろ効力が切れるかな、と有里沙がゲームをやめたころには、メダルはバケツ何個分なのかわからないほどになっていた。

有里沙は手慣れた様子で、いくつかのアイテムと交換し、残ったメダルを換金した。それでも、スーツケース三分の大金になった。

「わたし、有里沙先輩がいなかったら、絶対にクリアなんてできませんでした……」

休憩ということで近くのファミリレストランに入り、紅茶を飲んで一息。だんだんと、すごいことをしたのだという実感が湧いてきて、しみじみと美琴はつぶやいた。あつという間に、アイテムやお金を大量に手に入れてしまった。

「この猫バッチは全員で身につけましょう。モンスターを倒したときの経験値が二倍になるの。こっちの犬バッチは美琴ちゃんだけでいいわ。倒したときに出てくるストーン、あれも倍になるから」

有里沙は、やたらに可愛らしいバッチをテーブルに並べた。雑貨屋に売っていきそうなデザインだ。五百円玉ぐらいの丸形で、癒し系のイラストが描かれている。

ゲームをしない美琴も、これらのアイテムがウラワザじみたものであるということはわかる。美琴だけでは、思いつきもなかったワザだ。

「あとは、残ったお金で武器と防具のレベルを上げましょう。それ

が終わったら、モンスター狩りね」

有里沙は心から楽しそうだ。ゲーマーの血が騒ぐのだろうか。

「この調子だと、あっさり魔王倒せそうだね。ミコトくん、心強い人材が仲間になってくれて良かったね。その運の良さは君の武器だよ」

「本当に、そう思います」

それについてはなんの異論もない。心からうなづく。

「こんなのつけてるだけで、経験値二倍かよ……。俺のいままでの苦勞はいつたいなんだっただ……。 」

「まだ落ちこんでんの？ 小さい男はモテないわよ。美琴ちゃんからもなんかいつてあげてよ」

猫バツチの存在を聞いてから、どんよりとした空気を背負ってしまった良太郎に、有里沙が容赦なく冷たい言葉を投げる。なんかいつてあげて、といわれても、美琴にはなんと声をかけてあげればいいのかさっぱりわからない。世の中理不尽ですよ、とかいうのも、ちよつと違う気がする。

「あの、良太郎先輩は、レベルいくつなんでしょうか？」

結局、質問になった。

「ああ、教えてもらってないわ、そういえば。いい機会だから、みんなで見せ合いましょ」

ちよつと、それぞれの注文したケーキやらパフェやらが運ばれて来たので、それをテーブルの隅へ押しやって、有里沙は鞆から生徒手帳を取り出した。写真が貼り付けてある最初のページを開いて、中央に置く。

桜井有里沙、と名前が書かれているその隣に、名前よりは大きな文字で、『3』と記されていた。

「え、レベルって、生徒手帳に書いてあるんですか？」

「え、書いてないの？ ああ、そうか、知らないのね」

目を丸くする美琴に、有里沙が驚いて声をあげるが、すぐに責めるような目で田中を見る。田中はひとりもくもくとフルーツパフェ

に長いスプーンを突き刺したところだったが、視線に気づき、あれ、とまるで空気を読まない間抜けな声を出した。

「みんな食べないの？」

「……いま初めて、姉貴がいったこと信じようかって気になったわ、俺。俺らにとってはあたりまえのこと、吉川にはあたりまえじゃねーのな」

良太郎のセリフと、テーブルの上の生徒手帳とで、田中は事情を察したようだった。美琴も、説明してもらわずともなんとなくわかったが、それでも隣の田中に視線を送る。少し名残惜しそうに、田中はスプーンから手を離れた。

「いつてなかったかもねえ。ミコトくん、いま生徒手帳持ってる？」「制服じゃないから、持ってないです」

セーラー服の胸ポケットに入れっぱなしだ。

「じゃあ、これからはいつも持ち歩いて。融合したいまのこの世界では、レベルっていう概念があるのは、ミコトくんも知ってるね。自分のレベルはどうやったたらわかるかっていうと、IDを見ればわかるようになってる。ひとそれぞれだけど、車の免許があれば免許証、学生なら学生証……どれもなければ、保険証かな。モンスターを倒すと、強さに応じて経験値が加算されて、一定値を超えたらレベルが上がっていくんだ。その際、お知らせ音楽が鳴って、IDのレベル表示が自動的に書き換えられる。まあ、ミコトくんは、レベル一だね」

美琴は妙に感心した。クラスの男子たちが、レベルについて話しているときに、どうやってたら自分のレベルがわかるのだろうと、ふと思ったことを思い出した。なかなか合理的にできている。

「俺はレベル一五」

良太郎も、ジーンズのポケットに入れてあつたらしい生徒手帳を、無造作にテーブルに置く。レベル一五がすごいのかそうでもないのか、美琴にはよくわからない。

「ホストは？」

「ホストってやめてよ……。僕にはレベルはないよ。この世界の人間じゃないからね。そもそもIDになるようなものがない」

有里沙は、唇をすぼめるようにして、何ごとか考え始めた。

「良太郎でも一五か……。標準クリアレベルはどれくらいかしら……」

有里沙が黙ってしまうと、このメンバーはいやに静かになる。美琴は所在なげに視線を漂わせ、飲みたいわけでもなかったが紅茶を飲んで、間をつなごうと試みた。ふと視線を感じると、斜め前に座る良太郎が、無遠慮にじつとこちらを見ていた。

「……な、なんでしよう？」

目が合ってしまったって、逸らすタイミングも見失う。良太郎は、眉根を寄せて、美琴を凝視している。それから、正面の田中に視線を移した。

「なあ、なんでこいつが、『勇者』？ それってあんたが選んだの？」

急に矛先を向けられて、田中は不自然にむせた。

「……考えてもみなかった。田中さんが、選んだんですか？ わたしを？」

「うーん、選んだ、わけじゃない……。かな。なんで、そんなに不思議？」

田中お得意の、問いを重ねる話術に、美琴は内心むっとする。この男はこうやって、いつの間にか話題を核心からずらしていくのだ。考えてみたら、イエス、ノーで割り切った答えかたをするほうが希な気がする。

「不思議だろ。いまあんた、吉川の生徒手帳を見るまでもなくレベル一っていいきったしさ。強い弱いが関係ねーなら、なんか特別な素質があるとか？ どんな逆境にもめげずにガンバル主人公ってガラにも見えねーし」

結構いいたい放題だったが、異を唱えたいわけでもなかったの、美琴も田中の反応を待つ。

田中は、数拍考えて、それからかすかに笑んだ。

「そんなことないよ。ずいぶんうまくいつているほうだ。ミコトくんには、自覚はないかもしれないけど、なかなか真似できない、天性のものがあるからね」

なにかがひつかかった気がして、美琴はそつと眉をひそめた。ときどき、こういう感覚を味わうことがある。パズルのピースが落ちてきたみたいなの、妙な感覚。

「もしもしパパ？ あたし。うん、誕生日のプレゼント決めたの。いまいい？」

突然、有里沙の高い声が割り込んできて、三人はそちらを見た。彼女は赤い携帯電話を手にしている。

「あたし、シルバーキャトビが欲しいな。部屋いっぱい。いいでしょ？ きゃー、ありがとう！ さすがパパ！ じゃ、よろしくね。うん、パパもお仕事がんばって。じゃあねー」

見たことのないような明るい笑顔と、いかにも女子高生なテンションで電話を終えると、有里沙は急に落ち着き払って、ふふんと笑った。

「完璧だわ」

なにか完璧なのか聞く前に、彼女はさつさとケーキを食べ始める。まだ食べてなかったの、といわれてしまったので、美琴と良太郎は釈然としないながらもおやつタイムを満喫した。

自他共に認めるゲームマーである桜井有里沙の頭のなかには、すでに明確なプランがあるようだった。

*

有里沙に導かれるままに、一行は『武器・防具屋』なるところに来ていた。美琴の持っているダガーは、田中からもらったものであるため、彼女が足を踏み入れるのは初めてだ。

駅前のメインストリートにあるそれは、これでもかと様々な色彩

を駆使して飾り立てられたショーウィンドウのなかで、ぽつかりと浮いたようにそびえていた。イタリアンレストランが建ち並ぶなかに、突然老舗のラーメン屋が混ざってしまったような、そんな違和感を放っているのに、いやに堂々としている。四角く、茶色の建物の上に、大きな赤い三角屋根が乗っかかっている、どちらかというと民家に近い。剣と盾とがデザインされた木製の看板が、出入り口にぶら下がっている。

店内は、冷房の類は一切かかっていないようで、いるだけでじつとりと汗ばむほどに熱気を帯びていた。三段、四段のディスプレイ用の棚に、所狭しと武器が並べられている。だれにでも手が届くところに、平然と武器が置いてあるさまは、美琴にとっては恐ろしくもあつたが、いっそ現実味が無いような気もした。まるで模型屋のようだ。見ただけでは用途のわからないものも数多く並んでいる。

「武器はね、いいものを持つてるほうが攻撃力が上がるから、奮発するわよ。ジョブもなにもないんだから、好みで選んじやいませよ」
さらりといって、有里沙はさっさと自分の武器を選び始める。良太郎もこういうところは嫌いではないようで、目を輝かせていた。
「好み、つていわれても……」

美琴は途方に暮れた。武器に好きも嫌いもない。
「なんでもいいんじゃない？ 基本的には高いやつほど強いから、値段とデザインで決めちゃえば？」

「簡単にいますけど……オススメとかないですか？ もう、さっぱりなんです」

こういうときにこそ役に立ってもらわなければいけない。軽い気持でいって見たのだが、田中は思いのほか真剣に、店内を見わたした。

「うーん、やっぱり勇者なんだし、ミコトくんには剣かなあ」
「剣っ」

美琴にとってはもっとも敷居の高いところで田中の目が止まり、思わず身震いする。勇者なんだし、などという理由で、持つ武器が

決められてしまっていていいものなのだろうか。

連れて行かれるままに剣コーナーに移動したが、きらきらと輝く刃に目眩がした。いま美琴が持っているダガーは、包丁とたいして違わないぐらいの大きさしかないが、目の前にずらりと並ぶのは、それとは比較にならないぐらい大きいものばかりなのだ。

値段とデザインで、といわれたので、高そうなものを見ていく。やたら大きな剣は到底扱える気にならず、少しずつランクを下げていくと、あまり大きくはない曲刀が目にとまった。日本刀に似ているかもしれないが、日本刀よりも刃の幅が広く、反っているように見える。

『シヤムシール』とネームプレートがついていた。聞いたこともないが、なんとなく猫の種類みたいで、かわいいかもしれない。

「シヤムシールにするの、美琴ちゃん？」

めざとく現れた有里沙は、早くも決めたようで、五十センチほどの木の棒を持っていた。先端に紫色の球体がついており、接合部に金属で装飾が施されている。

「有里沙先輩は、どうしたんですか？」

「あたし？ あたしは、やるならウィッチだから、ロッドにするわ。ワンドと迷ったけど、こっちのほうがカワイイし」

「……………そうですか」

わからない単語が三つも出てきたので、美琴は理解を諦めた。それが、『ティピカルサーガ』の常識なのか、ゲーマーの常識なのかはよくわからなかったが、どちらにしる美琴には遠い世界だ。

「良太郎先輩も、決めたんでしょうか」

棚を三つほど隔てた向こう側に、後ろ姿が見える。さあねえ、と有里沙はやる気のない答えを返してきた。

「あの子は拳で語り合うだろうから、ナックルでも買うんじゃない？ トドメ用に、もともとクリスナイフを持つてるみたいだから、それはそのまま使うんだろうし」

「……………」

やはりよくわからなかった。

「で？ 美琴ちゃんはシャムシール？」

美琴は考えた。一生懸命、刃の曲がったこのシャムシールとかいう名の剣を構えて、モンスターと戦っている自分をイメージしようと、頑張った。

「……想像できない……」

絶望的な気持ちでつぶやく。ゲームならありなのかもしれないが、いくらゲームの世界といわれようとも、美琴にとっては現実なのだ。こんな大きな剣を手に、「えいやー」とやっている自分など、学会かなにかでなければ有り得ない。

「じゃあ、柄の長いのにしたら？ それならミコトくんにも使いやすいかも」

田中が、どこからか長い杖のようなものを持ってきた。美琴の身長よりも長く、頼りないぐらいに細い棒だ。先端には、尖った金属の穂先がついている。金属部を固定するかのように赤い布が巻きつけてあり、デザインなのだろう、結ばれたそのままに、布の端が垂れていた。

「これは、こう　ブスツと突くんだよ。ブスツと」

姿勢良く水平に棒を構え、田中は真つ直ぐ突き刺すような真似をした。

「スパアね。いいかも、使いやすくて」

有里沙の反応も上々だ。

これなら、少なくともシャムシールよりは、美琴にも扱えるような気がした。持ってみると、長いのに意外に軽い。

「うん。じゃあ、これで」

ほとんど諦めの境地で決定する。本当は、使わないですむならそれにこしたことはないのだが。

良太郎が持ってきたのは、有里沙のいうとおりナックルという名の金属の武器だった。拳に装着する類の武器で、四つの穴に指を入れて、握りしめて殴りつけることで威力が増すらしい。

むつつりとしたひげ面の店主に、有里沙がまとめて金を支払った。美琴は怖くて値段を見なかったが、数十万はしたのだろう。美琴のスパアだけで、十二万、と表示があったのだ。恐ろしい。

「……そういえば、『武器・防具屋』って書いてあったのに、防具はほとんど置いてないんですね」

ふと思いついて口にした。甲冑なんか並んでいるのを想像していたが、ベストのようなものや、胸当てが置いてあるぐらいで、フアンタジー映画で見るとは違う。鎧は見当たらない。

そうだね、と田中はうなずいた。

「世界の融合の際に、ごてごての鎧はなくなったみたいだね。見た目がかっこわるいからじゃない？ その代わり、ふつうの服の強度を上げるってことができるよ。アリサくんがいつてたでしょ、武器と防具のレベルを上げるって」

そういえば、いつていたかもしれない。美琴は、まさに会計が行われている武器たちを見やった。あそこに、これ以上お金をつき込むということなのだろうか。

「もともと、『ティピカルサーガ』のシステムでは、最初から持っている武器・防具をずっと使うのも、途中で買い換えるのも、自由なんだ。どちらにしろ、シヨップに持っていくことで、『強化』っていうのができる。お金さえかければ、ほぼ無限にね。融合した世界に、がっちりした鎧なんかはないから、まあ、普段着を強化するって形になるね」

「じゃあ、おじさん。残り全額使って、あたしたち全員の武器と、防具　いま着てる服を防具としてね　のレベルとを、上げられるだけ上げて。あ、このホストは除外ね」

田中の説明とほぼ同時に、有里沙は店主に告げると、カジノで得た金をスーツケース二つ分、そのままカウンターに乗せた。美琴は信じられない思いでその様子を見たものの、所詮自分の常識では計り知れないのだろうと、もはや諦めの境地に達していた。わからないものはわからないのだから、わかる仲間に任せればいいのだ。

さすがにむき出しで武器を持ち歩きはしないだろうと思っていたが、店主は美琴のスパと有里沙のロッドを丁寧に黒い布で巻いてくれた。渡されて初めて、そういえばこうだった形状の長いものを持ち歩いているひとをたまに見かけるな、と美琴は思った。田中のように、手品さながらにタバコケースに収納するというワザは、だれにでも使えるものではないらしい。

そのまま、もう一度マジックショップに寄り、ウィッチ 有里沙いわく、魔女という意味らしい をやるという有里沙が魔法書を大量に購入。そこでやっと、帰路につく流れになった。

「有里沙先輩……あの、ちょっと勉強しておいたほうがいいかと思うので、なにかゲームを貸していただけませんか」

帰りの地下鉄のなかで、美琴がそう提案すると、意外なほどに有里沙のテンションが上がった。

「ゲーム？ いいよ、なんでもいって！ ハードはなに持ってるの？ ああ、いつでもできるように、ポータブルのほうがいいかな。」

じゃあハードごと貸すわ。そうね、TSによく似たゲームがあるから あ、これは他社の二番煎じなんだけど、これがけっこう売れたのよ、それやってみる？」

「姉貴つてほんとオタクだよな」

姉の勢いに、達観したように弟が感想を述べるが、当然有里沙の拳をいただくことになった。ゲーム風というなら攻撃力はたいしてないはずだが、そこは愛があるから痛いのだろうか。良太郎が頭を抱えて呻いている。

「お願いします。ちょっとゲームに慣れて、この世界にも慣れないと」

「良い心がけだねえ」

ひとつごとのように田中が感想を述べる。本来なら、美琴を導く役割として、彼からそういった提案があっても良さそうなものなのだが 美琴はそう思わないでもなかったが、彼にはなにかを期待す

るだけ無駄だ。

「それもいいことだけど、明日からはうちに集まって、レベル上げよ。パパに頼んであるから、効率よくばしばしレベル上げられるはずだわ。がんばろうね、美琴ちゃん！」

地下鉄内だというのに、有里沙は他の乗客の迷惑も顧みず、ひとりで「オー！」と拳を突き上げた。

5 「わたしは、この世界を、守ります」

美琴、有里沙、良太郎の三人は、毎日桜井家　大金をぼんと出すだけあって、さすがに大豪邸だ　のフィットネスルームなる場所、レベル上げにいそしんだ。倒すモンスターは一種類、『シルバーキヤトビ』という、銀色に輝くモンスターだ。有里沙が、誕生日プレゼントとして父親にねだったのがこのモンスターであり、毎日のようにフィットネスルームに山盛り運び込まれてくる。複数の会社の社長を務める桜井父が、人脈と金の力を遺憾なく発揮したことにより、各地から捕獲されてくるのだ。

『ティピカルサーガ』の世界では、モンスターの強さは色で判断される。白やピンクのような薄い色なら弱く、黒や深紅のような濃い色なら強いといった具合だ。ただし、もともとなるモンスターの基本の強さというものがあり、『キヤトビ』という、猫とウサギの子のようなごく弱いモンスターならば、いくら真っ黒でもたいして強くはならない。逆に、もともと強いモンスターは、真っ白でも黒いキヤトビより強い、というわけだ。とはいえ、すべてのモンスターが全色そろっているわけでもないの、色での判断はあくまで目安となる。

今回、美琴たちがやってつけまくっているシルバーキヤトビは美琴には、もう大量虐殺のように思えてしかたなかったが　一匹の持つ経験値が異様に高いことが特徴だ。銀色のモンスターというのがそもそも希少種であり、運良く巡り会えば一気にレベルが上がる、といわれている。それを誕生日プレゼントにねだる有里沙も有里沙だが、あっさり叶えてしまう桜井父も底知れない。

「いつてもわかんないだろうけど、ホワイトキヤトビの経験値が五、シルバーキヤトビの経験値は七七七なの。ちなみに生命値はホワイトが一二なのに対して、シルバーは四　経験値はパーティー全体にふりわけられるから、最初のうちは良太郎にやってもら

って、あたしらはイトコどりよ」

と、初日に有里沙が説明したが、本人もいつていたとおり、やはり美琴にはよくわからなかった。ただ、良太郎が一匹やつけることに生徒手帳から軽快な音楽が何度も聞こえてきたので、ものすごく効率よくレベルが上がっているらしいことはわかった。

学校に行かないままに、いつの間にか夏休みに突入していた。そのころには、美琴もスパアでちょっとつづくだけで、シルバーキャトビを倒せるようになっており、レベルもなかなか上がらなくなってきた。一レベルを上げるのに、よりたくさん経験値が必要になってきたのだ。

「全員がレベル五〇超えてすげーよな。吉川も、いまならスパア一本でどんなダンジョンにでも入っていけるんじゃないの」

有里沙に命じられ、美琴と良太郎の二人は、近所のショッピングセンターまで食料 主におやつの種類だ の買い出しに来ていた。カートに無造作に菓子を入れながら、良太郎がそんなことをいいだす。

ダンジョン、といわれても、以前の美琴にはなんのことだかわからなかっただろうが、有里沙に借りたゲームで研究したため、どういうものか想像がついた。いまのこの世界においては、公園、森、潰れた店や廃ビルといったものが、モンスターの住処になっている。要するに、モンスターがたくさん出てきて、足を踏み入れたら危険な場所 美琴は、ダンジョンというものをそう認識していた。

「まだちつとも、自信ないですよ……レベルが上がっている実感もないし。正直、ひとりでいるときにモンスターに遭遇しても、立ち向かっていけるかどうか……」

自分でも情けないと思いつつ、美琴はそんなことしかいえなかった。謙遜でもなんでもない。とはいえ、これといって落ち込んでいくというわけでもなく、あ、これもいいですか、とちゃっかりチョコレートを入れている。

「まあ、経験値っていう数値が加算されても、実際に経験を積んで

るかっつたら、毎日シルバーキャトビを相手にしてるだけだしな。いいとこヒキコモリか。とっさの判断なんかは、実戦じゃねーとね」「そうですね。簡単に強くなってるのはありがたいですが、近道をしたらただけの、しつぺ返しがあるのは当然ですよね……」

「いや、そこまで重たい話じゃねーだろ」

良太郎は笑いながら、自分の肩より下にある美琴の頭に手を乗せた。くすぐったくて、美琴も笑う。

出会った当初は、良太郎に対してとにかく怖いと感じてしまっていた美琴だったが、いっしょに過ごしているうちに、徐々に慣れていった。有里沙同様、面倒見の良い面があり、美琴のことを妹のように気にかけてくれるようだ。ただ、口調も態度もぶつきらばうで、取り繕うということを一切しないため、誤解されやすいのだから。

なかなかうち解けない二人を見かねて、有里沙が頻繁に買い出しに追いやっていることも、もちろんプラスの要因として働いた。最初のころの買い出しは、行って帰るまでの間に一度口を開けばいいほうだったが、いまとなってはその初々しさが懐かしい。

「有里沙先輩は、昔からあんなに食べるんですか？　すごく細いのに」

カートが山盛りになったところで、レジに運んでいく。スナック、チョコレート、クッキーにビスケット……あらゆる菓子が突っ込まれていた。ほとんど毎日買い出しに出ているのに、あつという間に有里沙の小さな腹に消えていくのだ。朝、昼、晩の食事はむしろ小食なのに、菓子類は別腹らしい。最近では、田中も菓子の魅力に目覚めたらしく、張り合うように食べている。

「昔からだな。俺と姉貴につつって、たまに来る客なんかからもったケーキとかチョコとかは、だいたい姉貴が全部食ってたし……ちっせーころから、よくこうやってパシられた。目えつぶって板チョコ食って、どこのメーカーのかわかるのが自慢らしい」

「それは……すごいですね……」

しかし、有里沙ならやりかねない。彼女なら、なにをやっても驚かないような気がする。

菓子類だけなのに、会計は三千円を超えていた。有里沙から預かってきた金を支払い、二人でせつせと袋に詰める。この大量の菓子が、いつたいいつまで保つのだろう。

「あ、そうだ　ちよつと、二階に寄りたいたんですけど、いいですか？」

菓子は大きなビニル袋五つ分になり、そのうち軽いもの二つを美琴が持つ。帰ろうというところで、美琴は急に思い出して、提案した。

美琴から寄り道案が出るのは初めてだったので、良太郎の返事が遅れる。二階になにかがあるのかを思い出そうと頭を巡らせたが、答えは出なかった。規模の大きなショッピングセンターなので、二階には本屋も服屋も雑貨屋もある。

「別にいいけど。なに？」

「昨日使ってしまったので、煙玉を買っておきたいんですけど……ここ、売ってますかね」

良太郎は絶句した。

乗せられたにしるなんにしる、魔王を倒して世界を救うとか何とかいっている『勇者』が　仮にも、現在レベル五一にもなる彼女が　モンスターから逃走するための煙玉を買いたいなどと。しかも、昨日使ったなどと。

「おまえバカだろ」

ずばりと直球を投げた。うまくキャッチできず、うつ、と美琴はよろめく。

「なんでいまさら煙玉だよ。おかしーだろ。昨日使った？　逃げてねーで倒せよ。つーかレベル上がってんだから、んなもん使わなくても逃げ切れるだろーがよ」

まったく、歯に衣着せぬものいいだ。そこまでいわなくても、と思いつつも、反論できず、美琴はどういったものかと思案する。と

はいえ、黙っていても、なおも攻撃されてしまうので、急いで口にした。

「お守り、お守りです！ あると、安心する、というか」
剣呑な目つきで睨まれ、尻すぼみになる。良太郎は、呆れかえってため息をついた。

「……まあいいけどよ。けど、この二階にはないんじゃないの。そういうのはマジックショップだろ」

「え、そうなんですか？」

それは意外だった。確かに、いままではマジックショップで買っていたが、これだけ大きなショッピングセンターで、手に入らないなどということがあるだろうか。二階で探してみようかとも考えたが、手っ取り早く、レジ打ちをしている年配の女性に尋ねてみた。当然のように、ありませんとの答え。

「……ひよつとして、マジックグッズとか、武器とか防具とかそういうものは一切、こういう場所では手に入りませんか？」

急に真剣に訊いてくる美琴を訝しげに見ながらも、良太郎はあっさりとうなずいた。

「あたりまえだろ。……や、そうか、吉川にはあたりまえってのはないのか。マジックグッズはマジックショップ、武器・防具は武器・防具屋。これが常識だ」

美琴は、気持ちが悪うとするのを懸命に抑え、できるだけ落ち着いて、その事実の意味を考えた。

ショッピングセンターやコンビニエンスストアのような、美琴の知る世界ならなんでもそろっているのがあたりまえの店でも、いまのこの世界ではそういうわけではない

「『ティピカルサーガ』のものは、こっちの世界の店には、置いてないんだ……」

それは、なにを意味するのだろうか。こうなってくると、世界が融合しているという現象の意味自体、揺らいでくる。

やっぱり、と思った。

頭のなかに散らばっていたパズルのピースが、だんだんひとつの形になるうとしていた。

「どっちにしろ、煙玉なんて必要ねーだろ。行くぞ」

行くぞ、といいながら、良太郎はもう歩き出している。その後ろ姿を追いながらも、美琴は考え続けた。そして、それが本当にしろ、そうでないにしろ、とにかく口に出さなければいけないような気がした。

「あの、良太郎先輩」

声が、自動ドアの開く音に重なる。出口の向こう側には、カラフルな石の敷き詰められた歩行者通路と、その両脇にぎっしり車の停まった駐車場。幅五メートルほどの通路に、子ども連れやカップルが行き来している。

歩き続ける良太郎の背中、その向こう側に、夏だというのに黒い帽子を深く被った男が、立っていた。流れる人波に逆らって、ただ突っ立ってこちらを見ている。

どう見ても、その男だけ、まわりの景色にとけ込んでいなかった。黒いマントで全身を覆っており、長い黒髪が肩まで垂れている。

「先輩、止まって！」

思わず叫んだ。両手に荷物を抱えた良太郎が、振り返ろうとする。荷物を放り出し、考えるより早く、美琴は飛び出した。思えば、これがレベル五一の為せるわざなのかもしれない。荷物になるという理由でスパは持っていないので、代わりに肩掛け鞆からすばやくダガーを引き抜いた。頭の片隅で、防御レベルの上げである服を着ていて良かったと、いつでも着ているといていた有里沙に感謝する。

「させない」

先手を打とうとした。しかし、実際には、帽子の男が両手をかかげ、そこから闇が飛び出すほうが早かった。

「吉川！」

遅れて、良太郎が叫ぶ。彼が事態に気づいたときには、闇の姿を

したなにかが、美琴に襲いかかっていた。良太郎の目に、悲鳴を上げる美琴が焼き付く。彼の目の前で、操り人形の糸が切れたみたい、ぐらりと揺らぐ。

せめて、抱き留めようとした。しかし、彼女の身体が倒れるよりも早く、美琴は闇に飲まれて姿を消した。同時に、帽子の男も、まるで最初からそこにいなかったかのように、忽然といなくなっていた。

ビニル袋から菓子ごぼれて、地面に転がっていた。ざわつきながら、人々が遠巻きにこちらを見ている。だいじょうぶ、とかけられた声もあつたが、良太郎は答えるどころではなかった。

「マジかよ……」

呆けたようにつぶやいて、自責は遅れてやってきた。良太郎は、思い切り地面を殴りつけた。

数日前から、モンスター襲撃のニュースはどんどん増えていた。有里沙はそのことに気づいていたが、美琴にはいわなかった。それどころか、極力その話題を避けた。おそらく美琴も気づいているだろうが、話題にすることで、彼女を傷つけるようなまねはしたくなかった。

わたしのせいだと自分を責め、本当は明るいはずの瞳が歪むところは、もう見たくはない。

「……実際のところ、あんたの目的はなに？」

桜井家リビングの、白い大きなソファに腰かけ、大型液晶テレビに映し出されるニュースを眺めながら、有里沙は後ろにいるはずの田中に話しかけた。窓辺にもたれ、やはりニュースを見ていた田中は、独り言のような問いに、一瞬聞き間違えたのかと本気で思う。

美琴と良太郎が買い出しに出ている間、必然的に有里沙と田中の二人が残されるわけだが、一度だって有里沙から田中に話しかけたことはなかった。いないものとするように、平然と存在を無視していた。

「どついつ風の吹き回し？ アリサくん、僕のこと嫌いなんですよ」「嫌いだつたら、話しかけちゃいけないの？」

嫌い、は否定せず、淡々と問う。右膝を抱えるようにして、実に姿勢悪くテレビを向いている金髪の後ろ姿が、田中に向き直る気配はない。

「いいけど」

田中は肩をすくめた。

嫌われることには、慣れていく。

「目的、ね。もちろん、ミコトくんを魔王を倒してもらおうことだよ。というか、まあ、ゲームクリアの隙について、世界を二つに戻すことが目的かな」

「それ、あなたにとって、どついつ意味があるの？ その目的を達成したら、なんかイイコトでも？」

ふむ、と田中は腕を組んだ。頭から信用していない相手に説明するのは難しい。美琴はなんでもすんなり受け入れてくれたから、楽だつたが。

「アリサくんには想像しづらい話だろうけど、それ自体が僕の仕事なんだ。達成して得られるものは……わかりやすくいうとお給料かな。逆に達成できないと減給かも。　　いっとくけど、そこから疑問持たれても、説明できないよ。これはもう、こつこつものとして割り切ってもらうしかないね。君だって、どついつ地球が丸いの、なんて別に考えないでしょ」

有里沙は沈黙した。有里沙にとってみれば、なによりもまず、田中の飄々とした態度が気に入らない。話しているだけでイライラするのだ。そこにいるのに、いないような感覚を味わわれる。

いつていることは、わからないでもないのだ。事実が事実としてあるのだから、言及するのではなく、前提として、その後どうするのかを考えなくてはいけない。

わかるのだが。

「ムカツク、イラツク、ウザイ」

棒読みで毒づく。これが意外と田中にクリティカルヒットした。

「……アリサくんなんてキライだ……」

「超光栄」

不毛なやりとりだ。

そのとき、不意に、扉が開かれた。有里沙は反射的にテレビの電源を切る。美琴かもしれないと思ったのだ。

しかし入ってきたのは、恰幅の良い中年男性だった。小豆色のスーツに、青いネクタイ、鼈甲フレームの四角い眼鏡をかけている。

「パパ！」

ハートマークのつきそうな声で叫び、有里沙が立ち上がった。

この人の良さそうな男性こそ、有里沙と良太郎の父、桜井太郎丸だ。どちらとも顔は似ていない。

毎日のように桜井邸に来ているとはいえ、田中も見るのは初めてだ。これが、娘のために大量のシルバーキャトビを調達した親バカかと、好奇の目で観察する。

太郎丸は、先のくると丸まったチヨビ髭をいじりながら、田中には目もくれず、有里沙に向かって眩しいばかりの笑みを浮かべた。「おお、我が娘。十七歳の誕生日プレゼントは気に入ってもらえたかな？」

よく通るハスキーボイス。有里沙は、もちろんよ、と満面の笑みで返す。

「ありがとう、パパ。おかげで、良太郎と一緒に、たくさんレベルを上げたわ。パパ大好きよ！」

歩み寄り、ほっぺにちゅうまで見舞う。田中は思わず目を逸らした。これはダレだ。

「今日はお仕事お休みなのね？」

「いや、移動の途中だよ。最近、有里沙のお友達がよく遊びに来ると聞いて、ちょっと様子を見にね。まさか……そっちの、白髪の彼が？」

「やあだ、パパったら！ そっちの白いのは、使用人見習いみたい

よ

あつさりとウソで返す。いいえお友達です、といえる関係でもなかったので、田中は黙っている。

「ともだちのほうは、いまちよつと良太郎と出かけてて、いないの。パパに会わせなかったわ。残念」

太郎丸は、眼鏡の奥の瞳を大きくした。

「出かけて？ 最近特にぶっそうだから、あんまり出歩くもんじゃない。まあ、良太郎が一緒ならいいだろうが……さっきも、南下口あたりで、騒ぎがあつたみたいだし」

「……そうなの？」

有里沙の声色が、一瞬固いものになる。南下口というのは、まさに美琴たちが出かけたショッピングセンター付近の地名だ。

嫌な予感がよぎつたが、父親にあれこれ知られるのは、有里沙にとつてみればあまり良い状況ではなかった。有里沙は娘に甘い父親のことを真に愛していたが、かといって、多くの年頃の娘がそうであるように、なんでもかんでもさらけ出すほどの仲良し親子というわけでもないのだ。娘に甘いからこそ、がんじがらめにしてくる可能性がある。息子がケンカ大将になっていることは容認しているが、娘が魔王を倒す一行に加わるなど、それこそ言語道断だろう。

有里沙は、さりげなく話題をずらした。

「最近は、モンスターに襲われたつてニュースばかりでイヤになつちゃう。パパの会社でも、やつぱり被害に遭つてるひと、たくさんいるんですよ。パパ大変ね」

なにせ、いくつもの会社の社長を兼任しているのだ。縁起でもない話ではあるが、社長というのは、社員の葬式となれば香典を出したり花を出したり それはもつと下っ端がやるにしろ 場合によつては式に出席したりと、忙しいはずだ。

しかし太郎丸は、腹をゆすつて笑った。

「なあに、パパは日頃の行いがいいからね、うちの社でモンスターにやられたつてやつはひとりもないさ。もちろん、最近じゃ就業

時間を短くするとか、対策グッズを配布するとか、徹底しているのもあるが」

「……ひとりも？」

有里沙はつぶやいた。

ひとりも、などというところが本当にあるだろうか。毎日、これだけ、ニュースでやっているのに。

「ちゃんと気をつければ、被害に遭わないってことだ。有里沙も気をつけてな。パパはもう行くよ」

にこにこ笑ったまま、太郎丸はさつさと部屋から出て行った。本当に、移動の途中に寄っただけだったのだろう。有里沙は突っ立ったまま、眉間に皺を寄せ、思いを巡らす。

ポケットから携帯電話を取り出し、ものすごい速さでメールを打ち始めた。さすが女子高生というべきか、ほどなくしてメール着信音が立て続けに数回。

黙ってそれを読んで、有里沙はやっと、田中を見た。

「……美琴ちゃんは、どっちなの」

真剣な声だ。おもしろそうに、田中が片眉を上げる。

しかし、彼がそれに答えるよりも早く、もう一度扉が開かれた。今度は、勢い良く。

現れた良太郎の、その剣幕を見て、有里沙は事態を察した。

*

目を開けると、見慣れた天井があった。

美琴は、自分の部屋のベッドで、仰向けに寝転がっていた。

まず、時計が鳴っていないことを不思議に思う。まさか目覚まし時計のお世話にならずに、目覚める日が来るなんて。

それからやっと、自分がパジャマではないことに意識が向く。あれ、と思い、起きあがる。

いつものまにベッドに寝転がったのだろう

思い出そうとして、

やっと、気づいた。

「……生きてる」

両手を持ち上げて、そつと握りしめた。ないはずもないのに、恐る恐る両足を見る。もちろん、ちゃんとしている。

死んでしまったかと思つた。闇が襲いかかつてきて、全身に激痛が走つたところで意識が途絶えたのだと、冷静に思い返す。

「たいしたものだ」

不意に、声がした。感情のこもらない低い声。

美琴が目を向けると、扉に寄りかかるようにして、漆黒の髪が立っていた。いまはマントはしておらず、黒い上下に身を包んでいる。

その頭に、二つの鋭い角を見て、鮮明に記憶が蘇る。この男には、以前、会つたことがある。

「あなた、いつか……わたしを助けてくれた、ひと」

「助けた？」

問うわけでも、嘲るわけでもなく、淡々とくり返し、男はふつと目を細めた。それすら、感情がこもらない。美琴には、ひどく疲れしているようにも感じられた。

「助けた、つもりはない。また消えてしまう前に、訊いておこうと思つたのだ。今回は、少し、考えることを知っていそうだったからな」

「……」

その意味を、美琴はゆつくりとかみしめた。

やはり、そうなのだ。

「仲間のひとりを殺すつもりだったのだが……たいしたものだ。ここまで短期間で、能力を上げるとは。防いだだけでなく、身代わりになつてなお、ダメージを受けている様子もない」

「良太郎先輩を、……殺そうと？」

「名など知らない」

男は、初めてうつすらと笑んだ。美琴には、なにが面白いのかま

「まったくわからない。」

「私にとっては、同じだ。すべて、意味などないのだ。このような虚構の世界で、ただ、何度も、繰り返す……しかしいくら重ねても得るものなどなにもない。早く終わらせたいと、それだけを願うものの、それすら虚しい」

男は、どこか遠くを見ているような目をしていた。語る声に抑揚はなく、一切の感情がこもっていないようであったが、最後の「虚しい」という言葉だけは、妙に彼に合っていると、美琴は思った。

見た目よりも饒舌ではあったが、美琴になにかを伝えようとしているわけでもないようだった。しかし、どんな小さな情報も取り逃がすまいと、懸命に耳を傾ける。

根拠はなかったが、いまならわかった。確信を持って、美琴は問いを口にした。

「あなたは、魔王……さん、ですね」

男は、肯定も否定もしなかった。

「呼び名が必要ならば、そう呼んでも構わない。だが、私を魔王と呼んで、それで貴様はどうする？ 傀儡のように、私を殺すのか。なんのために？ 自分の意志？ だとしたら、これほど滑稽なことはない」

「あなたが魔王なら、わたしは、あなたを倒します」

美琴はためらわなかった。目の前で友人が死んだあの日から、ずっと考えてきたことだ。なにかもを知ってしまったとしても、その思いは揺るがない。

男 魔王は、薄く唇の両端を上げた。笑みの形なのに、笑っているようには見えない。

美琴は立ち上がり、しっかりと足を踏み出す。魔王の前で立ち止まり、真つ直ぐ彼を見上げた。

武器はない。あつたとしても、いまここで、たったひとりで仕掛けて、勝てるとも思わない。

しかし不思議と、目の前のこの男が、いま自分に危害を加えるこ

とはしないと、思った。そのつもりならば、わざわざ自宅に運んで目覚めるのを待つようなまねはしないだろう。

「質問に、答えます」

瞬かす、漆黒の目を見た。魔王は黙って、美琴を見下ろしている。美琴の頭のなかで、彼女にとつての本当の始まりであったあの日の、あの問いが繰り返し響いていた。

貴様は、この世界を、守るのか　あときは、その問いの意味すら、わからなかったけれど。

「わたしは、この世界を、守ります。わたしの、意志で」

魔王の顔に、今度こそ笑みが浮かんだ。無邪気、という表現が合うような場面ではなかったが、それでも美琴は、その笑みを無邪気だと思った。

「ならば、私もそれに応えよう」

声すら、幾分弾んでいるように聞こえた。すつと両手を伸ばし、美琴の頬に触れる。

少しだけ持ち上げて、額に唇を落とした。さらりと、両脇から黒髪が流れ、美琴の肩をくすぐる。そのまま、さらに頬を寄せ、耳元で囁いた。

「ゲートタワーで、待つ」

驚きの感情が追いつくよりも早く、魔王はふつと姿を消した。まるで、さっきまで目の前にあったのは、ただの煙であったかのように。

同時に、扉が開き、有里沙と良太郎が飛び込んできた。どうやらずっと、扉を開けようと奮闘していたらしい。二人とも、突然扉が開いたことで、前のめりに倒れそうになる。

「み、美琴ちゃん　！　無事っ？　なにがあったの？」

有里沙がすぐに抱きついてくる。直前の思わぬ出来事に呆けていた美琴は、無事と聞いたがうまく言葉にならない。この部屋での音は、一切届いていなかったらしい。

「よかった……ケガもないみたいね……ほんとによかった……」

有里沙の声は震えていた。美琴は、もうしわけないと思いつつも嬉しくて、思わず笑みをこぼす。ごめんなさいとありがとを伝えると、やっと安心したように、有里沙は手を離した。

良太郎にも同じことを告げようと視線を移すと、彼はものすごい剣幕で美琴を睨んでいた。いまにも雷を落とそうとしているところのようだ。美琴は思わず身を縮め、落雷に備える。

「てめえ、よくも、オレを庇うようなこと　！」

「ご、ごめんなさい！」

反射的に謝り、振り下ろされる拳を覚悟する。

しかし、良太郎は、吸い込んだ息を、ゆつくりと時間をかけて吐き出した。ずるずると、そのまま座り込む。

「……………違う、謝んな。悪かった。……………ありがとな」

「このバカ、いまにも泣きそうだったのよ。いつそ泣いちゃえばかわいかったのに。やーね、オトコノコって」

有里沙が軽口を叩くが、それに反論する気力もないようだ。ぷいとそっぽを向き、黙ってしまう。

「あ、無事だった？　ね、ここにいたでしょ」

飄々とそんなことをいいながら、田中が廊下から顔を出した。その表情からは、美琴が無事で良かったとか、そういう感情は少しも読みとれない。

美琴は、黙って、田中を見た。きつと、「吉川美琴」が無事でも、そうでなくても、彼にとつてはたいした問題ではないのだろう。そう思った。しかし、その考えは、美琴にたいした感慨を与えなかった。

恐らくそれは事実だ。しかし、だからといって、美琴が傷つく筋合いはない。

「田中さん、大事な話があります」

思ったよりも、固い声になった。有里沙と良太郎が、こちらを見るのがわかる。

「席をはずしたほうがいい？」

「……ごめんなさい」

「いいのよ。あたしも良太郎に話があるから」

そういつて、有里沙は良太郎の首根っこを掴み、そのまま連行していく。さすがレベル五二、大の男ひとりを引きずるぐらい、仔猫を相手にしているようなものだ。

田中を部屋に押し込み、有里沙は扉を閉めた。田中は、美琴を見下ろして、冗談めかして笑ってみせる。

「愛の告白？」

「まあ、そんなようなものも含めて」

「……いうねえ、ミコトくん」

予想していなかった返しに、思わずひるむ。その様子に、美琴は素直に笑んだ。

「訊きたいこと、いいたいこと、たくさんあるんですが……まず、ひとつ、いいですか？」

自分でも、不思議なぐらい、穏やかな気持ちだった。田中が黙っているの、美琴は続けた。この男は、見た目もやることも胡散臭いが、いままで一度だって嘘はいつていないはずだ。ならば、正直に答えてくれるだろうと、思った。

「わたしで、何人目ですか？」

田中は、ふつと眉を下げた。

予想していたのだろう。その表情に、驚きの色はない。ただ、自嘲するような、なにかに後悔するような……ほんの少しだけ、寂しそうな目。

「六人目、ぐらいだったかな」

姉から告げられたことが信じられず、嘘だろ、といおうとした。しかしいわれてみれば、良太郎にも、思い当たるふしはあった。

「あなたの知り合い……知り合いの知り合いでもいいけど、だれかひとりでも、モンスターにやられて死んだ？ だれかひとりでも、マジックショップやカジノで働いてる？ つまり、そういうこ

とよ」

良太郎は、思いを巡らせた。

モンスターがいることも、マジックショップや武器・防具屋、カジノといった店があることも、良太郎にとってはあたりまえのことだ。

しかし、自分を含め、自分の友人たちは、だれひとりとしてそれらに深く関わってはいなかった。あたりまえであるのなら、友人に米屋の息子がいるように、マジックショップの息子がいてもいいはずだ。だれその家族がモンスターにやられたとか、そういう訃報が聞こえてきてもいいはずだ。ひとだけではない。美琴がいつていた、シヨップセンターにマジックグッズが売っていないという、その意味。

「……つまり、いまある店、アイテム、モンスター……モンスターにやられた被害者や、店で働くひと。まるごと、ゲームの世界のものってこと、か？」

「そう。たぶん、もとの世界にとって、被害はゼロよ」
「なんだよそれ」

ふつふつと、苛立ちがこみ上げた。では、いま自分たちがやっていることはなんなのだろう。魔王を倒す、それ自体、いつたいなんのために。

ふと、疑問がわいた。

「オレらや……吉川は？」

「あら、意外。自分の存在が不安？ あたしたちはこっち側よ。向こう側にしては、根付きすぎてる。親戚も、知り合いもたくさんいるし、アルバムに写真もある。……まあ、そんなもの、判断材料にならないかもしれないけど、あたしがTSやってること覚えてたんだから、間違いないと思うわ」

姉のそのいいかたに、良太郎ははっとした。

思わず天井を見上げる。美琴は、田中と二階で話しているはずだ。

有里沙は、瞳を伏せた。

「……そもそも、美琴ちゃんがやる気になった発端の、中学で亡くなった生徒 中原理恵っていう子らしいけど、住所もなにもデータラメよ。昔からの友だちだって名乗り出る子もないし、いるはずの兄もいない」

「なんだよそれ。じゃあ、吉川は……」

「そうね。たぶん、美琴ちゃんも、気づいてる」

ひどい頭痛を覚え、良太郎は頭を垂れた。

では、魔王を倒したとして、どうなるのだろう

否応なくその問いに行き着いて、くそう、とつぶやいた。

6 「死なないてください」

その日、桜井姉弟は吉川家に泊まっていった。例によって田中手製のパスタ　鶏とネギの和風ペペロンチーノ　を食し、例によって美琴と有里沙がふたりで風呂に入る。田中に、僕らも一緒に入るうか、といわれたので、良太郎はとりあえず白髪ホストを殴っておいた。力任せに元凶を殴り飛ばしたことで、不本意ながら、良太郎は幾分すつきりしてしまった。

「美琴ちゃんさ、好きな子とかいないの？」

同じベッドに潜り込み、有里沙は唐突に聞いた。突然のことに、美琴はわけもなく咳き込む。どうしてこんな展開に。

「す、好きな子、ですか？　いませんけど……有里沙先輩は、いるんですか？」

「あたし？　あたしは三次元には興味ないからなあ」

さらりと問題発言をかます。ゲーマーというより、良太郎のいうとおりオタクなのだ、最近では美琴も認識を改めていた。見事な金髪も、ファッションではなく、定期的に行われるというあるイベントで、コスプレをするためのものらしい。美琴にはちよつとついていけない感覚だ。

「良太郎とかどう？　ホストは絶対やめときなよ」

「良太郎先輩は、恐れ多くて、とても。でも、素敵なひとですよね。田中さんは……そもそも何歳なんですかね」

「そう！　年齢不詳よね、あのホスト。だいぶオジサンよ、きつとそのいいかたがおかしくて、美琴はくすくすと笑う。

「ね、じゃあさ、ものすごいオシャレして、ナンパされに行こうか。ちやほやされるのって、気持ちいいよ」

「ええ？」

ナンパされに行く、という感覚がわからなくて、素直に驚く。知らない男のひとに声をかけられるなどと、想像しただけでぞら恐る

しい。

「わたしは、そういうのはちょっと……。有里沙先輩、ちやほやされたことあるんですか？」

「あるわよ。つきあいで合コンとか行くとね。まーだいたいこの髪の色で引かれるけど」

「確かに、驚きますよね、それ」

「あ、美琴ちゃんもそんなふうに思ってたの？ 傷つく！」

他愛のない話をして、笑い合う。

美琴は、目を閉じた。心から、楽しいと思えた。

「……有里沙先輩」

少し真面目な声を出す。有里沙は冗談めかして笑った。

「なあに、愛の告白？」

田中と同じことをいわれてしまう。美琴は、そんなに告白しそうに見えるのだろうかと考えて、単純に田中と有里沙が似ているのだと思い直した。そんなことをいったらものすごく怒られそうなので、決して口には出さないが。有里沙が田中を嫌うのは、一種の同族嫌悪のようなものもあるのだろう。

「ありがとうございます」

素直に、礼を述べた。有里沙は、なにが、とはいわなかった。くしゃくしゃと、美琴の頭を撫でる。こういうところは、姉弟でそっくりだ。

「あたし、なにがあっても、美琴ちゃんの味方よ」

「はい。……よかったです、有里沙先輩に会えて。いくら感謝しても、足りないくらい」

「終わりみたいないかたしないです」

ぴしりといって、真剣な目をする。美琴も言葉に詰まり、そのまま、沈黙がおちる。

有里沙はくるりと美琴に背を向けた。怒ったのだろうか。もしかして、そのまま寝てしまったのかと、後ろ姿を見つめる。どうしても、礼を告げたかっただけなのに。

「……がんばろうね」

不意打ちでかけられた声は、いつもの有里沙の様子からは想像できないぐらいに、ひどく優しい声だった。

「はい」

美琴は微笑んで、そつと目を閉じた。

もう、余計なことは考えず、ぐっすり寝られると思った。自分でも信じられないぐらい、いままででいちばん、穏やかな気持ちだった。

*

シルバーのセダンが、高速道路を走っていた。

朝一で、田中が借りてきたレンタカーだ。良太郎が助手席、美琴と有里沙は後部座席に座り、途中のコンビニエンスストアで購入したスナック菓子を回し食べる。こんな日はさぞ写真が美しく撮れるだろうという、見事な快晴で、もちろんそれだけに非常に暑い日だ。全国的に猛暑日になると、天気予報でも伝えていた。

「いいんでしょうか、なんか、まるつきり遠足みたいですけど」

控えめに美琴がいうが、他のだれも、同じような感想を持ってはいないようだった。良太郎が身体ごと振り返り、有里沙の手から菓子を奪いつつ、こともなげにいう。

「行き先がゲートタワーなんだろう？ だったらどう考えても車がいちばん早いんだから、いいんじゃないかねーの」

「そうよ、ゲームと融合してるっていつても、これは現実なんだから。使えるものは使うべきだね。車に乗って、お菓子食べながらラストダンジョンに行くなんて、ちょっとカッコイイじゃない。まあ、もしかしたらラストじゃないかもだけど」

新たにチヨコレートの封を切りながら、有里沙も同意した。田中は運転に集中しているらしく、なにもいってこないが、美琴と同じように思っている可能性は極めて低い。

「そういうものですか……」

それでもやはり、奇妙な気がした。有里沙に借りたゲームを無事クリアした美琴だったが、ゲームのなかでは、ラストダンジョンといえば、ダンジョンに入るまでにあれが必要、これが必要といわれ奔走り、ストーリー的にもこれでもかと盛り上がって、さあ行くぞ！ と突撃していたのに。それが、菓子を食べ、流行りの曲を聴きながら、車で向かうなどと。

そもそも、魔王が待っているといったからラストダンジョンと定義しているだけであって、美琴たちにとっては初のダンジョン突入となるのだ。これが本当にゲームとしてあつたら、美琴でも怒りそうなる展開だ。

「世界の融合って、難しい……」

真剣にそう思った。どちらから見ても違和感のないように溶け合う、というわけにはいかないようだ。とはいえ、有里沙も良太郎も、違和感など感じていないようだったが。

魔王が待つと告げたゲートタワーは、矢那呉市のお隣の、伊南市の入り口にあるランドマークタワーだ。伊南パークという、季節の花を取りそろえたテーマパークの中央にそびえており、「伊南」にちなんで一七〇メートルの高さを誇る。高速道路から行くと、伊南のサービスエリアからそのまま入れるようになっていたため、車で訪れる客が多い。逆に、公共交通機関で行くには面倒な立地だ。最寄り駅からさらにバスで四十分もかかる。

「なにあれ、車ぜんぜん停まってるじゃない」

有里沙が、高速道路の向こう側に広がる駐車場を見て、意外そうにいった。美琴も左側に寄り、窓から外を見る。いつの間にか、もう伊南市に入ったところらしい。

「春ならともかく、時期じゃねーんじゃねえの」

「だって、いま夏休みよ？ こんなんじやすぐ潰れるわね」

田中が左ウィンカーを出し、減速してサービスエリアに入る。そのままそこを通過し、スロープを下りてゲートを通り、伊南パーク

の駐車場に滑り込んだ。

「すつかすかだね」

田中がいうとおり、広大な駐車場には、車はまったく停まっていなかった。混んでいる日なら、遠くに停めて数分歩かないとパークに入れないのだろうが、シルバーのレンタカーは駐車場のラインを飛び越え、縦横無尽に入り口まで進んでいく。

「これは……お休みってことでしょうか」

あまりの閑散っぷりに、美琴もつぶやく。そもそも、魔王が待つといていたのだから、ごくあたりまえに営業しているほうがおかしいのかもしれない。

しかし、入り口まで来て、警官らしき人影と、一台のパトカーが停まっているのが見えた。車を降り、そちらまで歩いていく。案の定、門はきつちりと閉められ、「立入禁止」という黄色のテープまで貼られていた。

「あんたら、ニユース見てないの？ 伊南パークには入れないよ」
即席テントの下で、二人の警官がペットボトルの茶を飲んでいた。テントには、四方に紫色のタリスマンがぶら下がっている。

「……なにかやってたっけ？ 見た？」

有里沙の問いに、全員が首を左右に振った。極力テレビをつけないようにしていたのだ。伊南パークが休園中などと、見た覚えがない。

「なにかあつたんですか？」

「だいたいわかるでしょ。完全にモンスターに住み着かれちゃって、危ないっつらなないよ。けっこう強いのもいるみたいだから、おもしろ半分で入ろうとかしないでね。さ、帰んなさい」

立ち上がるわけでもなく、テントの下でひらひらと追い払うように手を振る。美琴でも、そのやる気のない様子がしゃくに障った。その態度はなんだ。

「どーする？」

良太郎が、とりあえず美琴に聞いてくる。美琴は、説明したらわ

かってもらえるだろうかと、ほんの一瞬考えたが、すぐに打ち消した。モンスターを倒したいから通してください、などとばかり正直にいったところで、受け入れてくれるとも思えない。

「……どうしよう」

ラストダンジョンに入る前の難関が、よりによって警察の足止めだとは思わなかった。こんなチープな展開でいいのだろうか。

「白の女神」

小さな声で、有里沙がつぶやいた。そういえば、真っ先につっかかりそうな彼女が静かに後ろにいたことに、今更ながらに違和感を覚え、美琴と良太郎が振り返る。

「お、魔法使っんだね。さすが」

飄々と田中がいい、美琴はぎよっとした。

「魔法？ いま？」

確かに、有里沙はウィッチになるといい、魔法書を買ってはいたが。目の前で、実際に魔法を使ってもらえるというのなら、それはもちろん興味があるが。

しかし、いま、この場面で、いったいなんの魔法を使うというのか。

「あ、有里沙先輩」

嫌な予感しかしなかった。早まらないで、といおうとしたが、有里沙はぶつぶつと続けた。

「青の道化師、黄の咎人……」

有里沙は、布に覆われたままのロッドを、警官に向けた。

「ソメイユっ！」

高らかにいい放つ。傍目には、なにが起きたのかわからない。しかし、すぐに異変は起きた。テントの下で、警官二人が急にぐたりと椅子によりかかり、いびきをかいて寝始めたのだ。

「お、成功した！ すごーい！ 気持ちいい！ あたし天才！」

「……サツ眠らせるとか、アリなのか？」

「ありなんですか？ どうなんでしょう？」

淡々と良太郎が疑問を投げ、美琴はおろおろと警官に駆け寄る。

本当に寝ているだけのようだが、発覚すれば問題になりそうだ。

「アリでしょう。殴ったとかじゃないんだから、いくらでもシラを切れるし。だれもなにもいわなかったらいいのかなーと思って入っちゃいましたーゴメンナサーイ、はい、これで決まり」

さらりと田中にいわれてしまえば、それもそうかという気がしてきてしまう。有里沙も、大きく頷いていた。

「それより、褒めるとかないの？ 魔法って、もっと難しいと思ってたけど、意外とかんたんね。スペルを覚えるのがちよつと大変だけど。これならいけるわ」

有里沙にしてみれば、せつかく披露した魔法についてだれもなにもいってくれないことのほうが、大問題のようだ。

「あ、もちろん、すごいと思いました。驚きました……そういうえば、先輩、いつも魔法書見てましたもんね。勉強してたんですね……」

あれ？ いまのこの世界でも、魔法を使うことは、特別なことなんですか？

「え？ うーん、そうね、ふつうは、やろうとは思わないかな」

有里沙の答えはなんと歯切れの悪いものだったが、良太郎も同意した。

「存在は知ってても、ふつうは、魔法使おうなんて思わないな。高いからか？」

説明しようにも、うまくいかないらしい。美琴は、田中に視線を移す。

「もちろん、高いからってのもあるけど」

田中は肩をすくめた。

「たとえば、銃って武器の存在を知ってても、日本じゃ一般的には手に入れようと思わないでしょ。その感覚に近いかな。それに、魔法っていうのは、ある程度レベルが上がってないと、いちばん初級のものでも扱えないんだ。失敗したら自分に跳ね返るから、リスクも高い」

その説明で、美琴はやつと納得した。ということとは、やはり、それを使いこなした有里沙はすごいということになる。

「かつこいいです、有里沙先輩」

「偉大さが伝わって嬉しいわ。もっと讃えてほしいけど……さっさとなかに入りましょ。たぶん、すぐには起きないだろうけど」

「それもそうだな」

良太郎が門に近づき、開けようとする。当然のように、カギが閉まっていた。

乗り越えられないこともないだろうが、長身の田中よりも高くそびえ、行く手を阻んでいる。スライド部分は金属のようだが、コンクリートでできているので、手や足をかけられるような場所もない。

「あ、そうだ」

思いついて、美琴はいそいそと警官らのポケットを探った。乱暴に扱ったつもりもなかったが、よほど深い眠りにについているらしく、バランスを崩して椅子からずり落ちる。ごん、と派手な音がした。それでも起きない。

男性陣が痛そうと顔をしかめたが、別段気に留めることもなくポケットを探り続け、とうとう、拳ほどもあるキーリングを発見した。いくつかカギがぶら下がっており、そのうちのひとつに、「パーク外 出入り口」とタグがついている。

「ありましたよ」

さっそく、門の端の鍵穴に差し込んでみる。かちやりと乾いた音がした。正解だ。

「さあ、行きましょうか！」

振り返った美琴の笑顔は、きらきらと輝いていた。

「……たくましいじゃねーか」

良太郎は呻いた。

布を取り去り、武器を装備して、有里沙に防御力と攻撃力を上げる魔法をかけてもらう。準備万端であることを確認して、重い門を

ガラガラと開けた。

まず飛び込んできた光景に、美琴は息を飲んだ。

「デリペリ……」

さすがに、名前も覚えていた。美琴のクラスに侵入してきた、深紅のモンスター。後ろ脚二本で立ち、細い顎を突き出すようにしている。たてがみのようなトゲが背中を覆っているさまは、やはり恐竜のようだ。その、ぎよろりとした目、細い顎から突き上げる鋭利な牙、なにより鋭く長い爪を、忘れられるわけもなかった。

一匹や二匹ではない。道や花壇を埋め尽くすほどに、うようよしていた。

入り口付近の数匹が、のそりとこちらを向く。やはり、シルバーキヤトビを相手にしていたときとはわけが違う。まったく戦える気がしなかった。美琴は、頼るようにスピアを握りしめたものの、動けない。

「念のため教えてあげるけど、ミコトくんたちがやつつけまくってたシルバーキヤトビの生命値は四〇〇で、レッドデリペリは五六〇だよ。見た目怖いけど、たいして変わんない」

自分は戦うつもりはないのだろう、武器すらもたず、スーツのポケットに両手を突っ込んで、田中がそう告げる。

生命値、と数値で表されるシステムに、美琴は初めて感謝した。

それだけで、ずいぶん身体が軽くなったのだ。

「ザコね」

「ザコだな」

桜井姉弟の行動は早かった。有里沙はすぐに呪文の詠唱を始め、良太郎は拳一つで果敢にもデリペリに殴りかかっていく。どう見ても良太郎より大きなそれに、臆することなく、拳をたたきつけた。ナックルがめり込んで、一瞬にして消える。闇が集束し、赤い石が地面に落ちるよりも早く、次のデリペリに向かって拳を振り上げる。

「……すごい」

今度は別の意味で、動けなくなってしまった。あまりに鮮やか

に倒していくので、見入ってしまったのだ。

「赤の使徒、黒の王、黄の騎士、青の女神　レコンフォー！」
スベルと同時に、有里沙の手にしたロッドから、青白い光がほとばしる。下からライトで照らしたかのように、光が一気に地面を覆い、音もなく立ち上った。大きな光の柱が、デリペリの身長の高さにまで達し、そのまま集束する。

光が消えたときには、視界すべてのデリペリがいたはずの場所に、赤い石があるのみだった。遅れて、一斉に地面に落ちる。

「……あつぶねえ……！」

ぎりぎりで転がり出たらしい良太郎が、肩を上下させた。

「そうか、範囲魔法は危ないのか……。気をつけるわ」

悪びれた様子もなく、有里沙は今後の課題にした。なにかいおうと口を開き、良太郎は諦めて肩を落とす。

まばたきもできず、一部始終を見ることしかできなかった美琴は、二人のすごさを今更ながらに思い知った。あれだけいたデリペリが、いまはもう、一匹も見当たらない。有里沙の使った魔法は、生物以外には作用しないのか、色とりどりの花がなにごともなかったように太陽を向いている。

「いけそうだねえ、これ」

どうやら、田中も上機嫌のようだ。

「さつさとタワーまで行きましょう。ザコにかまって、余分な精神力使いたくないわ」

有里沙がさつさと歩き出す。いわれて初めて、美琴は顔を上げ、ゲートタワーを確認した。花壇がいくつか続く向こう側に上り階段さらにその向こうに、タワーの姿が見える。黒い大きな三角形のような、無機質な外観だ。

「気をつけるよ。姉貴のそばにいたら、冗談じゃなく死ぬぞ」

鬼気迫る顔でそう忠告して、良太郎も続く。本当にそうかもしれないと、美琴は肝に命じた。有里沙だって、魔法を使い慣れているわけではないのだ。

「本当に、あの一撃でやつつけちゃったんだ……」

道を進むうち、素直に感嘆の声が出た。ほんの少し前までの光景が嘘のように、パーク内は静まりかえっている。見晴らしがよいので、どこかにモンスターが隠れていて、いきなり飛び出してくるというような心配もない。魔法つてすごいんだなと、しみじみ思う。これなら、本当に、魔王を倒すのもそう難しくないのかもしれない。しかし、階段にさしかかったところで、そううまくは話が進まないことを、美琴は思い知った。ノースリーブのワンピースを来た美少女が、階段の上で仁王立ちして、こちらを見下ろしている。その頭から突き出る、二本の角。

正体はわからないが、向こう側だということはわかった。

「これは、もしかして」

なぜか、有里沙の表情はいきいきしていた。残り三人は、なにを感じて一歩下がって控える。

「待ってたわ」

見た目どおりの、どこか舌つ足らずな甘い声でいい、少女は跳躍した。高さを感じさせない身軽さで、有里沙の前に着地する。スカートを手で押さえていたことに、男性陣はひそかに舌打ちした。

頭に角さえなければ、街を歩いていてもおかしくない姿だ。それどころか、超のつく美少女といっていいだろう。茶色の巻き毛は肩より下まで伸びており、大きな瞳がくりくりとしていて実にかわいらしい。美琴は女性であるのにも関わらず、黄色のワンピースのぎりぎりの長さが気になって気になって、思わずそこにはかり目が行った。

「それ、下になにか履いてるの？ いきなりぱんつ？」

ずばりと有里沙が問う。美琴はちよつと感謝した。まさにそれが気になったのだ。

少女は、きよとんとして目を数回瞬かせ、それから一気に顔を赤らめた。

「アンタたち、アタシの敵でしょっ？ なぁにその質問！ あった

まきちゃうー！」

怒ってもかわいい。しかし、どうやら質問に答える気はないらしい。

有里沙が振り返り、美琴を見る。

「敵なの？」

聞かれて、美琴も考えた。

「敵か、といわれると……敵なんですかね。通してもらわないと困りますし。でも別に、あの子になにか恨みがあるとか、そういうわけでも」

有里沙は少女に向き直り、

「微妙なところね」

「緊張感ねーな」

良太郎のつぶやきが、さらになけなしの緊張感を削いだ。

「だいたい、アンタたちダレなの？ どうしてぼつと出が、いきなりグラナドルさまに会いに行こうって、恐れ多いこと考えられるかな？ 段取りってあるでしょ？ いきなり招集されて、アタシたち怒ってるんだから」

「グラナドルってだれですか？」

美琴が素直に質問を口にする、少女はさらに顔を紅潮させた。

「それも知らないの？ アンタたちが魔王って呼んでる御方のことよ！ なんなのムカツクー！」

「……どうしよう、なんだか、すごく怒っているみたいですが」

「確かに、段取りは無視しまくってるからねえ。そりやお怒りもごもつともなんじゃないかな」

どこかおもしろそうに、田中がいう。美琴も、ゲームをひとつクリアしてみたので、自分たちが正規のルートを通っていないことはなんとなくわかった。ウラワザで儲けて、引きこもってレベルを上げて、いきなりラストダンジョンだ。敵側にとってみれば、おもしろくない展開だろう。

「くだらないやりとりはいいから、早く名乗りなさいよ、お嬢ちゃ

ん。聞いてあげるから」

疲れたような有里沙のいいかたに、少女はむっと眉を跳ね上げたが、思い直して咳払いをひとつ。それから、両手を腰にあて、ない胸を反り返らせた。

「アタシは、グラナドルさまに仕える四天王のひとり」

しかし、聞くといったのに、有里沙は最後まで聞かなかった。

「四天王！ やっぱり！ TSといえば四天王よね！ そのうちのひとりがパーティーのだれかの生き別れのお兄さんだったり、昔お世話になった恩師だったりするのよ！ ああ、肌で感じるゲームの醍醐味！ やっぱりいたのねー、四天王」

有里沙のオタクセンサーが反応していたようだ。恍惚とした表情で、愛おしげに少女を見つめる。

「で、他の四天王のかたたちは？」

「最後まで聞きなさいよー！」

少女は地団駄を踏んだ。そんな仕草もかわいい。

美琴はふと思いついて、少女の前に歩み出た。いくらこの少女が敵だとしても、美琴の知らないところで極悪非道なことをしていたとしても、どう考えてもいまここで戦おうという気にはならなかった。いかにもモンスターという外見ならまだしも、角が生えている以外はごく普通の女の子なのだ。ましてや、会話を交わしてしまった。

ならば、やるだけ無駄だとしても、戦わないですむ道を模索したいと思つた。

「あの……あなたは、魔王さんに、なんていわれたんですか？ わたしたちを倒せって？」

尋ねると、少女は訝しげに眉根を寄せ、美琴を真つ直ぐ見返してきた。

「勇者一行が来るから相手をしろといわれたのよ。アンタたちがそ
うでしょ？」

「違います」

きつぱりと、美琴は否定した。ええ、と驚きを隠せない様子で、有里沙と良太郎が美琴を見る。相変わらず、田中はおもしろそうに傍観を決め込んでいる。

「もしかして、わたしたち、勇者の一行に見えるんですか？」

見えない自信があった。中学生に、高校生二人に、胡散臭いホスト。しかも、基本的に引きこもっていたので、顔も知られていないはずだ。

少女は、ゆっくりと考えて、首を左右に振る。

「……そうね。見えないわ」

「よかった、誤解が解けて。勇者ならわたしも、噂を聞いたことがあります。すごいマツチヨな大男らしいですよ。魔王さんの気持ちを少しも考えない、自分勝手に傲慢なひとらしいです」

普段、どちらかという引つ込み思案な美琴が、一言一言告げると、妙に説得力があった。少女は思案顔のまま黙り、しばらくして、当然の質問をする。

「じゃ、アンタたちは、なに？」

美琴はやわらかく微笑んだ。待ってました、という笑みだ。

「魔王さんの考えに共感し、ぜひなにかお手伝いをしたいと思い、やってきました……」といって、信じてもらえますか？ 信じられないなら、魔王さんとお話している間、仲間を一人、ここに置いていきます」

「……………」

少女はじつと美琴を見据え、考えを巡らせているようだった。

有里沙も良太郎も、田中も、おとなしくやりとりを見ている。その様子と、登場の際の緊張感のないやりとりとが、決め手になった。やはりどう見ても、勇者一行だとは思えない。

「いいわ」

勝った、と美琴は思った。

戦わないですむのなら、それがいちばんだ。

「ありがとうございます。一応、ひとり置いておきますね。 田中さん、よ

るしく」

やっぱりね、と田中は苦笑した。

ゲートタワー一階は、エントランスホールになっていた。入ってすぐの正面に、半円形の受付カウンターがあつたが、当然、ひとの姿はない。

ホールの右手前に土産物の売店、その奥には「伊南市の歴史」と銘打たれた蔵書コーナーがある。さらに向こう側にエレベーターと階段。左側は多目的スペースになっているのか、観葉植物とベンチが設置されてあるのみで、がらんとしている。

それほど古めかしくもないのに、だれもいないためか、妙にさびれて見えてしまう。普段なら音楽のひとつも流れているのだろうが、息づかいが伝わるほどの静けさは、不気味でもあつた。

「だれもいねーな。やっぱりボスは最上階か」

つまらなそうに、良太郎がぼやく。あたりまえでしょ、と答えて、有里沙が先頭を切って直進していく。

美琴は、立ち止まった。

「有里沙先輩、良太郎先輩」

呼び止めた。二人はすぐに振り返り、美琴が真剣な顔をしていることに驚く。

「ラストダンジョンだからって、緊張することないわよ」

わかっでいて、そんなことをいう。美琴はその優しさに頬をゆるめたが、それでも、うやむやにするわけにはいかなかった。

「いくつか、わかったことがあります」

良太郎が不機嫌そうに顔をしかめ、有里沙は大きく息を吐き出した。

「……だから、あのホストと離れたの？ いいわ、聞かなくてもいいことは、聞きたくない」

「でも、聞いてください」

良太郎はうなずかなかつた。有里沙は観念したように、美琴の真

っ直ぐな目を見返す。

「たぶん、もうあまり、時間がないです。有里沙先輩、田中さんがゲームオーバーの定義について話したこと、覚えてますか？」

「魔王の目的によるから、わかんないって話じゃなかった？」

「いいえ」

美琴は、首を振った。良太郎にとっては初めて聞く話だったので、やっと美琴に向き直る。

「世界そのもののダメージが一定値を超えた段階で、ゲームオーバーと判断される場合がある。田中さんは、そういいました。この場合の『世界』は……わたしの予想ですが、『ティピカルサーガ』の世界のことだと思います。だとしたら、たぶんもう、ゲームオーバーに近いところにいる」

「……どういうことだ？　そこまでダメージ負ってねえだろ」

「ばかね」

姉に一蹴されて、良太郎も気づいた。もとの世界にとって被害はゼロだと、有里沙はいつていたのだ。ならば、『ティピカルサーガ』の世界にとっては、どうなのだろう？

「不思議だったんです。世界が融合してるっていいながら、もとの世界にあった店に、向こうの世界のものが商品として並ぶことはない。カジノヤ、武器・防具屋、マジックショップ……まるごと、そのまま、この世界に来てる。そこで働くひとたちも、ぜんぶ」

「気づいたわ。……モンスターにやられたっていう被害者も、たぶん全員、そうよね」

「だと思えます」

「がん、とカウンターを殴りつけ、良太郎は美琴を睨んだ。

「わかってて、それでもやるのかよ。……こういうの、茶番ってーんだろ。要するに、おまえはあの田中つてのに祭り上げられただけだ。おまえがやらなきゃひとが死ぬって、責任感をあおられてな」
「でも、……ゲームの世界でひとが死んだとか、やつぱりぴんときないのは確かですが……それでも、このままゲームオーバーになっ

たら、こつちの世界がどうなるかわかりません。だれかがやらなきゃ終わらないなら、やっぱり、わたしがやりたいんです」

「いいたいことはなに？」

辛辣ないかたになつてしまったことに気づいたが、それでも有里沙は、そのまま続けた。「……決意表明？」

いまさら、とはいわなかったが、そのニュアンスが存分に含まれている。

いいえ、と美琴はきっぱり否定した。

「たぶん、わたしがやらなくても、いつかこのゲームは終わります。田中さんがいる限り。何度でもロードして、やり直して……いままです、そうしてきたみたいに。いいたいことは、そうじゃなくて」
「なにか、反論めいたものをしようと良太郎が口を開いたが、それを遮って、美琴は告げた。

「死なないでください。お二人は、わたしと違って、やり直しがきかないから。わたしが死んでも、ゲームの世界をリセットすればいいんです。また田中さんが、新しい主人公を作るでしょう。……でもお二人は、たぶんそういうわけにはいかないから、死なないでください、絶対」

有里沙はロッドを持ち上げた。そのまま、美琴の頭上に振り下ろす。がん、と鈍い音がして、美琴は頭を抱えてうずくまった。

「それ以上いうと殴るわよ」

「……ご、ごめんなさい」

美琴の目に、涙がにじみそうになる。

泣いてはダメだと、必死で我慢した。たとえ、あまりの痛さに、
といいわけが使えるとしても。いまここで、糸を切らすわけには
かない。

「……俺も殴つていいか」

良太郎が、ナックルを装備した拳に息を吹きかける。さすがにそれは生死に関わりそうだったので、美琴は急いで首を振った。愛の鞭はひとつで充分だ。

「これで、こつちの話は終わったけど。いつまで待ってくれるの？」

突然、有里沙が上を向き、空間に向かって声を張り上げた。頭を押さえながらも、美琴はなんとか立ち上がる。良太郎は戦闘態勢に入り、腰を低くして構える。

「……なんかいるのか？」

「幽霊？」

美琴は真剣にいったのだが、良太郎に呆れきった目を向けられた。得意げに、有里沙は胸を張る。

「ダンジョンに入ったのにモンスターがいないなんて、中ボスが出てくるエリアだからに決まってるでしょ。こつちのイベントのために気を遣ってくれたとも思えないし。さあ、出てきなさい！」

美琴と良太郎は、息を飲んだ。有里沙も黙って、来るであろう敵の登場を待つ。

たっぷり十数秒待って、良太郎のすぐ隣の受付カウンターから、ぬっと男が顔を出した。

「うお！ びっくりした！」

慌てて良太郎が飛び退く。カウンターの下でずっと屈んで隠れていたらしい男は、伊達男という称号の似合う風貌をしていた。金髪に、少し垂れた青い目。都会の若者のように、ズボンをずらして履いている。頭には、小さな角がひとつ。

男は、んー、と伸びをした。

「呼ばないで欲しかったなー。中途半端に登場するの、いやだったのに」

といわれても、どう答えればいいものか。少し考えて、美琴はばかり正直に尋ねた。

「じゃあ、通ってもいいんですか？」

男はもともと細い垂れ目をさらに細め、にやりと笑う。

「いいよ。おもしろい話聞けたし。グラナドルのおっさんが、ずっと不機嫌な理由がわかったよ」

「……おっさん呼ばわりかよ」

良太郎が思わずつつこむが、その呼び方には親しみが込められていた。男は、体重を感じさせない身軽さで、ひよいとカウンターを飛び越える。

「あのひとさ、勇者一行が現れたら相手しろとはいったけど、倒せとはいわなかったんだよね。それってたぶん、意味があつたんだろうし。どうせ倒しても倒しても、なかったことになるみたいだから、いいよ、通って。オレ、無駄に疲れること好きじゃないし」

「あなたも、四天王？」

有里沙に問われ、男はあっさり頷いた。

「……なんなの、ラストダンジョンでいきなりわいて出てきたくせに、四天王のこのキャラの濃さ……！ 侮れないわ、さすがTS！ 第四シリーズでゲーム化しないかしら。……あれ？ でもあたしが忘れてるだけで、第三シリーズの登場キャラ……？」

ぶつぶつと、有里沙がなにかに衝撃を受けている。

「あと二人、まだ上にいるけど、そっちは頭固い連中だから、戦うことになるんじゃないかなー。まあ、ガンバッテ」

男は、ひらひらと手を振った。少しためらったが、美琴は心から頭を下げる。

ゲームの世界に生きるひとたちというのが、どういふものなのかわからなかったが、外で会った少女も、いまここにいる男も、敵対しなければならぬ人物とは思えなかった。本当は、魔王とでさえ、明確に戦う理由があるわけではないのだ。

「おっさんを頼むよ」

背後から、声をかけられる。振り向かず、三人はエレベーターに乗り込もうとする。

その瞬間、地面が揺れた。

立っていられないほどだ。美琴と有里沙が膝をつき、良太郎はとっさに男のほうを振り返る。通っていいといいながら、不意打ちをしかけてきたのかと思っただのだ。

しかし、彼の目に飛び込んできたのは、信じられない光景だった。さっきまで手を振っていた男の額に、鋭い針のようなものが突き刺さっている。

「貴様の忠誠心は、そんなものか」

「ならば、いらぬ」

針を突き刺した男は、二メートル以上はあるという巨体だった。ひとようであるのに、背中から翼が生えている。鳥や虫のそれとは明らかに異なり、翼の形に伸びた骨に、皮膚が張り付いているような、生々しいものだ。濃い茶色の短髪から、やはり角が突き出ている。

もうひとり、一見すると華奢なぐらいの女性だ。黒く長い髪を後ろでひとつに束ね、袴のようなものを履いている。手には、長刀のような長い武器。

いつの間にか、地面の揺れもおさまっていた。急激に静まりかえったホールで、悲鳴もなく、男が倒れる。すでに事切れていることは、一目でわかった。

「な……」

言葉にならない。それでも美琴は立ち上がった。

怒りを込めて睨みながら、有里沙も体勢を立て直す。

「意外そうじゃな。仲間どうしてなぜ、と思っておるのか？ ういのう」

女が嘲笑した。端正なひとつひとつのパーツが歪むことで、ぞつとするほど妖艶な笑みになる。翼の男は、顔の筋肉を動かさないまま、突き刺した針を引き抜いた。針に見えたそれは、ひどく鋭利な爪のようだ。五本の指すべてから、すらりと伸びている。

「我らは、真にグラナドル様に忠誠を誓っている。忠誠心の揺らいだ者は、死するが道理」

「……どうでもいいわ。聞きたくもない」

有里沙が吐き捨てる。美琴も良太郎も、同じ思いだった。

美琴の脳裏に、転がった少女の顔が思い出される。本当は実在し

ないとか、そんなことは、問題ではなかった。さつきまで話していたのに、目の前で死んだ。こんな思いはもう二度としたくないと、あれほど思ったのに。

「よもや戦う理由がないとはいうまい？ 大義名分が必要ならば、いくらでもくれてやるぞ」

「志が違う。戦うのに、これ以上の理由が必要か」

女は長刀を構えた。男は、爪をそつと舐める。

「礼儀はわきまえている。我はリグズ」

「妾は紅」

二人は、冷えた目を真つ直ぐ三人に向け、声を揃えた。

「いざ」

*

「あー、わかつちやつたかも。アンタたち、結局、勇者一行？ で、アンタが勇者を作ってるっていうワルモノか。グラナドルさまが、そんなことおっしゃってたわ」

自動販売機で買ったジュースを仲良く飲みながら雑談するうちに、唐突に少女はいった。どうでしょう、と田中は曖昧に笑む。

「じゃあアタシ、勇者一行通しちゃったのかあ。……まあいっか、グラナドルさま、やつつけるとはいわなかったし。なんか、あの子、ワルっぽくなかったし」

空のペットボトルを振りながら、少女はぼやく。それから、すとんと地面に座り、田中を見上げた。

「なんであんなヘンな勇者なの？ なんか狙いあんでしょ？」

田中は、少しの間思案顔で黙りこみ、それから提案した。

「聞いても理解できないと思うけど……それにちゃんと答えたら、ここ通つてもいい？」

「いいわよ」

わくわくと瞳を輝かせ、少女は答えを待つ。田中は、もったいぶ

るように咳払いをひとつ。

「最初にパラメーターに振り分けられる数値が決まってね。過去五人は攻撃力や魔力なんかを強化して失敗したから、今回は運と知力にほとんどをつぎ込んだんだ。おかげで、もともとの知識のないやる気のないのになっちゃって、最初はどうしようかと思ったけど……結果オーライかな」

少女は、思い切り眉をひそめた。全身で、なにいつてんのこいつ、といている。分かり切っていた反応だったので、田中は気にしなかった。

「じゃあ、通らせてね」

そういつて、階段を一段上がるぐらいの力で、トン、と地面を蹴った。そのまま、風船のように空に飛び上がる。

「……飛んでっちゃった……」

やがて見えなくなるまで、呆けたように見送って、少女は頼杖をつく。

「アタシは、グラナドルさまが笑ってくだされば、それでいいんだけどなあ」

その願いが叶えられなくなってから、ずいぶん長い時間が経ってしまっていることを、少女は知っていた。ひどくつまらない役回りだという気がして、ちえっと舌打ちをした。

7 「想っから」

紅が長刀の柄で床を叩くと、地震のように地面が揺らいだ。そのたびに姿勢を保つことに専念させられ、美琴たちに隙が生じる。そこを逃さずリグズが突っ込み、鋭い爪で斬りかかる。背中が一度風を切るだけで、彼は恐ろしい程の瞬発力を見せた。防御力の上げた衣服でも防ぎきれず、少しずつ、三人の肌が露出していく。それはそのまま、防御力の低下を意味していた。

どう考えても、劣勢だった。良太郎はともかくとして、美琴や有里沙は、決定的に実戦経験が不足していた。とっさに動けないのだ。「勇者一行とはこんなものか。無謀と勇気をはき違えているとみえる」

リグズが笑う。有里沙はきつと眉を跳ね上げた。

「あんたいちいち、ボキャブラリーが貧困なのよ！ もっと自分の言葉で話さない！」

叫びながらも、彼女は良太郎の後ろに隠れるようにして、呪文の詠唱を始める。それは承知していたので、良太郎も有里沙を庇うように構える。呪文を唱えている最中に攻撃されたのでは、ひとたまりもない。

「黒の王、白の道化師白の道化師白の道化師……もいっちょ白の道化師、で、ヴォール！」

ロッドを真っ直ぐに紅に向け、有里沙が叫ぶ。眉ひとつ動かさずに、紅がついと避けようとする。そこに美琴が、勢いだけで突っ込んだ。

「これで！」

攻撃が当たるとも思えなかった。スピアで突く気は毛頭なく、ポケットに常備してある煙玉を、紅の足下に向かって投げつける。

当然、戦闘から逃走するのが目的ではない。少しでも、不意をつ

ければいい。

「っ？」

さすがに隙が生まれた。

「ナイス、美琴ちゃん！」

風が紅を包んだ。ぐらりと身体が揺らぎ、倒れるかというところで宙に浮く。立ち上がるうとして、紅は、地面に足がつかないことに気づく。

「とりあえず、地震は封じさせてもらったわよ」

「浮遊か。やるのがせこいのう」

紅はおもしろそうに瞳を細める。リーチ以上に近づいてしまった美琴は、慌ててスピアを構えて間合いをとった。いちばん狙われる位置だ。

「そなたが件の勇者か？ 弱々しい姿をしておる」

宙に浮いていることなどかけらも意に介さず、悠然と長刀を構える。美琴は息を飲んだ。

「こんな、いかにも強そうなひとと戦って、勝てる気が少しもしない。」

しかし、逃げるわけにはいかなかった。

リグズのいうとおりなのだ。志が違う、理由は、それだけでいい。

「腹くくります。負けません！」

不思議と肝が据わっていた。生きるか死ぬかとなれば、もうやるしかない。

「こっちすぐ倒すから、保たせるよ！」

良太郎が声を投げる。彼は実に見事に、リグズの攻撃をいなしていた。しかし彼から攻撃するようなことはなく、防戦に徹する。うしろでは、有里沙が呪文を唱え続けているのだ。

「赤の女神黒の使徒、闇の咎人、ジェル！」

ロッドから光が伸び、リグズの両足が凍る。すぐに効力が消えそうではあったが、その隙を逃さず、良太郎が地面を蹴る。

「遅い！」

リグズが吠えた。氷が溶けた瞬間、有里沙のスペルが続く。

「黒の道化師、黄の女神黄の女神、光の王、ラピド！」

それは良太郎に向かって放たれた。良太郎の動きがぐんと加速し、リグズの目の前に瞬時に詰め寄る。思い切り、拳を振り下ろした。

「が！」

顔面をしたたかになぐられ、リグズがよろめく。そこへすかさず、有里沙がたたみかける。

「黄の女神、黄の王　アグラヴェエ！」

「うおりゃっ」

もちろん、良太郎も手を止めるはずがなかった。ダメージを増幅させるといふ有里沙の魔法により、リグズの顔面が不自然に歪む。さらにそこに、良太郎が連続で拳をたたきつける。

「っ」

声にならない叫びをあげて、リグズが背中から倒れた。

肩で息をしつつ、有里沙が勝ち誇ったように笑う。

「あらやだ、四天王ってその程度？」

「すごいです、二人とも！」

「みつともないのう」

長刀とスパアでつばぜり合いをしつつ、美琴と紅が感想を述べる。美琴にしてみれば、振り下ろされた長刀をとっさに防いだだけだったのだが、力が拮抗しているのか、そのまま動けなくなってしまうていた。跳ね返して攻撃をしかけようにも、その瞬間に切られそうだった。

「弱々しいなどと、失礼であったの。見た目よりも、よほど、できおる」

ぎりぎりと間合いを詰めた状態で、紅はそう贅辞を述べた。美琴は少しでも力を抜ければ飛ばされそうなのに、平然といわれてもまったく嬉しくない。

「少し本気を出そうかの」

そうつぶやいて、紅は長刀をくるりと回した。力の方向が前でも後ろでもなく、円上に流されてしまったことで、美琴は前につんのめる形になる。

やられる、と思うよりもはやく、身体が勝手に動いていた。頭から床に転がり、一回転すると、そのままスピアを突き上げる。

紅は跳躍しようとして、自分の身体が浮いている事態に気づいた。思い切り踏み切れない分、高さが足りず、スピアの切っ先がのど元をかすめる。

「はっ！」

美琴はすぐに体勢を立て直すと、着地する紅にまっすぐスピアを突き出した。紅はこともなげにそれを打ち払い、スピアの柄の下を通って刃を繰り出す。とっさに手で防ごうとして、腕を切り裂かれる。露出している腕に一筋の切り傷　鮮血がゆっくり溢れた。思ったよりも、浅い。

「わたし、赤い血が出るんだ」

「なにを世迷いごとを」

紅は笑ったが、美琴は本気だった。それだけのことが、少し嬉しかったことを、自分でも不思議に思う。

「レコンフォール！」

声かとどろき、紅の足下で青白い光が炸裂した。さつと後ろに跳び、避けられてしまうが、十分な間合いが生まれる。

いつのまにか、有里沙が美琴の背後に回り込んでいた。ちらりと視線を送ると、良太郎はリグズとやり合っている。一度ダウンしたものの、すぐに復活したらしい。

「善戦してるじゃない」

恐ろしいことをいわれて、美琴は慌てて首を振った。

「ぜんぜんです！」

心からいっぱいいっぱいなのだ。しかし、すぐにやられてしまわないところを見ると、やはりレベルを上げることが関係してあるらしい。考えるよりも早く、身体が動く。

「……悪いけど、たぶん、倒せないわこれ。やり合っのが精一杯。ちょっと大技いくから、その隙に美琴ちゃんだけ上へ行って。どっちに転ぶにしろ、それで話がつくんでしょ？」

「は？」

美琴は目を丸くした。

「どうしてそういう話になるんですか？」

「定石だからよ」

きっぱりと有里沙がいう。ちょっといつてみたかったの、と続けた。

しかし、冗談ではないようだった。胸ポケットからなにやら紙切れを取り出し、呪文を唱え始める。ずいぶん長い。よく覚えているなど感心していたのだが、やはりカンペは必要らしい。

その間も、もちろん紅は待つてはくれなかった。繰り出される刃をどうにか防ぎ、美琴は有里沙にそれが届かないようにと、距離を保ちつつもできるだけ前に出る。やはり魔法は厄介なのか、紅の長刀は明らかに有里沙を狙おうとしていた。

紅は長刀を高く振り上げたかと思うと、美琴を柄で打った。不意を突かれてよろめいたところに、身を翻して美琴を突破しようとする。

「有里沙先輩　　！」

「エブウル・マン！」

紅が有里沙の前に躍り出るより早く、スペルが放たれた。ホール全体　床だけでなく、壁も天井もすべて　が黒く光りを放ち、一瞬の後にずしん、と重い衝撃。

地震、などというなまやさしいものではなかった。まるで全部の柱を一気に抜いたように、壁も天井も崩れ始めたのだ。床がひび割れ、露出した鉄骨が踊るように跳ねる。

「あ、あ、有里沙先輩ーっ？」

まさに敵も味方もなかった。振ってきた瓦礫が自分を避けてくれたことは、運がいいとしかいいようがない。しかし有里沙は、なお

も詠唱を続けていた。

「白の使徒、緑の姫、光の咎人　デプラセ」

声が聞こえたと思ったときには、美琴は階段の前にいた。いまの魔法によるものなのだろうか。事態がのみこめず、目の前の光景を見る。床も壁の天井も波打つなか、確かに有里沙がこちらを見て、叫んだ。

「行って！　あんたはあんたで、ケリをつけるんでしょ！」

美琴は悲鳴をあげるように息を吸い込んだ。泣きそうになった。

ここで二人を置いて、どうして先に進めるといつのか。

「あれは自分に酔ってんだろ、オタクだから。　いいから行けよ」

瓦礫の下から這い上がりながら、意外に近いところで良太郎がいう。彼の身体の、至る所に傷が見えた。美琴は、息を飲み　決意した。

自分がここにもいても、なにも変わらないならば

「　行きます」

後悔しないように、しっかりと、いった。ホールに背を向け、階段を駆け上がった。

タワー全体が崩れるのではないかと思われたが、美琴には理解のできない魔法の力が働いているのか、ホールを出てしまえば、あの惨状は嘘のようだった。美琴は唇を噛みしめて、ひたすら階段を上った。少しでも足をゆるめたら、そのまま戻ってしまいそうだった。最上階に決まっていると、二人がいつていた。それを疑おうとも思わない。途中の階には目もくれず、ただただ走る。何階まで上ったのかはわからない。ただ、唐突に、階段が途切れた。

美琴は、スピアを握りしめた。息を吸い込んで、階段口を抜ける。

そこは、展望台だった。

階段とエレベーターをぐるりと囲むようにして、黒光りする床が続いている。なにもないのではないかと錯覚するぐらい澄んだガラ

スの手前に、望遠鏡が点々と設置されている。
一瞬我を忘れ、そこから見える景色に、見入った。綺麗だと思っ
た。

立ち並ぶビルや家々、森や川　それらが雑然と共存しているの
に、美琴には、不自然だとは思えなかった。人工物と自然とを繋ぐ
ように、鉄道が延びている。その向こうに見えるのは湖だろうか
さらに遠くには、空。

青、としか形容できない、見事な空が、美琴を見ている。
少し、悲しく思った。

こんなにも綺麗なのに。

「……あなたが欲しいのは、この世界ではないですよね」

姿は見えなかったが、いると確信していた。気配もなく、美琴の
隣に、漆黒の魔王が並ぶ。

魔王、グラナドル　そのどこか寂しそうな瞳の意味も、いま
なら、わかる。

「終わらせませんか。どうやっても、あなたの望むものが得られな
いなら、続ける意味なんてない」

そつと、魔王を見た。魔王は感情のない目で、広がる景色を見て
いた。

「わたし、あなたのこと知らないし、あなたに恨みもないし、あな
たの目的だつて見当もつきません。けど、この世界にそれがないこ
とはわかります。……あなたは、寂しそうだから」

「……寂しい、か」

く、と魔王は笑んだように見えた。

しかしどうやっても、刻まれた寂しさの色は拭われない。

美琴は、黙って、魔王にスピアを差し出した。数時遅れて、ゆっ
くりと、魔王が向き直る。

差し出されたスピアと、美琴とを、見た。

「その結論に行き着いた勇者は、貴様が初めてだな」

美琴は、そうですね、と笑った。

これはもう、決めていたことだ。

「終わらせれば、その隙をついて、世界をもとに戻すんだそうです。最初は、あなたを倒さなければ終わらないと、思っていました。でも、勇者が死んで、ゲームオーバーになっても、結果は一緒ですよね？」

「わかっているのか」

そこには、驚きも、悲しみも喜びも、なかった。ただ問う。

美琴はわかっていた。だから、目を逸らさず、待った。

「そこに、私も……貴様もいなくなったとしても、それでも、得た
いと？」

「なくしたくないです。絶対に」

なにを、とは、いわなかった。

しかし魔王にも、わかっていた。

ある意味では、二人はひどく近い存在であったのだ。

「……そうか」

魔王は、右手をゆっくりと持ち上げた。埃を払うように、ごくかすかにその手を振る。

周囲のガラスが消え、一気に風が吹き込んできた。目を開けていられないほどの強風に、美琴は飛ばされないように、精一杯足に力を入れる。

しかし、やがてそれもおさまる。目を開けると、魔王がこちらを向いて立っていた。あと数センチで、後ろはもう空だ。

「お、落ちちゃっう！」

「落ちようとしている」

無表情で答えた。美琴はとっさに助けようと駆け寄る。

「来るな」

鋭くいわれ、止まった。張り上げたわけではないのに、その声には、従わせるだけの力があつた。

「なんの防御もなく、ここから落ちれば、私でも死ねるだろう。それとも、あえて、業を負いたいのか」

美琴は答えられなかった。しかし、このまま魔王が身を投げるのは、あんまりだという気がした。

「どうして　と、いまさらながらに思う。」

「どうして、こんなことに　目の前の、この寂しそうなひとは、そんなに悪いひとなのだろうか？」

「それは、知らないが故の思いだったかもしれない。」

「しかし、美琴は確かに、なにも知らないのだ。だから、仕方ないことだという気がした。」

「あなたが業を背負う必要も、ないはずです」

「だから、いった。魔王は、小さく眉を上げた。」

「ならば貴様が、手を下すか」

「はい」

「美琴は、ごめんなさいとは、いわなかった。」

「それは、違うと思った。」

「ごとりと、スピアを置く。一步、二歩と、魔王に歩み寄る。」

「両手を、そっと伸ばした。魔王との間に、ほんの数ミリの隙間。」

「もし、万が一　なかったことに、ならなかったら……また、会えたらいいですね。そのときは、敵かもしれません」

「そんなことは万に一つも有り得ないだろうと、お互い解っていた。」

「魔王は、ふっと微笑んだ。」

「感謝する」

「目を閉じず、美琴は両手を突き出した。」

「漆黒の、どこまでも悠然たる魔王の姿が、空中に放り出された。」

「世界中のすべてが、うつすらと輝いているようだった。」

「空の青が、輝きによって白みを帯びたのを見て、美琴は少し残念に思う。どうせなら終わりまで、ずっと見ていたかったのに。」

「まるでそうなることが決まっていたように、田中がふわりと浮いてきて、展望台に着地した。のんきにスーツのシワを伸ばして、ミ

コトくん、と呼びかける。

ひどく緩慢な動作で、振り返った。田中はいつもの笑みを浮かべていた。

「おめでとう、ミコトくん。ゲームクリアだ」

「田中さん」

名を呼ばれ、ん、と田中は首をかしげる。その真剣な声に、からかうようにいった。

「なに、愛の告白？」

「はい」

「……ミコトくん、キャラ変わってない？」

なんの仕返しかと構えたが、冗談ですの言葉がなかったので、思い直した。目の前で、うつすらと輝いている少女を、見る。

美琴は、いままでにないぐらいおだやかに、そつと微笑んでいた。「パスタ、おいしかったです。田中さんと過ごしたの、なんだかんだいって、楽しかった。この世界に、こうしていられたこと、感謝しています。ありがとうございます」

田中は答えなかった。ただし少し困ったように、苦笑した。

「美琴ちゃん！」

「吉川！」

階段から、桜井姉弟が飛び出してくる。全力で駆け上ってきたのだろう、二人とも肩で息をしていた。

「ど、どうなったの？ 下の二人、いきなり消えて……って、なんか美琴ちゃん光ってない？」

いわれて初めて、美琴は自分の身体を見た。世界が光っているように思われたが、自分も光を放出しているひとつだった。

「有里沙先輩」

「なによ！」

まるでケンカを売るように返事をされて、美琴は思わず破顔する。「いろいろ、ありがとうございました。有里沙先輩に会えて良かったです。本当のお姉さんみたいで。大好きです、先輩のこと。ナンパ

計画がなくなっちゃうのは、ちょっと残念だけど」

「ち、ちよつと、やめなさいよ！ あたしそういうの嫌いなんだから！ なにいつてるの！」

有里沙はもう、ほとんど泣きそうだった。美琴はその隣の、良太郎に視線を移す。

「良太郎先輩も、いっぱい助けてくれて、ありがとうございました。もう少し一緒にいたら、たぶんわたし、恋してました。そういうのも、楽しかっただろうな」

「て、てめえ、テキトーなことってんなよ！ 怒るぞ！」

そう怒鳴る良太郎の身体のおちこちに、やはり生々しい傷が見えて、美琴は少し目を伏せる。感謝している。しかし、自分を責める気持ちは、どうしても拭えない。

美琴の視界が、だんだん、色く透明になっていった。世界が輝いているのか、自分が消えそうになっているのか、美琴には判断がつかない。

有里沙が駆け寄り、美琴を抱きしめようとした。しかしもう、その手には、なんの感触も得られない。それでも、消えてしまわないように力を込めて、有里沙は叫んだ。

「想うから！」

美琴には、その声も、もうずいぶん遠くに聞こえた。

「想えば、世界ができるんでしょう？ そういったわよね？ あたしも良太郎も、朝も昼も夜もぜんぶ、美琴ちゃんのことばかり考えるから！ 寝ないで、ずっと……ずっと、想うから！」

聞こえる声は、涙声になっていた。ありがとうといったつもりが、声にならない。もしかしたらもう、消えてしまっているのかもしれない。

「田中！ あんたそれができなかつたら、丸坊主よ！ わかっているんでしょうね？」

まわりの景色も、大切なひとの姿も見えないのに、最後に田中が大きくため息を吐き出したところだけ、妙にくつきり、見えた気が

した。

田中が億劫そうに上げた右腕が、静かに輝いている。そこに光が集束していく。

意識の消えかけた美琴の耳に、かすかに、田中の小さなぼやきが届いた。

「……減給かなあ」

季節は秋になっていた。

窓の外では、色づいた葉が風に揺れている。チャイムが鳴り響き、灰色のブレザーの高校生たちが、帰り支度を始める。

二年一組の教室では、楽しそうに雑談する声があった。そのなかのひとりが、ふと思いついて、昨日のできごとを話し出す。

「ねえ、昨日の放課後、変な中学生が来たの。ひとを探してるみたかったから、だれか呼ぼうかって、声かけたんだけど」

話を聞いていたひとりが、知ってる、と笑い出した。

「ちよつとウワサになったよね。あれでしょ？ 変な質問！」

「なにそれ？ なんの話？」

男子生徒も寄ってきた。最初に話していた少女は、笑いをこらえきれない様子だったが、もったいぶったように声をひそめる。

「それがさ、なんていったと思う？ 『ティピカルサーガ』っていうゲームについて、知っているひとを探してるんですが、だって！ そんなの、みんな知ってるよねえ？」

現実サーガ

7 「想うから」(後書き)

読んでいただき、ありがとうございました。
心から、感謝いたします。

もしよろしければ、一言でいいので、評価・感想等いただけると幸いです。

今後の執筆活動の励みになります。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7272c/>

現実サーガ

2009年7月1日21時17分発行